
魔王と魔王の友達と

千夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と魔王の友達と

【Nコード】

N5043Q

【作者名】

千夜

【あらすじ】

どこにでもいるありふれた少年は、ある日神殺しの魔王となった。護堂という同胞の友人を得た魔王が、久々に活動を開始する。

処女作かつチートオリ主ですのでご注意ください。
ゆっくりめの更新になるかと思います

注意書き

今まで小説を書いたことがありませんので色々おかしい点も多いと思います。よろしくお願いします。

・・・初めてが二次創作とかハードルが高い気も若干あります（苦笑

以下注意点をば

・前述の通り処女作です

・オリ主系です。更にチートです

・カンピオーネ！なのに神話を紐解いたり（多分）ありません

・神々に関しては一応調べていますが無理矢理感や変な点とかあるかもしれません

・原作と矛盾するかもしれません。独自解釈おそらく入ります

・護堂一行の中で恵那だけでも下さい（笑 エリカや祐理、リリアナは護堂一行で変わらない予定です

以上が平気、という方はよろしくお願いします。最後、できればアドバイス、批評、ご指摘等よろしくお願いします。

§1 魔王になった日

某県某市駅前カラオケ店706号室、ドリンクバー付きフリータイム。学生料金で1人460円也。

友達連れで来るには最高の場所である。心から思う。しかしそれは「友達連れで来るならば」の話。1人でカラオケなど御免被る。寂しい。

ぶつくさ文句を言う水羽黎斗、みずばね れいとただいま1人カラオケ挑戦中。

「やっと60曲…… ノルマまであと40曲か……」

賭けなんてしなきゃよかった。そう思うが全ては後悔しても後の祭りである。

二学期期末テスト最下位は1人カラオケで100曲歌うこと。曲目及び採点された点数はその都度メンバーにメールで一斉送信すること。800点中421点でボロ負けした黎斗は店員さんの「今日は混んでおりました……」という一言で20人は入れそうな大部屋を独占である。端から見るとかなり寂しい人に見えるだろう。(ちなみに点数平均は580、最高は783だった)

「エタブレ75点、次は風にあそばれて……っと」

カラオケの点数は60〜70をいったりきたりである。もらい泣きの81点が最高であったりする。

時刻は現在午後5時。……はたして終わるのだろうか？

午後7時。現在78曲目。

「終わらねー……　　つか無理。もう無理……」

メロンソーダを飲みながらため息を一つ。炭酸と甘みが疲れた喉を刺激し心地良い。癒しのひととき。

そして気づく。妙に暑い。もうじき冬なのに服一枚汗の出る温度は流石におかしい。いくら歌っていたとしても。扉の外に煙しか見えないのも気になる。

「……け、煙？」

外では、サイレンが聞こえはじめた。消防車だろうか？

「ちょ……嘘でしょ……え……」

気づけば、部屋内にも煙が入ってきている。

「ヤバ……!!」

貴重品を持つ。鞆の中から昨日の調理実習で使った後出し忘れて放置していた三角巾を引っ張り出し口に。背を屈めて扉を開け、外へ。避難訓練の成果は伊達じゃない。

「……!？」

外は煙一色だった。ロクに前も見れない。なぜ今まで気づかなかった、と自己嫌悪をしながら非常口の方角に見当をつけ、進む。

煙はだんだん濃くなっていく。どうやったらこんなに濃くなるのだろうか？ドアノブを捻り、足を踏み出す。段差に躓き、転ぶ。

「おわー!？」

頭から下の階に落ちる、という黎斗の予想は裏切られた。
数秒後、彼は人の上に落下した。

——時刻は多少遡る

翼を持つ者が2人、アルプス山頂付近で剣戟を繰り広げていた。
漆黒の翼を持つ者は片腕を失い、純白の翼を持つ者は片目を失っている。全身の負傷具合は両者とも同程度といったところか。

「バラキエル、そろそろ倒れろ」

「ナメんなサリエル、俺様の悪運が火を吹くぜー!!」

バラキエルは叫びサリエルへ突撃する。相手の剣を体で受けて、
右手の剣で相手の瞳を切り裂く。全ては相手の邪眼を封じる為。

「ぐおお……!?!」

体で受ける、という狂気じみた行動を予測できなかったサリエル
は両目を切り裂かれたが故に、バラキエルに実は致命傷を与えていることに気づいていない。

「へっ、ざまあねえなサリエル。いくぜ、このバラキエル様一世一代の大博打いー！！」

瀕死となってまでバラキエルが狙っていた切り札。召喚術。

ただし、彼の術はひと味違う。何呼び出すかわからないのだ。それは石ころかもしれない。子犬かもしれない。神々かもしれない雑誌かもしれない。そして、この召喚術の真価は対象を呼び出す際に時空を超越すること。過去、現在、未来。そのいずれかから何かを呼び出すのだ。それはまさにハイリスクハイリターン。代償は己の命の一部。瀕死の彼のなけなしの命が、全て掛け金へと変わる。賭博で有名な彼は最後の最後まで一攫千金を目指して果てた。薄れゆく意識の中、彼が最後に聞いたのはマヌケな声。最後に感じたのは、何かが自分の上に落下した感触。

「っっー……」

黎斗が体を起こすと、そこは一面雪景色だった。寒い。自分の下に人がいることに気づき、慌てて退こうとして今度は剣に躓いた。

「痛っ」

「バーラーキーエールー！！」

狂気に染まった声を聞き、黎斗の本能が警鐘を鳴らす。

——ここにいてはいけない

殺気にあてられて立つことすら叶わず、四つん這いになって逃げようとするも、右足を鋭い痛みが襲う。

「ああー!!！」

——いたいいたいいたいいたい!!!!!!

蹴られて飛ばされ背が地にぶつかった。口から血が流れ出る。頭上には目を瞑った白い翼の男。剣をこちらへ向けてくる。助けを求めて必死に周囲の大地に手を伸ばす。指先に、冷たい感触。男が振り下ろしてくる剣に恐怖を感じ、目を瞑りながらもそれを防ごうと手を前に出す。

ぶすっ、という生々しい感触。

「がぁ……」

呻き声が聞こえ、目を開く黎斗。彼が突き出した剣は男を貫いていた。

「あ……あ……」

もう限界だった。黎斗は意識を、手放した。

§2 幽界にて（前書き）

もうちょいで原作開始です。
あと1、2話くらい？

§2 幽界にて

パチ、パチ、と駒の音が響く。

「ほれ」

「……詰み、か。また負けたあああ」

黎斗の呻きが屋内に響く。

「昔から比べりゃだいぶ強くなったよ。ここ数十年でだいぶ追い込まれる事が増えてきたしな」

対局相手は、かつて現世で暴れた雷雨を操る英雄神。

黎斗がこの地に住み着いて数百年が経つ。

七天使の一人サリエルを撃破した後、自身が千年前に跳ばされた事を知り激しく狼狽、逆恨みの如く神殺しを行い続けたが復讐の無意味さに気づいたあとは気楽に生きてきた。もっとも元凶たるバラキエルが復活したなら八つ裂きにしてやる、とは公言しているのだが。

「……通算何敗？」

「さあ？」

「須佐之男命様が8762勝、マスターが91勝です」

風鈴のような涼しげな声で足元から戦績開示をしてくれたのは黎

斗にエルと名付けられた狐。もう100年程生きると千歳となるこの狐は黎斗の使い魔だったりする。まあ人語を介し魔術を察知できる以外は普通の狐と変わりはないのだが。

「勝負は既に終わってしまわれましたか」

穏やかな声とともに襖が開く。微笑みながら入ってきたのは媛と呼ばれし瑠璃の美女。

「その様子ですと今回も黎斗様の負け、といった所でしょうか。

……粗茶ですがお持ちいたしましたのでお飲みになって元気を出して下さいませ」

半ば苦笑いの彼女からお茶を受け取る。

「あ、ありがとうございます。やっぱりスサノオに負けました。……勝率1%くらいか」

自分の発言で落ち込む黎斗。欧州からシルクロードを旅して流浪の末に日本に辿り着いた彼は、須佐之男命と激戦を繰り広げた。戦いの後に芽生える友情というのは、どうやらマンガの中だけでなく実際にあったらしい。すっかり意気投合した彼らは幽世に引きこもり、将棋を指す毎日だ。須佐之男は時たま現世に関与しているようだが、黎斗はしない。屋敷から出ることすら稀である。ダメ人間ここに極まれり、とは彼の弁。

「そういや黎斗、お前嫁とらんのか？神殺しを宣言すりゃ引く手数多だろうに。こんなとこに引きこもって。女嫌いか？」

話題を変えようと未だにへこんでいる黎斗に須佐之男が尋ねる。

「よめえー？ 人生Ⅱ彼女いない歴の僕に何を…… だいたい神殺しを宣言してモテたところでソレ僕じゃなく神殺しっつー肩書きがモテとるだけやん」

「こんのひねくれ者が……」

呆れる須佐之男。

「てめえそんなんじゃ後輩の神殺し共に越されんぞ。俺との模擬稽古以外ここ数百年してねえだろ」

「んー、しょうがないなあ。ちよっくら現世行ってくるわ。百年くらいたら帰ってくるから」

「そうそ……へ？」

「あら？」

「……気のせいでしょうか。私の耳に間違いがなければ今マスターが現世に旅立つ、と聞こえたのですが？」

三人揃って意外そうな顔をする。自分の耳を疑うような表情。

「なによ、言い出しっぺは須佐之男だろ」

「こんなに簡単に行くと言うとは……」

「日本人に神殺しが居るんでしょう？ 会ってみようかな、と。エル、行くよ」

そう言って荷物をまとめる黎斗。彼は自身の持ち物手早くまとめる。

「ん、じゃね。また今度」

須佐之男が気を取り戻したのはしばらく後の話。

「……明日は嵐だぞおい」

家族がこの世界には存在しない。須佐之男に頼んで調べてもらった。彼の調査でないのならば、そうなのだろう。彼が現世へ来た目的の一つは携帯電話の購入である。千年の永きを経て彼の携帯電話は故障したが、内部のマイクロSDは無事だと信じたい。保存した情報の中には家族、友人の写真といくつかのメール。つまり元々平成の世になったら彼は現世へ帰還するつもりでいたのだ。

「ん、これでいいかな」

「周囲に人はいませんよ」

エルを隠すためのリュックを背負った黎斗は手頃な石を拾い権能を発動。石はダイヤモンドに変貌した。これ売り、資金源にする。強欲の悪魔、マモンの権能。宝石、貴金属の類を作り出す。金銀だけでなくレアメタルまで生成してしまうその力は世界の経済をあ

っというまに破壊可能な最強ともいえる力。作り出されたものは貨幣と異なりどんな時代でも価値を持つ。彼はに資金難の文字は存在しない。まあ、あまり大っぴらにすると目立つため少しで十分だろう。

みゃー。みゃー。三毛猫が鳴く。飼い猫だろうか？毛並みが綺麗だ。

「宝石店、知ってる？」

みゃー。

「あ、マジ？ありがと。あとでキャットフード奢るよ」

みゃー。みゃー。

「御主人様が出張じゃご飯大変でしょ？気にすんなって。これから金持ちになる（予定）だからさ」

「……マスター。もうちょつと声を小さくした方が。端から見ると可哀想な人ですよ」

背中からボソツと呟くエルの声。

「……ん、そだね」

みゃー。

「あ、お願い」

さつきより声を下げ猫と話す。猫が歩き始め、彼は後ろをついて行く。

命を持つあらゆる存在と意思疎通が出来る。悪魔カイムの権能。鳥、虫、木々等々……彼は話し相手に事欠かない。彼らは友好的な存在が多く、彼の手助けをしてくれる。もちろん、彼も頼まれればできる範囲で手伝いをする。

宝石店の女主人にダイヤモンドを6万で売り払った彼はキャットフードを大量購入し猫を大勢引き連れて公園に長期滞在したためちよつとした注目を浴びることになるのだが、いかに彼といえどもこの時点でそれは予想できなかったのだった。

§2 幽界にて（後書き）

修正をいくつか。

・・・改行ミスも多々ありました（汗

整理用（前書き）

正直コレは居るのかわかりませんが一応。ここに記載した神以外は会ってない方針で行きたいと思います。

2011／03／30

周辺地域追加っ

・・・コレも誰得なんですけど

2011／05／10

大幅改変、すいません

流れを展開に矛盾出さないでいいように一端リセットしました
替わりに権能追加

ホントは入れないで済めばよかったんですけど、権能が飛び飛びででてくるせいでわかりにくいかな、と。

未熟者だと痛感しました・・・orz

でも権能丸写しだと少し悔しいので権能の元ネタにしておきます
公開していない分は推理してみると面白いかもしれませんよ？

あ、アパートの欄に設定追加

コレ加えてないと9巻の事実に対応できませんので（苦笑
ドサクサ紛れていくつか追加してみたり（笑

整理用

移動記録

アルプス↓欧州↓シルクロード↓インド↓中国↓日本↓幽世
約千年前に神殺しとなる

カール大帝在位時（768～814）と思われる

撃破順

サリエル「退魔の天使／7大天使」

・邪眼

ディオニュソス「狂乱の神／オリンポス12神」

・狂乱

・人間離れした信者の身体能力

ラファエル「四大天使」

・旅人の守護天使

マモン「強欲の悪魔」

・万魔殿建築

カイム「ソロモン72柱」

・言語の悪魔

テュール「天空神」

・フェンリル捕縛

アーリマン「友愛の神／闇の邪神」

・ミトラ教でのアーリマン崇拝

・ 悪の最高神

シャマシュ 「太陽神」

・ ハンムラビ法典

ヤマ 「冥界の神」

・ 最初に死んだ者

・ 地獄の支配者

・ 地藏菩薩は転生する

スーリヤ 「太陽神」

・ 神すら我慢できない輝き

スクナビコナ 「医療の神」

・ 一寸法師の原型

・ 温泉療法の創始者

・ 酒造の神

・ 穀物の化身

ツクヨミ 「月の神」

・ 潮の満ち引き

・ 月暦

オマケ

ロンギヌス 「聖遺物」

・ 目を治癒

・ 神を刺す

地理とかそんなの

・黎斗のアパート

キッチン、トイレ、風呂付き、光通信対応。6畳の畳。洗濯機&乾燥機備え付けでベランダ有りの2階、ペット不可。管理人さんは斎藤さん（67歳、女性）

ちなみに黎斗の部屋は（汚い癖に）異常に清浄、澱みが存在しない。下手な霊山も真っ青なレベルなのだが恵那は「なんか空気キレイだなー」程度にしか考えていない
エリカやリリアナクラスならば一瞬で存在者の力量を予想できるくらい

・宝石店

黎斗がよくマモンの権能で貴金属を作成し換金する店。藤川さん（48歳、女性）の個人経営。最近何故か経営が右肩上がりで売上が増加の一途を辿っている

商店街福引が今回異常に豪華になった元凶

・高校

私立城南高校、1年、護堂と同じクラスなのは本当に偶然
最近立派な蜥蜴が出没するらしい。写真などの証拠が無いのに噂は広まり続け、もはや七不思議の一角に。

・ラーメン屋

学生証入手により大盛り無料になったらしい。黎斗お気に入りのお店主とは顔パスの中。好物は味噌ラーメン（500円）
一番奥のカウンターが（ほぼ）黎斗専用席

整理用（後書き）

どうでしょう？

・・・あと皆さんの小説を回ると能力解説のある方がちらほら。
僕も作った方がいたのでしょかね？
うーん、ご意見ありましたらお願いします。

護堂さんてば1年なんですネ（汗
2年と勘違いしてましたよ
これから修正の嵐だぁ・・・

§3 初の遭遇（前書き）

とりあえず書きため（ってほどじゃありませんでしたね・・・）
放出

§3 初の遭遇

「つ……詰んだ、だと……」

「マスター無様ですね」

道端で冷や汗を流す水羽黎斗、ただいま絶賛迷子中。

猫軍団に振る舞ったキャットフードの残骸を始末し黎斗が向かった先はラーメン屋。都会では目立つであろうエルはリュックの中に潜ませる。腹が減ってはなんとやら。醤油らーめん大盛り（学生は無料らしいので思わず大盛りにしてしまったが学生証がボロボロであったため学割は泣く泣く諦めた）を貪るように食べて会計を済ませる。1000年の時を越えて食べるラーメンは格別だった。何せ1000年近く和食オンリーだったのだ。感動に震え泣きながら食べたら店主のおじさんにチャーシューをオマケしてもらえた。万々歳である。

「ふひひ……… 食った食った」

宝石を換金した時に調べてみたことだが保険証は黎斗が現在所持している物と形が同じ為使えそうである。もちろん、きちんと調べられれば「データ上では存在しない」保険証であることはすぐにわかる。が、そこまで調べられることは滅多にないだろう。つまり控えを取られない範囲で身分証明書を入手したことになる。鼻歌を歌いながら駅前商店街へ歩き出す。

しかし、これが運の尽きだった。浮かれていた彼は「住処の確保」という最大の問題を失念していた。アパートの空き部屋を調べるどころかどこにアパートがあるかすらわからない。木々や動物に聞いてみたが彼らにとってアパートとビルとの区別は難しいらしい。ビルまで案内される事が多かった。アパートに案内してもらえても軒並み満室。

「ネットカフェに住む神殺しとか絶対バカにされるよう……」

絶望に染まる黎斗の瞳。かくして冒頭の場面となる。

「冷静に考えりゃ住所なきゃ携帯電話って買えなかったかも……」

「携帯電話とやらを買えないのではマスター目的果たせませんね。私はネットカフェなるものを知りませんがカフェと名の付く建物に私みたいな狐入れるんですか？リュックの外に出られない、なんてバカな展開は勘弁してくださいよ？」

「……あ」

いよいよもって万事休す。ディオニユスの権能を使えば他人の家で生活することは出来る、がそれを良心が許さない。第一いずれボロが出る。他の権能はこの局面ではどうしようもない。時刻は午後3時を少し回ったところ。早く寢床を決めなければエルを連れてある以上野宿になってしまう。野宿の神殺し（笑）と言われる自分を想像し落ち込む黎斗。

「なあ、そのあんた。どうしたんだ？」

「ちょっと護堂、私とのデート、という自覚がないの？」

「デートって……とにかくへこんでいる相手を見て、放っておけないだろ」

「まったく…… まあいいわ。お人好しな面は大目に見ましよう。またの機会を楽しみにしてるわよ」

……カップルか。カップルなのか。しかもラブラブの。妬ましく思いながらも優しき男性にお礼と相談をしようとして振り向く。

「イケメンカップルがおる……」

相手と自分の容姿の差に愕然。ついでに生で見た金髪美少女に呆然。結果、第一声は情けない物になった。

「は？」

「ああ、ごめんごめん」

我を取り戻した黎斗は事情を説明する。エルはリュックの中で丸まって動かない。

（強大な魔力……神殺し？ マスターの御同胞かな？ 彼女は……魔術師？ 私じゃ相手になりそうにないですね。おそらく逃げるだけで精一杯）

おそらく見られたら一発で妖狐とバレるだろう。厄介事を増やさないためにも、彼女は気配を押し殺した。

「ありがとう！」

「気にすんなって」

「うん！エリカさんも、デートの邪魔してごめんねー？」

「だからちが「あら、殊勝なのね」……エリカ、お前…… まあ、また夜にな！」

2人が、帰って行く。幸運な事に護堂の家の隣にマンションがあり、運良く部屋が空いていた。2階の端で日当たり良好。トイレ、キッチン、風呂ありで窓を開ければ外は綺麗。お買い得である。手続きをサラッと済ませ住所を手に入れた彼はエルと共に家を出た。目指すは携帯電話の購入及び護堂の通う高校への編入である。日本に来て初めての”人間の”友人だ。でも神殺しの魔王だから人間ではないのだろうか？夕食を招かれているので用事はサクサク済ませたい。

護堂の家の前で木々を眺める。

「ねえねえ、護堂ってどこの高校かわかる？」

………

「ふむ、わかった。ありがとう」

……

「ん？ ああ、その高校に転入しようかな、と」

……………

「だいじょーぶ。これからよろしくね」

木から高校名を聞いて歩き始める。迷ったら鳥に聞けばよい。まず入学手続き、それから携帯電話購入。須佐之男に友達ができたことを自慢し新居を伝えよう。そんな事を考えながら黎斗はのんびり歩き始めた。

§3 初の遭遇（後書き）

さーて、次話以降の文量が課題・・・
携帯電話から打ってるときがつきにくいもんですね。

・・・まあ、他の作者様の文量と比較すればすぐにわかったんでし
ようけどね。あははははorz

§4 夕食と魔王と（前書き）

文量大幅増加してみました。すこしはマシになったかな・・・？

§4 夕食と魔王と

携帯電話を買い、転校手続きを済ませた黎斗は早速須佐之男命に電話をかける。

「スサノオー！友達出来たんだよ！！あと住居も決まった！」

嬉しそうに話す黎斗。彼からかけているせいか、須佐之男命が通話相手であるにも関わらず天候は晴れそのものである。

「うん、うん、まあだいじょーぶでしょう。多分。第一僕を神殺し——ああ、カンピオーネだっけ？カンピオーネと知ることとは出来ないよ。相手が本気になりゃ別だろうけど、一般人にしか見えない相手に本気にゃならんだろうさ。もっともお前やアテナ辺りだったら顔バレしてるから話は別なんだけど」

笑みを浮かべて、彼は続ける。

「それに神の1人や2人で負けはしないよ。そんなヤワな人生送ってきてないって。……うん、油断はしないから大丈夫」

関係者が知れば戦慄するであろう会話を続ける2人。夕方の商店街でそんなことが話されていることを知るのは、当事者のみ。

「ん、じゃあこの辺で。みんなによろしく」

通話を切る。

「……！？」

——ふと、懐かしい、気配がした。

平静を装い、周囲を見渡す。少し離れたところに居た。

千年近く前に戦った顔。その力の前に逃走を余儀なくされた銀の髪を持つ美少女。

だが、どこかおかしい。

「アテナ……」

彼女はこちらへ気づかず通り過ぎていく。僅かな違和感を残して。

「なんだ……？ だいたいなぜ彼女が日本へ……？」

違和感が恐らく鍵だ。あの女神に何があったのだろうか？

「マスター、アテナ様を気にするのは結構ですが六時になりますよ？」

「うわっ！？ ヤベ！？」

慌てて走り出す黎斗。戦いの日々から離れ平和に慣れきっていた彼は、アテナの事をすぐに頭の片隅から追い払った。

「お、おじゃまします……」

「ははは、いらっしやい」

「嘘!？　お、お兄ちゃんが同性の友人を連れてきた……」

「静花、お前は俺をなんだと思っているんだ……?」

草薙家はとても賑やかだった。一人っ子である黎斗には、兄妹のじゃれあいが少し羨ましい。

「護堂が珍しく男の子の友達を連れてきたからね。少しいつもと変えてみたんだ。お口に合うと良いのだけれど」

そう言って朗らかに微笑む護堂の祖父は、やっぱりイケメンだった。

「草薙家のイケメンは遺伝か……っ!？」

草薙家のスペックを改めて思い知らされ、絶望する黎斗。

こーん。

自分を無視するな、とばかりにエルが飛び出してくる。もし妖狐云々を聞かれても、ごまかしきる。2人でそう結論を出したため、黎斗はエルの存在を大っぴらにする。

「きゃー!!　この子可愛い!!」

「おやおや、これは小さなお客さんだね」

「黎斗、コイツどうしたんだ?」

三者三様の反応。狐はやっぱり珍しいらしい。護堂の反応ばかりはエルが「妖狐」であることに対してなのかは判断がつかないが。

「ああ、地元で怪我してるトコを手当てしたら懐いちゃってさ。昼間はリュックの中に居たんだよ？」

……嘘は言っていない。嘘は。出会ったのが恐ろしく昔であるだけのことだ。

「名前！！ 名前はなんて言うんですか！？」

テンションがMAX状態の静花の発言に自己紹介をしていないことを思い出す。

「僕は水羽黎斗、コイツはエル。よろしくね」

エルもまた挨拶するかのように、こーん、と鳴いた。

「ふひいー。ご馳走様でした……」

「すげえ食べっぷりだったな…… 腹壊すなよ？」

千年振りの豪華な食事。ここでも黎斗は昼間のラーメン屋よろしく感激の嵐だった。口を開けば「おいしい」「うまい」「おかわり！」である。

「後半泣きながら食べてたよね……」

静花など途中から箸を止めこちらを見ていたくらいだ。

「……あ」

自らの所業を思い出す黎斗。

「ご、ごめんなさい……」

穴があつたら入りたい、とはまさにこの事だ。友達になったばかりの家に来て五、六杯もおかわりをして泣きながら食べる。やりすぎである。

「いやいや、ここまで喜んでもらえると冥利につきるねえ」

そう言って笑う護堂の祖父に思わずジーン、とくる黎斗。

こーん。

ごそごそエルが荷物を漁る仕草をする。

「あ、そうだった。エル、ありがとう」

思い出した黎斗は持ってきた荷物から一リットルのペットボトルを取り出す。中には透明の液体が並々と入っている。

「あの、これ。自家製のお酒なんですけど。もしよろしければ、どうぞ。こっちに越してくるときに作り方だけ習って来たんです。未

成年は無理だからおじさんしか飲めませんが勘弁してください」

例によって権能で作ったものだ。少名毘古那神の権能の一つ。一週間に一リットルだけ液体から酒を生成でき、アルコールの濃度や味を自在に変えられる。好みの味を作れるが数量制限のせいで須佐之男命と2人で酒盛りをするときくらいしか役に立たない能力。メタノールなどを作り出しても、神との戦いに有効か、と言われれば疑問符がつく。エル曰く「微妙すぎる能力」である。こういう時には役立つのだが。

「おや、これは随分と美味しそうなお酒だね。ありがとう、あとでいただくよ」

「酒作れるってすげーなお前」

「まーね」

護堂の言葉に胸を張る黎斗。能力で作ったくせに偉そうに言うな、と言わんばかりにエルが飛びかかってきた。笑い声に包まれる食卓。夜は更けていく。

「みなさん、いい人達でしたね」

時刻は9時を回り、黎斗とエルは草薙一家にお礼を言って帰路に

ついた。黎斗は包みを抱えている。

「こっちに越してきたばかり、それも一人暮らしは大変だろう？
余り物で申し訳ないが、もしよかったら明日の朝食にどうだい？」

護堂の祖父のその言葉に甘えさせてもらい、朝食を用意してくれた彼に何回もお礼を言った黎斗は、包みを落とさないよう慎重に階段を登る。

「マスター」

どことなく張り詰めたエルの声。

「わかってる。誰だろうね。スサノオくらいにしか住居教えてないんだけどな」

自分達の部屋の前に、何者かの気配を感じる。須佐之男命の神力を僅かながら感じるので恐らく彼の子孫だろう、と適当に予想する。

「んー…… あなたがれーとさん？」

「……今日は美少女とよく会うなオイ。しかも巫女さん？ 刀持ち？
あー、なんかもうどーでもいいや……」

巫女装束の美少女が、見覚えのある太刀を持って体育座りであうつらうつら船をこいでいた。予想外の光景に黎斗は一瞬固まってしまふ。鍵をかけていたから入れなかったのだろうか、いつから居たのだろうか？

「……とりあえず中にどーぞ？」

夜は冷える。風邪をひかれたらたまらない。黎斗は昼間買ってきたココアを早速使おう、と思いながら客人を部屋に招き入れた。

「うん、あなたがれーとさんだね？ 恵那は清秋院恵那っていいます。とりあえずこれからお世話になるかもしれないけどよろしくっ」

「まて、意味が分からない」

自己紹介したらコレである。黎斗はフリーズ状態だ。

「えー、おじいちゃまから聞いてない？」

「おじいちゃま？」

まるでおじいちゃまとやらが黎斗の知り合いであるかのような口ぶりだ。しかし悲しいかな、彼に知り合いと呼べるのは草薙家を除けば須佐之男命達しかない。そこまで考えて、ふと思い出す。眼前の少女からは須佐之男命の神力を僅かながら感じるとれる存在であることを。

「……もしかしてスサノオのこと？」

適度に冷めたココアを飲みながら尋ねてみる。

「おじいちゃまが親友が越してきたから挨拶しとけ、って。……そもそもれーとさんって何者？ 気配は一般人。魔力も無いみたいだし。部屋見渡しても呪術的な道具無いみたいだし。でもただの人が

おじいちゃまと知り合えるもんなの？」

あ、ココアおいしいね、と飲みながら恵那は続ける。

「それに」他の人達にバレないように」挨拶してこい、ってのも気になるんだよね。れーとさんってもしかして危険人物でいろんな人から追われてたり？まさかその狐さんが原因ってわけじゃないだろうし」

……おいおい、この巫女。鋭すぎだろう。黎斗は内心舌を巻く。正体がバレればいろんな所から追われそうなプファイールの所持者である気もするが自分では危険人物ではないと思う。まあ一撃で都心を無に帰すことの出来る力を持っている人を安全人物とは言えない気もするけれど。

どうする自分。まず須佐之男命に関しては将棋仲間……無理だ。絶対信じてもらえない。

「えっと……」

いっそバラすか。一人二人バレても黙っていてももらえれば問題ないし。護堂にもいずれは話すわけだし。もう妖狐とバレてるんだし対して変わらないだろう。そう考えて口を開こうとする。

「昔ある事情がありました。須佐之男様と私でマスターのサポートをしています」

「ナイスアシスト、エル！」と黎斗は心の中でエルに感謝した。しかし問題はここから。果たしてこの直感巫女から隠し通せるか。

「あ、そーなんだ。それにキミ、喋れるんだね。お名前は？」

「私はエルといいます。あ、術とかは使えませんか？ 感じとれるだけです」

「あ、あら……？」

巫女と妖狐の会話は瞬く間に話題を変え誤魔化し方を考えずにすんでしまった。黎斗はほっと息つきながらココアを口に入れる。とっても、おいしかった。

巫女の隣には懐かしい剣。須佐之男命と打ち合った時に散々苦戦した神代より伝わる神剣だ。彼女が継承したのだろうか？

「どうしたの？」

どうやら天叢雲剣を見ていたのがバレたらしい。笑って誤魔化す。

「ん。いや、ちょっとね。剣だなーって」

「恵那さん、マスターが変なのは昔からです。あまりお気になさらず」

あんまりと言えばあんまりなエルの言い分に思わず苦笑いせざるを得ない。エルを軽く小突き外を眺める。

先ほどまで月が見えていたのに、今は見えない。風雨が突然襲ってきたようだ。窓を雨が叩くのとほぼ同時に、携帯電話が鳴る。無論、黎斗のではない。

「あ、おじいちゃま？」

どうやら須佐之男命との会話らしい。通話の度に嵐とは、相変わ

らずはた迷惑な神様だ。恵那と会話している須佐之男命を想像して顔が少しにやけた。彼はどんな顔をして彼女と会話をしているのだろうか？

「えーっ!？」

恵那の声に、意識を室内に戻す。どうやら須佐之男命と揉めているらしい。こっちを恵那がチラチラ見ている。もしかしてトラブルに巻き込まれるのだろうか？ 黎斗の背筋に嫌な汗が流れる。

「バレないように、ってのが大変なんだけどなあー……」

”バレないように”のフレーズで嫌な予感がビンビンくる黎斗。

「うん、わかった。やってみる！ 祐理のためだもんね！」

どうやら解決したらしい。恵那の張り切り具合がすごい。背景に炎がメラメラと燃え盛っているのが見えるようだ。

「恵那さん、今のスサノオ？」

分かりきっているけれど一応確認。

「恵那でいいよー。 ってワケで、これからよろしくお願いします」

そう言って三つ指をつき、深々と頭を下げる恵那。

「……へ？」

「恵那さん、須佐之男命様は何と仰られたのですか……?」

突然の事態に硬直する主従。

「私の友達のお手伝いをしなきゃいけなくなっちゃってさ。この近辺に居た方が都合が良いんだって。で、れーとさんの住んでるココを当面の住居にしろ、ってことなんだ。おじいちゃまからさっき聞いたけどれーとさん寂しいと死んじゃう性格なんでしょ？ エルちゃんもいるし恵那もいるから寂しくないよ」

確かに寂しいのは嫌な性格だけれどさ、という黎斗の呟きはアツサリ流され恵那の爆弾発言は続く。

「こっから見つかからないよう動かなきゃなのが問題なんだけどおじいちゃまが認識阻害の呪を込めた服を送ってくれるらしいからなんとかなるかな、って。だからこれから荷物とりに一旦帰るね」

それだけ言って、恵那は部屋から出て行った。黎斗は荷物運びを申し出たものの「黎斗さんが動くとき色んな人にバレちゃうからダメだよ」と言われたため自宅待機中だったりする。

「……人生初の同棲ですよ」

「須佐之男命様に見事に利用されつつからかわれてるカンジですけどね。女の子の頼みなら断らないだろう、的な」

「……ごもつとも」

冷静なエルの発言に、黎斗はぐうの音も出ない。

「……手を出したらスサノオにロリコン呼ばわりされるんだろうな

あ。手を出すつもりはないけどさ」

美少女なんだから男の家に泊まらせるなよ、とも言いたくなかったが千歳を越えている彼が十代の少女に手を出したらロリコン扱いされそうで怖い。

「全てはスサノオの手のひらの上、か。多分僕の世界年齢二十いてないと思うんだけどなあ」

黎斗の溜め息はエルの付けたニュース番組の声にかき消された。荷物がかさばるから、と主に置き去りにされた天叢雲剣が反射を受けてキラリと光る。笑われた、と彼は思った。

§4 夕食と魔王と（後書き）

祐理と護堂の関係がどうだったかなあ・・・と悩む今日この頃。1
巻回収が遅れるので書き始めたばかりのくせに更新1ヶ月くらい遅
れそうです・・・ごめんなさいー！！

§5 転校する魔王（前書き）

あとがきが懺悔タイムです（苦笑

§5 転校する魔王

エルはベランダに居た。万が一管理人にバレたら黎斗はこの住居を追い出されてしまう。周囲をよくみて誰も見てないことを確認、隣の大木に飛び移る。

「丸一日暇ですし、探検しますか。マスターの故郷とやらを」

そう言ってこそそ走り出す。認識阻害等が使えれば堂々と走れるのだが、ないものねだりしてしまうが、ない。車に気をつけて道路を渡る。妖狐が出歩いたらマズい気もするが妖力を抑えているのでカンピオーネとその彼女、もしくは恵那並みの実力が無ければバレないだろう、多分。

もともと恵那曰わくこの町は諸事情で術者が多いらしいので油断は禁物だが。

「お魚屋ないかなー」

山吹色の毛並みを風に靡かせてエルは足を商店街に向けた。

「水羽黎斗です。よ、よろしく願いします……」

同じ頃、転校生として黎斗は若干緊張しつつ自己紹介をこなしていた。護堂と同じクラスである。正直これは予想外だった。席は右端の最後尾。流石に教科書を1日で全て揃えることは出来なかった。ので、授業は隣の人に見せてもらうことになる。

幽世ひきこもり時代から暇つぶしに受験勉強をしてきたため、大
学入試レベルならそこそこ解けるであろう彼にとって学校転入は勉
強目的ではなく青春、もとい学生生活をエンジョイすることが目的
である。授業なんて楽勝だ。元受験生舐めんな。そう、思っていた。

「……やつべえ」

正直、舐めていた。舐めていたのは自分のほうだった。黎斗は自
分の甘さに絶望する。カンピオーネの特性もあり言語は楽勝。問題
は、理系科目、特に数学、確率がヤバイ。学習指導要領が変わった
としか思えない。実際は忘れているだけなのだろうけれど。重複組
み合わせ？ 二項定理？ 期待値？ 問題集を眺めて脳が硬直する。
解ける気が全くしない。

「なんてこったい」

気合いを入れないと赤点生活だ、と危機感を強める。言語は適度
に点数を落とすべきだろうか？ 妖狐を連れている上言語ペラペラだ
と警戒されたりしないだろうか？ こんなことで怪しまれたらたま
らない。不信の目は徹底的に摘み取るべきだろう。テスト時はほど
ほどに間違えて八十五点くらいを狙えば大丈夫だろうか？ 自分が
敏感になりすぎていり気もするが用心に越したことはない。

「これで問題は……まあ、大丈夫か」

勉強という予想外の強敵の出現に慌てふためいたが、それ以外に
彼に困る事態は発生しなかった。

違うクラスに強大な霊視能力を持つ巫女がいるらしいが、彼はバ
レることを心配しない。

「流浪の守護」——大天使ラファエルの権能。能力は単純明快、

彼の持つ神力の類といった気配を消失させ、存在を一般人と同化させる。

これが、彼が永きにわたり生存してこれた最大の理由。”戦いを避ける”力。神々が本気になって探ったところで、彼をカンピオーネと気付けるかはわからない。直接顔が割れている須佐之男命やアテナを別とすれば、彼をカンピオーネと見抜ける者はおそらくないだろう。

だから、警戒するのは日常からの露見。妖狐と言語で怪しまれ、護堂に探索魔術を使われたら叶わない。

須佐之男命の話ではカンピオーネは基本的に組織を作っているらしい。そんな真似は自分には無理だ。政治のゴタゴタは勘弁願いたい。バレて組織作成とか罰ゲームすぎる。

「護堂に黙ってるってのも心苦しいけどねー……」

須佐之男命、エル以外にも愚痴れる仲間は欲しいものだ。そんな呟きは、休み時間の喧騒にかき消されすぐに消えた。

「い、護堂先生流石です……」

一見すると正統派ツンデレのオーラが見えるエリカがデレ100% しかも周囲の女子から彼に対する熱烈な視線を感じる。これが彼の権能なのだろうか？

「まったく、どこのギャルゲ主人公だよ……」

思わず口に出してしまった。まあ、あの二人に聞かれていないし

いいや。などとぶつくさ言いながら自席で昼食を再開する。護堂に誘われてはいたものの、馬に蹴られて死ぬのは御免だ。他人の恋路を邪魔する者は馬に蹴られてなんとやら、そんな単語が頭をよぎる。だいたいあの中に割り込む勇氣など黎斗は持ち合わせていない。

「これか、これが勝ち組か」

感傷に浸っていれば肩に手が置かれる感触。振り向けば三人の男子がそこにいた。

「オレは高木、こったは名波、そして反町。我らは草薙護堂による美少女の独占に抵抗する非モテ同盟だ。男子転入生と聞いてどんなイケメン野郎かと警戒したと思ったより普通に安心した」

さり気なく酷いこと言われてる気がするが高木と名乗った少年の雰囲気は黎斗は反論を諦めた。

「そして君の瞳に宿る嫉妬の炎…… 共に草薙護堂に対して天誅を下さないか？」

ようはモテる男にモテない男共の嫉妬をぶつける、と。護堂と三人、どちらをとるか。

黎斗は、迷わなかった。

護堂、恵那の他に三人のメールアドレスを黎斗はこの日に入手することになる。ちなみに須佐之男命は適当ににかけても繋がるから登録の必要無し。神様万歳。

「……？」

アドレスを交換している最中にふと、妙な気配を感じ廊下を眺め

る。美少女と目があった。彼女は驚くと慌てて目を逸らし立ち去ろうとする。最後に護堂の方を一目見て、彼女は立ち去った。ピンポイントでカンピオーネを見ていたということは彼女が件の巫女だろうか？

しかし、ありえない。「流浪の守護」が展開されているのだ。現に護堂もエリカも気づいた気配は無い。それなのに彼女は気づいたとでも言うのか。

「マジか…… いや、まさかね」

彼女の事は、後でエルに相談しよう。

「……？ どうした？ 水羽」

高木の声。急に調子が変わったので困惑しているようだ。

「ん、ごめんごめん」

苦笑いと共に返事をする。

「しかし万里谷さん、いつ見ても素晴らしいよなー」

「万里谷さん？」

「……ああ水羽はまだ知らないのか。さっき廊下からこの教室を覗いていたのがこの学校のアイドル万里谷祐理さんだ。我がクラスのエリカ様と並ぶ二大美少女」

反町の解説を受けて先の巫女の名前を知る黎斗。帰ったら恵那に聞いてみよう、同じ巫女どうし友達かもしれない、などと考えなが

ら彼は次の授業の準備をする。

次は数学。油断禁物だ。赤点カンピオーネなぞ須佐之男命辺りに爆笑されてしまうだろう。

「マスターの気配が察知された？ そんな馬鹿な。いかにその巫女様とやらが強大な力を所有していたとしてもまつろわぬ神々にすら通じる、神殺しの権能を突破できると思えないんですが」

下校時間にエルと合流し黎斗は昼の件を相談したが、エルも見解は一緒だった。では、彼女がこちらを見ていたのは偶然だったのだろうか？

「偶然にしても確率は天文学的でしょうね。マスターの外見って冴えない高校生ってカンジですし。一目惚れとかあり得ないし。現実考えたら目が合った幸運噛み締めてりゃいいんじゃないですか？」

……この狐様はいつからこんなボロクソ言うようになったのだろう？ 事実っぽいのがまた反論をさせない雰囲気で少し悲しい。

「……て、ちよつとまって。マスター、”流浪の守護”弛んでます。僅か、ですが」

しばらく静かにしていたエル、突如爆弾発言。

「……へ？」

思考が止まったのは1秒にも満たない間。すぐさま感覚を研ぎ澄

ませる。風船の内側から、小さな穴を探すイメージ。

——見つけた。穴を塞ぎ急ピッチで修復、他の箇所も探すが漏れている所はこの場所だけのようだ。

「……あ、大丈夫です。もう漏れてません。しかし、この程度の弛みで察知とかその巫女さん尋常じゃありませんよ」

エルの言うとおりに、彼女の霊視能力は危なすぎる。下手を打てばすぐにバレてしまいそうだ。脳内要注意人物筆頭にその名を記す。

「マスター、平和ボケしすぎです。展開の仕方がいい加減だから気配が外に漏れるんです。ここは幽世とは違うんですから。……まあ、私も言われるまで気づけなかったんですけどね」

しかしそのエルに言われるまで術者たる黎斗すら気づかなかった。安穩と過ごしすぎたか。

「今まで引きこもってたのが裏目にでたのね。あっちじゃ適当ですんでたからな……」

須佐之男命に大口をたたいておきながらこれは少し情けない。気落ちした自分を励ますように自販機で紅茶を購入。景気づけに一気に飲み。心機一転。

「うし、もうヘマはしない！」

「ま、私としてもそれを願ってますよ。缶ジュースを一人で買って一人で飲んでせっかく気合い入れておきながらヘマしたら情けなさ過ぎますしねー」

「……」

この狐は淡白だった。紅茶を一人で飲み干したのがお気に召さなかったらしい。そういえばこの狐様は紅茶が好物だということを忘れていた。今から買おうにもさっきので最後だったらしく売り切れ。

「……ちやつちやつと帰って休憩しますか」

どうやら帰宅してからの最初の仕事はエルのご機嫌とりになりそうだ。きっとキツネに頭が上がらないカンピオーネも、やっぱり自分だけだろう。自由奔放をしていると噂に聞いた後輩達を想像して、ほんのり切なくなる。いつか自分も彼らのようになれるだろうか？
……なったとしたら自分は何を望むだろう？

傍若無人の例としてもっとも一般的（だろう、と黎斗がかつてに思っている）酒池肉林を想像してみる。要素として挙げられるのは酒、食料、好みの異性達、それらを用意する経費。こんなところだろう。

資金……マモンの権能があるから問題外。「金をよこせ！ぐへへへ〜！！」なんて馬鹿な真似をする必要がない。寧ろ多すぎて使いきれない。純金の宮殿を全ての国に建造することだって余裕なのだから。

食料……ありあまる財に任せて買い漁る。流石に食料を作り出す権能は持ち合わせていないが少名毘古那神の力で農業するのも悪くない。

酒……少名毘古那神の権能によりやっぱり問題外。好みの酒を作れてしまうので買う必要もなし。まあ、問題にはならないだろう。
好みの異性、もとい女。暴君の必須事項にして歴史上の亡国に学ぶまでもない最重要項目……無理。美女侍らせるとかそんなキャラじゃないし。数人居るだけでお釣りがくる。つか心臓が破裂する。

気後れするレベルの美女によるハーレムとか精神が耐えられない。土下座して逃げ出す自信がある。まあ、実現可能か不可能か、という事なら余裕で可能だったりする。恐るべしディオニユス。

「あれ……？」

なんだ、全部実現可能ではないか。天上天下唯一独尊を普通に出来そうだ。もしかして自分は位人臣を極めた全てを超えしもの？

「HPは1000万♪」

「……マスターが壊れた」

失礼な発言を繰り返すエルにデコピンをお見舞い。黎斗は帰り道を意気揚々と歩き出す。狐との力関係、というそもそもの考えの出発点を、忘れてしまったお気楽モード。

天気がいつの間にか崩れていることにも、闇が濃くなってきていることにも、気づかない。

§5 転校する魔王（後書き）

原作との相違点増えてきましたがご了承下さい（汗

いや、よくよく考えてみれば致命的でもないかぎりオリ設定で行けばいい、ということに最近気づきました。そんなに原作外すつもりはありませんけども。

今回で言えばゴルゴネイオンと祐理とか。黎斗達の帰宅最中に事態が進展している感じです。その辺のタイミングを改変させていたかったです。

以下更なる懺悔という名のネタバレ？です

おそらく原作5巻辺りまではれーと君はほとんど戦闘しません。
つか以降も基本裏方かも。調子に乗ってチートしすぎたので目標は
護堂を支援するポジションで。

そんなカンジで進んでいきますがお付き合い頂ければ幸いです。

§6 課題山積みの魔王（前書き）

急展開すぎる気も・・・（汗

§6 課題山積みの魔王

「あれ？」

「……マスター、暗い中でそんなことすると目が悪くなりますよ」

「うん…… っーかテレビつかない……」

無人の部屋に帰宅した黎斗。「ただいまー」と虚しく声を響かせつつ彼は首を傾げて尋ねる。

「エルー？ ブレーカー落ちてる？」

「んなもん私にわかるわけじゃないじゃないですか。マスター調べてくださいよ」

このアパートはブレーカーが各自の台所上にある。キツネであるエルに判別できないのはしょうがない。

「やれやれ……」

ブレーカーは落ちていない。となれば、停電か。窓の外も、軒並み真っ暗だ。視界を魔力で増強しなければ歩くことすらままならない。

「停電とかついてないなあ……」

静寂が支配する闇の中、突如携帯電話から軽快なテンポの曲が流れ、暖色系のランプが点灯した。深紅のランプは恵那のものだ。

「エル、恵那からメール。今日明日は合宿だって。言うの忘れててゴメン、だど」

恵那としても黎斗のアパートに住み込むことが決まったのも突然だったわけだし連絡を忘れるのもしょうがないか。ちゃんと連絡くれただけ御の字だと黎斗は彼女に感謝した。

「恵那さん今日は居ないんですか…… やっぱり少し寂しいですね」

恵那が居れば停電して暗い雰囲気でも明るくしてくれたかもしれない。そんなことを思いつつ再び外に意識を向け、彼はようやく気がついた。

「ははっ…… ホント情けないなこりゃ」

思わず自嘲してしまう。

「? マスター?」

こんなにも、明確な気配を見逃していたことに。

「エル、外の気配、探ってみ」

呪力、魔力、神力の濃厚な気配。かなり、いや、すごく強い。意識を研ぎ澄ませれば圧倒的な死のオーラを感じ取れる。

これに今に至るまで気付かなかった自分は本当に平和ボケしすぎている。

「……!?!」

絶句するエル。

「明日から二人。仲良く修行ね」

「そうですね……正直、鈍りすぎてて笑えません……」

索敵がこれだけ出来なくなっていると、黎斗にもし「流浪の守護」が無ければ、つまり相手に対し絶対的な隠密能力を持っていなければ。相手に容易く奇襲を許してしまいかねない。

決意してから数時間と経たないうちにこの有り様。まったくもって、笑えない。

だが、今は反省している場合ではない。

闇の中目立たないように紺色の服とジーンズに着替え、更にその上からバレないように冬物の黒いコートを羽織る。エルを肩に飛び乗らせ扉をしっかりと施錠する。防犯は大切です。準備万端。監視の目が無いことを一応確認し彼は夜空へ飛び立った。

認識障害と消音。二つの術をかけた黎斗は、忍者よろしく屋根の上を疾走する。消音の呪のおかげで、音は気にしなくてすむ。ソニックムーブを起こさないギリギリの速度で気配を強く感じる方向へ。状況が掴めない今、権能の発動は抑える必要がある。移動は自らの足で行った方が安全だろう。

「まあ、順当に考えれば今ドンパチやってるのは護堂とアテナかな」

護堂が何の神の権能を篡奪したのか、黎斗は知らない。しかし最近と聞いているので、おそらく一柱。果たしてあの女神を倒せるのか。黎斗は否と考える。彼女は新米のカンピオーネの相手にしては強大すぎる。手負いだったとはいえ、複数の権能を持っていた黎斗ですらかつてはあの女神を前に逃亡を余儀なくされたのだ。

「あの金髪の女の子も、かなりの手練れだと思います。アテナ様が本気で挑まない限り、あの方々は敗北なさらないでしょう」

アテナ。昨日すれ違ったときのあの違和感はいったい何だったのだろう？今でこそ感じられないが、あの時感じた妙な気配が気になる。エルと会話しながらも黎斗の焦点はそこにあった。

「会って、確かめるしかないか」

黎斗は足の裏に魔力を込め、跳躍。この事件の火消しに奔走しているらしい人間達（役人なのだろうか？）を眼下にひと息で越える。電柱の上を跳ね、ビル群を易々と飛び越え、壁を垂直に爆走する。その速度、方法共に常軌を逸していた。

故にエルは思う。特撮物の撮影と誤解されかねないこの非常識な行動。もしかしたら認識阻害をする必要はないのではないだろうか。この光景を見た人間全てが自分の目を疑い、まばたきをする頃には黎斗はもうその場にはいない。よって彼らは自らが見た光景を目の錯覚として処理するだろう。

更に黒いコートを羽織っておりご丁寧にフードまでした黎斗の顔を見ることは至難の技だろう。術者にしたところで黒コートの怪人という認識で済むような気がする。黎斗は黒コートの怪人、と推測するのは厳しいだろう。わざわざ認識阻害なぞなくてよい、と。

黎斗曰わく警察の能力を舐めたら足下をすくわれる、らしいが本当に黒のコートという手がかりだけで犯人を絞れるものなのだろう

か。生のほとんどを幽世で過ごしてきたエルにはその感覚がわからなかった。必要ないと思ひ話してもなお主が必要と判断したということは、きっと必要なだろう。エルには強引に納得する他はない。自らのマスターたる黎斗にエルは全幅の信頼を置いている。

「……認識遮断、もうワンランク上げるよ」

「マスター、わざわざそこまでなさなくても」

「こっから先にいる術者はそれなりに強いっばい。現状で突破しようとするれば多分彼らも違和感を感じる。違和感与えるのは得策じゃないかなと思ってさ」

どうやら主は完全に自身の情報を秘匿したいらしい。魔王らしく堂々介入すればいいのに、と思ひながらも返す言葉は決まっている。

「わかりました。全てはマスターの望むがままに」

「ありがとう」と声を発した黎斗は認識遮断を一段階上昇させ、速度も更に上げて走る。ソニックムーブを防ぐ術を知らないため、風操作の術で代用。ただし使い慣れないため調子に乗ってスピードを出し過ぎるわけにはいかない。

術者の真後ろを何回か通ったがそよ風すら吹かず認識不可とあれば彼らが気付かぬのも無理はない。

川上を走り足に魔力をこめる。壁を踏みしめひときわ高いビルの上上に飛び降りた。

「やーっと、見つけた……」

魔王の見下ろす先にいるのは、新しき魔王と戦の女神。

「ああ、あっちに他の皆様はいらっしゃるのね」

「あちらの方々が神と魔王の戦いに介入するのは些か厳しいかと」

「だよねえ…… やっぱバレルの覚悟で援護するか……？」

折角ここまで気付かれずに来たのだから最後まで影でありたい、
と思うのだがそんなちっぽけな願望のために友達をほったらかし周
辺地域の被害を無視するというのは外道だろう。

……「来い、古より畏れられし神殺しの神槍」

言葉が紡がれると同時に、黎斗の影が水面のように揺らめいた。
影の中に棒が浮かび上がる。彼によって引き抜かれたソレは幾星霜
もの時を経て、すっかりボロボロになってしまった長い木の棒にし
か見えない。呪力など欠片も発さず、軽くふっただけで壊れそうだ。

「思い出したまえ。呪われしものどもを罰し」

黎斗が言葉を発するたびに、棒に亀裂が入っていく。

「主、憐れみたまえ」

——瞬間、棒が砕けた。内部より漆黒の長柄物が現れた。数世紀
の時を越え再び神殺しの槍が顕現する。

飾りの全くない質素な槍が黎斗の手に収まる。二メートルくらいだろうか。流浪の守護を展開してさえいなければ地上の二人も気づいたであろう、凶悪な程の呪力。所有者に栄光をもたらすと伝えられるそれは名をロンギヌスという。

「……流石にメンテ必要だったか。まさか棒きれに戻ってるとはね」
苦笑いをしながら、ロンギヌスを軽く振り異常が無いことを確認する。

「少なくともここ四百年は使っておられませんでしたししようがないと思います」

「さて、いきま……え？」

いざ行かんと下を眺めた黎斗は予想外の光景に目を丸くした。

「光の……剣？」

「……あれ絶対ヤバイですよ。傍目に見てこれだけ危険なんだから……あれ？　もしかしてアテナ様負けた？」

「流石にそれはない……だろう、うん。大打撃受ける程度じゃないかな？　多分。なにあの剣……」

顎が外れたように見つめることしか出来ない主従。いざ援護しようとした矢先、意味不明な剣により戦局がひっくり返りそうな気配だ。神や魔王の戦いは不条理であるとはいえ、目の当たりにすると驚きを通り越して呆れてしまう。

「神力を直接攻撃したのか？　ゲームで言うならMP攻撃？　それとも特殊能力破壊？」

幽世で引きこもりをやっていた黎斗は、まつろわぬ神と戦った事は数あれど、同族たるカンピオーネが戦うのを噂で聞いたことはあっても見るのはこれが初めてだ。最初に見た他人の権能が非常に強力であったが故に、我を忘れて二人の戦いに見入ってしまうことになってしまった。

「護堂、強いね」

我を取り戻し、感心したように呟く黎斗。何の権能が依然彼にはわからないが光り輝く剣がアテナの神力を大幅に減らしてしまったことにより互角の争いを繰り広げる両者。急いで来る必要なかったのではなからうか。なんとかなりそうだ。そう思いながらアテナの方を見る。流石と言うべきか、予想以上にしぶとかった。

「あー、アテナの方が余力あるっぽいなこれ」

「護堂様は善戦なさっていると思います。しかしアテナ様は闘神でもあらせられる。一枚上手なのはやむを得ないかと」

介入するか。黎斗は考える。いくら鈍っていたとしても、ここで彼が参戦すればおそらくアテナには勝てる。だが、それでよいのか。

「護堂にも強くなってもらった方がいいよねえ。なんかこれから多くのトラブルに巻き込まれるような気がするし」

「正体がバレるのがイヤだから介入しない、とは流石に言われませんね」

どこことなくからかうようなエルの声。

「あたりまえですー バレたら幽世に戻るだけで済むっつーの。そんなことで友達見捨てませんー」

方針はここに決定した。傍観である。ただし護堂が危なくなったら即座に介入する。彼にはこの先生き残るため、まつろわぬ神を安定して倒すための戦闘経験が必要だろう。

アテナが有利な状態を維持し続けられるか、護堂が会心の一撃を与えるか。パツと見、前者に見える。

先に動いたのは、護堂。なにかを呟いた、と思えば突如空が明るくなり、天から太陽が降ってきた。

「え？ えー!？」

慌てる黎斗。護堂は一柱の神から権能を篡奪したのではなかったのか。

「複数を扱うタイプの権能ですか…… 条件型？ 代償型？ 複数タイプでこれだけ強大ならノーリスクなんて甘い話はないでしょうし」

これでノーリスクだったら酷すぎる。光り輝く剣とこの太陽を乱発されれば黎斗だって負けかねない。とくにあのチートじみた剣。

しかし剣を連続使用してこないあたり一回使ったらインターバルが何日か必要なのだろう。

「っはー…… マジかよ、あの女神サマ太陽防いでるよヲイ……
この人たちこわい。苦手だろうになんで防げんのよ」

アテナが必死に防いでいる様子を見る限り、これが正念場なのだろう。護堂も流石にこんな大火力技を複数持つてはいないだろう。というか、持っていたら自分の立場が無い。黎斗は大火力を一つしか持っていない。

「この調子だとアテナが防ぎきって護堂の負け、か。……悪いねアテナ。介入させてもらおうよ」

七天使・サリエルの権能、オンリー・ザ・シャイニング「我が前に邪悪無し」を発動する黎斗。エルが面白がってつけた名前だが、長くてかなわないため結局黎斗もエルもこの名で呼ばない。サリエルが邪眼を持つ天使として有名なため邪眼で意味が通じるからだ。「名付ける意味ありませんでしたね」とエルが苦笑いをしたのは懐かしい記憶だ。黎斗が最初に手に入れた権能である。

能力は明快。視界内の呪術を任意で無効化。多くの権能は莫迦らしいほどに強大すぎるため無効化こそできないものの視界内に捉えている限り弱体化させ続ける。手軽で単純、特に魔術師に対し凶悪な効果を発揮するので使い勝手がよい。守りの鬼札。「流浪の守護」のおかげで権能を発動させても他者に気付かれることはない。この程度の神力なら流浪の守護で隠蔽が可能なのだ。

狙うは、アテナが現在進行形で展開している闇の守り。

「ははっ・・・!! 勝負あったな、草薙護堂よ、妾の勝ちだ!!」

額に汗を浮かべながらも、アテナは高らかに宣言する。敵の真の切り札が”白馬”であることなど叡智の女神たる彼女にはお見通しだ。防ぐのに十分すぎるほどの余力を残してきた彼女は、その力をもって太陽を防ぐ。

今でこそ敵は猛攻を仕掛けてきてはいるが、これさえ耐え凌げば敵にもう彼女への有効打が存在しない以上勝利は決まったも同然。敵の従者が持つ剣も余裕を持って防ぎきれぬ。この太陽もじきに弱まり消滅する。その時が最大の勝機。

アテナの読みと判断は正しい。

——この場に水羽黎斗という存在がいなければ。

「……!?!」

背筋に突如、悪寒が走った。誰かが、自分を見ている。この感覚は昔にもあった。忘れもしない、自分の前から平然と逃亡したあの神殺しの時と同じもの。たしかこの視線は術を弱体化させてしまう。支える足場が、少しずつ、少しずつ崩れていくような、そんな不安な気分にはさせられるこの感覚。自身を纏う力が、だんだん消失していく。

「……いかん!!」

アテナの思考はそこまでだった。

いつの間に刺さったのだろうか？ 胸を貫くのは獅子心王の剣。しかし、それはあくまで切り札を通すための布石にすぎない。

均衡を保っていた太陽と闇。そのうちの片方が弱体化したらどうなるか。均衡が崩れたことにより莫大な熱量が彼女を襲う。

アテナを、太陽が飲み込んだ。その輝きは辺り一面を焼き尽くさんばかりに眩く、誰も目をあけていられない。

「……まぶしー。なにあのふざけた太陽。代償支払った形跡ないっぽいしケンカ売ってんの？」

どこことなく拗ねた口調の黎斗。彼の戦闘系権能は単純な破壊力なら先ほどの太陽を上回るものもあるものの代償が洒落にならない。使いどころを間違えただけで死亡しかねないハイリスクハイリターンな力。ノーリスクである（ように見える）護堂の権能を見て理不尽を感じるのはやむなしといったところだろう。

「でもまあ、これで終わったね。……しかし鈍ったなあ。ヤバいかも」

苦虫を踏み潰した表情の黎斗。原因は邪眼だ。

邪眼の消去効率が悪すぎる。現役時代の半分にも満たないのではないだろうか？

「須佐之男命様との試合では大抵能力使用しないで戦っていたらしいやいましたものね」

エルはある程度この状況を予想していたらしい。言葉に淀みがない

い。

「サリエルでこれなら他も推して知るべし、か……アーリマン、ツクヨミ、ディオニユス辺りはリハビリだなこりゃ」

「ですね。でもスーリヤ様、テュール様みたいな代償が致命的なのはどうなさるおつもりですか？」

「うーん、昔の勘を取り戻せたらなんとかなると信じよう、うん」

黎斗が挙げた権能はエルが口にしたものより異なり制限が無い、又は比較的軽いものばかり。これらから少しずつ実力を取り戻していこうと心に決める。現状では武術でこそ勝っても権能が原因でまっろわぬ神に負けかねない。

「まったく、今日は反省が多いなあ。課題も山のように見つかるし散々」

「気づかないよりはよろしいかと」

エルの言うとおりに発見できてよかったのだろう。戦闘中の誤算は敗北に直結する。即ち、死。そう思い直した黎斗はロンギヌスをしまい未だ騒がしい現場を眺める。

「……護堂、お疲れ様」

最後に一言呟き、黎斗は踵を返す。見られないように帰る必要があるのだ。無事帰宅できるまで、気を抜くことは許されない。更にこの場には実力者が犇めいているのだ。難易度は到着時よりも跳ね上がっていてもおかしくはない。認識阻害を念入りにかけ、慎重に、

しかし迅速に。

あらゆる建築物倒壊し、融解し、粉碎され、クレーターが出来てしまった戦場を背景に、一人と一匹はこっそりその場を後にする。

「……マスター」

「ん？」

エルの声に上機嫌な声音で返事する。よくよく考えれば100%望んだ通りとは言わないがそれなりに望んだ結果を手に入れたので気分は爽快だ。

「夜、あけますね」

「ああ、そうだね」

やっぱり、夜明けは綺麗だ。太陽が夜闇を切り裂き万物を照らす。ああ、今日も新しい1日が始まる。

「新しい、一日……?」

頭から冷や水をぶっかけられたかのように、瞬間的にテンション

が下がった。顔色がどんどん悪くなっていく。

「て、徹夜……?」

そんな馬鹿な。せいぜい数時間の筈だ。いつの間にこんな時間が過ぎた?

「マスターが迷子になった時間、プライスレス。夜の町、しかも見知らぬ地域なら仕方ないかもしれませんがカйм様の権能を使えばよろしかったでしょうに。妙な意地はるから……」

エルの声も耳に入らない。このままだと、授業で寝てしまう。と
うか、宿題が終わっていない。——それ以前に現在何処にいる
のかすら、わかっていない。

「いやあああ!!!!?」

雄鶏の鳴く直前、黎斗の絶叫が周辺地域に響き渡った。

§6 課題山積みの魔王（後書き）

アテナもうちよい長引かせるべきだったのかやっぱり迷いますね

・・・即断即決できるよう精進しますorz

§7 アテナ編あとしまつ(?) (前書き)

不定期更新っぽくなっていますが気にしない!

§7 アテナ編あとしまつ(?)

「はぁ……はぁ……」

静寂が支配する空間に、1人黎斗の声が響く。全身が真っ黒です。すだらけ、両目が充血し血の涙が流れている。左目は、輝きが全くない。

「やはり、大技使うと流浪の守護がぶっ飛びますね。上手く隠そうとしても強大な気配を数秒垂れ流し状態に。アーリマン、スーリヤ、テュール、ツクヨミは使用要注意ですよ」

半径十数kmはありそうなクレーター。その広大なクレーターの外から声を張り上げるエル。空間を歪める程の威力で抉られたそこは、あまりの熱量に未だ大地より煙が立ち込め中央部の視認が叶わない。

ふらふらと、そしてゆっくりとこちらへ向かってくる自らの主は今にも倒れそうな雰囲気を身に纏っている。

「そろそろ恵那さんが帰ってくる時間帯です。現世へ帰還しましょう?」

「そだね、ちゃっちゃと風呂に入って汚れ落とさなきゃ」

「左目、大丈夫ですか?」

「久々だけど大丈夫。1日くらい誤魔化しきれさ。明日休日だし」
太陽神スーリヤの権能。黎斗の所有する力の中で最大の破壊力を

誇る。威力、範囲共にこれを凌駕する力は、黎斗の1000年近い人生でもお目にかかったことはない。これに次ぐ破壊力を持つのは、黎斗の知ってる範疇においてはおそらく護堂の太陽召喚だろう。それですら、かなりの違いがある。

その超威力の代償は、1日の間左目が使えなくなること。また、攻撃範囲が広大なのでおいそれと使うことはできない。半径数m程度ならともかく半径数十km以内を全て消滅させる力は使い勝手が悪すぎる。街中で使うなどというのは論外だ。昔1回海の上で使ったのだが、瞬時に水蒸気の煙が周囲を覆い、冷水が熱湯に代わりゆでだこになった生物の死骸が、常軌を逸した悪臭と共にプカプカ浮かぶ様はトラウマだ。しかも津波が発生するというオマケつきである。なんとか被害は防げたものの、これでは怖くて使えないだろう。ちなみに、あれ以来黎斗は焼いた魚を食べられない。魚の皮の焦げ目を見るたびにこのことを思い出すのだからしょうがない。

「うし、風呂ー!!」

現世に戻るなり叫ぶが早いか黎斗は風呂へ直行した。恵那の超人的な勘で怪しまれないため、という理由もある。

護堂とアテナの戦いの翌日から、黎斗は訓練を開始した。バレーないう幽世で。幽界なら人目を気にせず力を振るえる。授業が終わったら幽世へ。ツクヨミで自身の時間を加速し、他の権能をぶっ放して訓練。鈍りきった今では倍速しか出来ないからたいして効率が良くはないが、加速時間の倍率を全盛期まで戻せば、スーリヤの1日左目使用不可という代償も加速時間内で約半日以上消化できる。次の日の朝には復活だ。

だが、それまでは日常生活を片目ですごさねばならない。周囲に露見したらおしまいだ。それを防ぐため黎斗1日引き籠もっている休日訓練に当てている。恵那は休日も色々忙しいらしく日中滅多に家に居ない。だから、休日。

もし、今まつろわぬ神が出現しても弱りきっている黎斗では敵わない。そこは護堂にお任せだ。エルは呆れていたがしょうがない。今のままの碌に権能を使えない状態では連戦になったら詰む。それがエルとの共通認識だった。

「ふいー、風呂あがつ……!?!」

その後は言葉にならずに絶句する。視線の先には、お茶を仲良く飲むアテナとエル。

……なんだこれは。

「む、意外と早風呂だな、古き王よ。これが烏の行水というやつか?」

「アテナ様どこでそんな言葉を覚えられたのですか?」

「いやいやキミ達……」

事情についていけない黎斗。アテナは何故この場所がわかったのだろうか?

「古き王よ、御身も相当鈍っておるな。そこまで気配を隠していないのに妾の存在を察知できないとは」

彼女の言葉に息を呑む黎斗。これが好戦的な神だったら終わりだ。まだ全快でないであろうアテナであったことに感謝するべきか。

「……ふむ、すぐさま戦闘となるところは相変わらずよのう。傷ついている今の妾なら鈍っているあなたでも楽勝だろうに」

はう、と気の抜けたように息を漏らしながらお茶を飲む様子を見ていると、なんだか気を張っている自分が馬鹿のように思えてくる。

「んなことせんわ。で、なんでここがわかった？」

ココアを飲みながらアテナへ尋ねる。智慧の女神は智慧を司るのであって、直感や予知を司る訳ではないだろう。日本に無数にある建造物の中から、数日のうちにここを見つけ出す術が勘以外に存在するならば、それは脅威以外の何者でもない。

「簡単なこと。古き王、あなたはたしか、気配を打ち消す力を常に纏っておる。ならば妾の呪力を誰にも気づかれぬようこの地域に薄く撒けばどうなるか？ あなたがいる所だけが、妾の呪力が消滅しているように見えるのだよ。あとはその痕跡をたどるだけ」

「流浪の守護は気配を遮断する。展開領域は僕及び僕に触れている物。だから、足元に存在するアテナの呪力も踏んでる間は外界から遮断してしまっていたワケね……」

なんという出鱈目な方法だ。呪力の無駄遣い以外の何者でもない。しかし、黎斗を発見するにはうってつけの方法であることも事実。

流石は智慧の女神というべきか。完敗である。

「さて、種明かしもしたところで本題だ。あなたはあの日、妾に邪眼を放ったな？」

「うん。悪いけど、あのままだと護堂が負けただろうから横槍入れさせてもらったよ」

あのままだと被害が甚大になるし、と続けて話す。アテナは目を瞑り黙っている。

「……決闘に介入したこと、やっぱり怒る？」

おそろおそろ、尋ねるのは、ここで戦闘をしたくないから。正々堂々の戦いを汚しておいて今更コレはないよなあ、と心の奥底で自嘲する。

「別に。何時、何処で、何が起こるか予測がつかないのが戦というものだ。とくにこの国ならばあなたの妨害を予想して然るべきだ。しかし何故姿を現さなかった？ 900年程前のアレはあなたは負傷していたが今回はそうではないだろう。今のあなたなら妾とも戦えるはずだ」

「うーん、ちょっと事情がありました……」

苦笑いする黎斗の様子を眺めるうちに、アテナの表情が意地の悪い笑みに変わる。

「ほう…… さては草薙護堂に神殺しであることを隠しているな？」

あっさりバレた。まあ、当然か。隠していなければ共闘すればよかったのだから。

「うん。だから口裏合わせてくれないかな？」

「……妾にそれを頼むか？」

いかにも呆れた、という様子のアテナ。

「妾にそれを聞く義理も道理もないぞ。むしろ草薙護堂に告げてやろうか悩んでおるわ」

「僕の正体がバレないほうが護堂が成長するでしょ。味方のカンピオーネが居なければ否が応でも頼れるのは自分だけだ」

「アテナ様も草薙様と再戦なさりたいのでしょうか？ 強い敵と戦いたいではありませんか？」

口には出さずにそっと心の中でエルのアシストに感謝し、彼女の様子を伺ってみる。

「ふむ、やつを鍛えるためか。たしかに一理ある。彼には我が敵として十分な力を備えてもらい、その上で大戦といきたいものだ。よからう、その案を吞んでしんぜよう」

えっ、何この展開。予想外に早い納得って何よ。まさか護堂、アテナも落とした！？

……などと黎斗の驚愕をよそにしばしの沈黙の後肯定的な返事を返すアテナ。

「あなたと戦っても良いと考えていたのだが、どうやら今のあなたは先の戦いで力を消耗した私では相手にならないようだ。ここはおとなしく茶会としゃれこもうぞ」

「あ、マスターおかわり」

「……なんともまあアナタ方ごーいんぐまいうえいですな。いやいいけどね」

ため息をつきながら空となったアテナとエルの茶碗に抹茶を入れる。

「ただいまー。やっぱり神様いたんだ？この感じだと外国の神様？」

恵那が帰宅したらしい。この場の言い訳どうしよう？つか彼女は何故外国の神の気配を当てられるのだろう？野生児の超感覚で済ませられる次元ではないだろう。黎斗の頭を無数の疑問が駆け巡る。

「あ、おかえりなさい」

「うむ。誰か知らぬが邪魔しておるぞ。……お主も隅に置けないのう」

ニヤニヤ、という擬音がもつともふさわしいであろう表情でアテナが脇を小突く。嫁か何かだと思われるのだろう、きつと。この場での反論は不利だと黎斗はすばやく話題転換を図る。

「おかえりい。今アテナ様とお茶会だよ。抹茶とココア、どっちがいい？」

アテナ様、ときちんと様付けにする。無駄な努力のような気がするのだがするにこしたことはないだろう。

「んー、抹茶でお願いしていい？ 着替えたらそっちいくね」

返事だけよこしてアツサリ部屋の奥へ引っ込んだ恵那。1分もしないうちに着替えを終えて居間に舞い戻ってきた。上機嫌で黎斗とエルの間、アテナの向かいに座りニコニコとしている。

「れーとさんおじいちゃまの他にアテナ様ともお友達なんだ。普通の人とは思えない交友関係だよねえ」

「スサノオはともかくアテナ様は微妙に違うんだけどな・・・」

「ほう…… そなたが……」

今の僅かなやりとりだけで、恵那の立場と黎斗がカンピオーネであることを彼女に隠していることを察したらしいアテナは余計な発言を控えたらしい。意味深な笑みを浮かべながら抹茶を再びおかわりする。

「あ、抹茶ありがと。れーとさんだけココアなんだね。みんな抹茶なのに」

「まさか抹茶をみんなして飲むとは思わなかったんですー」

玲瓏な声音で笑う恵那にしかえしの意味も込めて表面張力ギリギリまで抹茶を注いでやる。

「あ、あー、こぼれるよー」

「マスター、精神年齢低すぎですよ……」

悲しい人を見るようなエルの目がとても痛い。すごく痛い。まあこれは自業自得なのだが。隣で恵那がこぼさないように必死で飲んでいる光景とアテナがクツクツと笑う様子が見える。

「精神年齢は肉体に引きづられるんですー」

「また屁理屈を……」

「黎斗よ、その論理でいったら妾はどうなる？」

事情を知らない恵那が居ることわざ黎斗、と呼び方を変えてくれたアテナの反論に、黎斗は何もいえない。ここには彼よりも長生きで外見は幼い癖に精神は成熟している存在が居ることをすっかり忘れていた黎斗は押し黙る。

「れーとさんの負けだね」

こぼさずに飲みきった恵那の自慢げな表情が、ただただ恨めしかった。今度は熱湯をそそいでやろう。そう心に誓う黎斗、（外見年齢は）17歳のある日の夕方。外でカラスが、アホーと鳴いた。

§7 アテナ編あとしまつ(?) (後書き)

ちょっと強引っぽいよーな(汗
違和感とかなくせるようがんばりまっす

原作2巻編は収拾が全然つかないのでけっこう遅れますスイマセン・
・

強引に絡ませたのはミスったかな・・・

§8 欧州の大魔王、襲来（前書き）

今回の震災で被害に遭われた方々が早く立ち直れますように、と
前書きにかえさせていただきますの

揺れが長引いて焦りましたわ

§8 欧州の大魔王、襲来

———どうしてこうなった。

対面に座る誤堂が助けを求める視線をこちらへ向けてくる、が勘弁願いたい。いや、むしろ助けてほしいのはこっちの方だ。ひとにらみして黙ってもらおう。本日何度目かもうわからないが、ためいきを吐いた。隠す気力はとうの昔に尽きている。

「ホント、どうしてこうなった……」

時間は昼休み前に遡る……

箸を運悪く落としてしまった黎斗は箸を洗いに教室から水場まで足を運んでいた。時間はそう、5分あるかないかというところだろう。その間に「何か」が起こった、のだろうきつと。

教室の扉を開けた瞬間、黎斗と助けを求めるような護堂の視線が重なった。周囲を見渡せば、取り囲むような男子生徒。中心に居るのはやはり護堂とエリカ。2人の傍に居るのは霊視能力がすごい巫女。

「……ok なるほど」

大体状況が予想できてしまった。しかし、この後の展開を予想できなかったのが黎斗の明暗を分けることになる。

「護堂ってばマジ漢だな……」

そんなことを思っている間に、事態は取り返しにならないところまで進行していたようだ。彼らが行動を起こし始めた。どうやら席を移動するようだ。まったく、ご苦勞なことである。

「ホラ、黎斗行くぞ」

「あ？」

気づけば護堂は黎斗の弁当をご丁寧に持っている。

————コイツ、僕も巻き添えにする気だ！！

戦慄する黎斗。女性陣を見るが既に2人ともこの場にはいない。護堂に半ば引きづられるように、黎斗は教室を後にした。高木をはじめとする男子生徒諸君が哀れみの眼差しをむけている。気分はドナドナだ。

こうして今の状況がめでたく完成となってしまった。

エリカが自分のみ例外的に食事等に参加することを許しているのは、エルを連れているからである、と黎斗は思っている。完全な一般人が妖狐を飼いならすことはまずない。つまり必ず何かある。敵対する気配は現時点ではないようだが要注意。日常の中で正体を暴く。おそらくそんなところだろう。アパートの方を盗聴等しないのは、相手の実力がわからない以上盗聴が危険と判断したのか、はてさて盗聴がもたらすメリットと露見した際のデメリットで天秤にかけたときに比重がデメリットのほうに傾いたのか。黎斗にはわからないが多分どちらかだろう。時々、彼女から探るような視線を向けられることだし。護堂とのいちやつきを邪魔しないからというのも理由に含まれている気もするけれど。

普段はこのおかげでぼっちを回避できていたのだが、今回は恨まざるをえない。誰が好き好んで痴話喧嘩に参加せにゃなんのか。

リア充爆発しろ。口には出さずに呪いを呟きながら、弁当をつつく。

あまり得意ではないと言っていたが、恵那お手製のお弁当は自分で作る何倍もおいしかった。

「……で、いいよな？ 黎斗」

護堂の呼びかけに、意識を再びこちらへ戻す。

「え？ ごめん聞いてなかった」

「だから今日エリカを家に連れて行かなきゃならないんだけど万理谷と一緒に来てくれないか？ 俺だけじゃこいつを抑え切れそうにないし」

これ以上痴話喧嘩に巻き込むのは勘弁してくれ。あやうく口から出てしまいそうになったこの言葉をあわてて飲み込む。流石に酷か。もうちょいオブラートに包んでいってあげよう。

「今日はちょっと宿題がたまってヤバいからうれしいけどまた今度」

途端にこの世の終わりのような表情をする護堂。ちつとも悪くないはずなのに罪悪感が湧いてくる。

「ん、時間が出来たらお邪魔してもいい？」

「おう！」

エリカに向けて勝ち誇る護堂の顔に心の中で思わず付け足した。

必ず行くとはいってないんだけどな、と。エリカもそれをわかって
いるのか不敵な笑みは健在だ。そつと護堂に合掌しておくことにし
よう。

「マスター、これ不足してる食材のリストです」

帰宅するなりちよこちよこと足元にやってきたエルはどうやって
書いたのやら、メモ帳に不足食材のリストを持ってきた。……字が
上手い。下手したら自分より上手かもしれない。

「……字、書けたんだ？」

「幽界に居る間ひたすら練習しましたから。私はただの狐とは一
味違うのですよ？ あ、私も行きますので認識阻害お願いしますね」

得意げなエルの頭を撫でて買い物袋に持ち帰る。恵那にメールを
打って出発。ちなみにエルは魔力が殺菌の役割を果たすのだろうか、
何故かノミがつかずばい菌を持ってこないの衛生面では食材売り
場に連れて行っても問題ない。バレなければ。当然バレたら大目玉
だ。もっとも認識阻害を仕掛けるからまず発覚することはないのだ
が。

「買うべきは……主に炭水化物と魚、調味料ね」

恵那がどうやってかよくわからないが、野生動物の肉やら山菜を
とってきてくれるおかげで、肉や野菜の調達を気にせずに済むよう

になった。難点は肉が鹿やら熊となり豚肉や牛肉が食べられないことだがまあそれは贅沢というものだろう。どこから狩ってきたのかわからないが狼1匹を丸まる持ってこられたときには流石に困ったけれど。ニホンオオカミは絶滅していたハズだからあれは外来種だったのだろうか？

「ついでに資金調達もしてしましましょう。はい、コレいらないであろう無駄な紙」

そういつて差し出された紙はチラシ、授業で使われた数学のプリント e t c e t c . . .

念のため目を通してからマモンの権能を発動させ、大量のダイヤモンドの板に変換する。これだけ売れば10万はいくだろう。よくもまあ、これだけ集めた物だ。換金してからスーパ―、ついでに薬局もよって洗剤買おうかと頭の中で道順を組み立てる。もう慣れたから迷いはしない。きつと。

「あとは洗剤買って終わりかな」

買い物袋に結局入りきらず、ビニール袋をもらってしまった。2円の値引きをしてもらえなかったのが少し残念だがしょうがない。人の気配がないことを確認して、自らの影に袋をしまおうとしたが、許容量オーバーで買い物袋はしまえたもののビニール袋はしまえなかった。術というのは便利といえれば便利だが、時々妙に融通が利かない。袋の1つ2つでたいして変わるとは思えないのに。

そんな家への帰り道。街路樹がいきなり、ざわめいた。カイムの力で、街路樹と会話を取ろうと試みる。どうにも嫌な予感がする。

こういうときの勘はえてしてあたるものだ。

「どうしたの？」

ざわ、ざわ……

「え？ 誰それ？」

ざわ……ざわ……

「場所は、わかる？」

ざわざわ……

「そっか、ありがと。こっちで探してみるよ」

街路樹との会話を終えると、アパートへの帰路を急ぐ。洗剤はまたの機会だ。買い物を全部部屋において、黒いコートをとってこなければならぬ。

「マスター、いったい何が？」

「なんかヤバイカンピオーネが来日したんだと。木々の恐怖がここまで伝染してきてる。一体全体そやつは何をしでかしたんだろうねえ。いったん帰って、外出準備」

今は左目が利かないが我が侘をいつてはいられない。敵はおそらく関東、十中八九東京にいる。木々がここまで恐怖に震える、ということとは広範囲破壊を幾度も繰り返しているのだろう。ぺんぺん草すら残らないぐらいに蹂躪しなければここまで木々はざわめかない。

「ロクな事態じゃないことは明白だけれど、常識的な範囲で事が済みますように」

「マスター、多分願うだけ無駄です。動物的勘ですけど」

神に祈るなり我が家のキツネ様に即否定された。エルは馬鹿にできない。元野生動物だからか命がかかわる状況でのエルの勘はよくあたる。戦いになりかねない事態なので今度もきつとあたるのだろう。憂鬱だ。

「そんなため息ばかりつくと幸せ逃げちゃいますよ？ イヤなら放置しとけばどうです？ もっともその場合護堂様に全被害が行きますけど。多分」

「そーれーを防ぐんだって。とりあえず敵情視察といくよ」

帰るなり買った物を部屋に山積みにして黒いコートを羽織る。パッと見不審者に見えないこともないが認識阻害をかけるので問題はない。敵の場所がわからないから「みんな」の恐怖を辿っていくことにしよう。

「ぜえ……ぜえ……」

「マスター、日が暮れちゃいましたよ……」

恐怖の元を辿ろうと探索を開始して早3時間。時刻は8時を回っ

たところだ。近くまで迫れているのはわかるのだが絞り込めない。相手の力があまりにも強すぎてこの周囲全てから気配を感じてしまう。カンピオーネが滞在しているのだから魔術的防御を備えている建物かと推測したものの周りの建物全てに結界が張られていてはお手上げだ。流石にそこまで甘くはなかったか。唇をかみ締める。

「ミスったな…… こんなことになるならもうちょいスサノオから探査系の術教わっとくんだった」

もうちょい歩いて収穫がなければ退却しよう。明日の授業に差し障る。なにより、いくら認識阻害をかけているとはいえ、夜にここをふらふらと出歩いていれば「同類」だと知られてしまいかねない。そこまで考えて空気の違いに気づく。

「……エル」

「困もうとしてますね。気配が皆無であることを考えると死者かと。数は……ごめんなさい、わかりません」

「ん、十分だよ。ありがとう」

流石に認識阻害程度ではカンピオーネを騙す事は出来なかったらしい。包囲しようとしている敵のもっとも甘い部分へ駆け出す。ロギヌスは、顕現させない。出そうものなら次にあったときに今回のことに関してしらをきることが出来ない。今回はあくまで「正体不明の存在を撃退した」と相手に認識してもらわなければ困るのだ。正体が発覚すれば今までの苦労がおじゃんになってしまう。よって権能は使わない。

「この程度で僕を止めるなんてムリだよ。さよなら」

そっと呟き、死人の群れをすり抜ける。かなりの手練れのようにだが、敵ではない。包囲に失敗した死人たちは、こちらへ向かってくるがなんら脅威となりえない。このまま逃げさせてもらおう。

「ふむ、尻尾を巻いて逃げるかね？ 少年。」

「……チツ」

屋根の上、100m程のところに人が居る。彼がおそらく噂のカンプIONEだろう。やはりバレたか。舌打ちを思わずしてしまう。大丈夫だ、フードを被っている以上相手はこちらの顔まではわからない。

「魔力を感じない癖に認識阻害をこうも巧妙に仕掛ける。我が”死せる従僕”を赤子同然にあしらう。貴様も我が同胞だろう。気配を断つ能力は珍しいな。ずいぶん若いことといい将来が楽しみだ。ああ、先に無断で君の所領に入った非礼をわびよう」

余裕を感じさせるその口振り。護堂と勘違いしているのだろうか。だとしたらまずいか。お前より長生きだと言い返してやりたいが言ってやろうか。

「私を探りに来たのだろうか？ はるばるご苦労。君は私の名を知っているだろうが私は知らぬ。名乗ってもらえるとありがたいのだが」

「……水羽黎斗。僕は貴方を見なかった。貴方は僕を見なかった。僕はここを去る。それで手打ちにしよう」

「貴様は何を言っている？ ……まあ良い、もし私から逃げ切れた

「今夜のことは忘れてやろう。せいぜい私を楽しませろ」

フードをとり、相手を見つめる。交渉が上手く行き過ぎて、黎斗としては少し怖い。

「その言葉、二言はないね？ 明日までに見つけられなかったら今回の件は忘れてもらうよ」

「私を誰だと思っている？ そしてその条件でかまわんよ。それよりも本当に私から逃れられると思っているのかね？」

余裕の表情を崩さない相手。隙は全くないので戦うのは苦勞しそ
うだが逃げるだけならなんとでもなる。

「楽勝だね。」

死人の投擲した槍が黎斗を貫こうとして――すり抜けた。

「ほう」

相手の気配が、余裕から警戒へと変わる。

「じゃあね。せいぜい頑張って探してちょうだいな？」

黎斗の体が、闇と同化していく。同時に撒き散らされる邪気が、
コンクリートに刺さった槍を灰に帰していく。黎斗の言葉を最後に、
完全に消失してしまう。

「……！？」

流浪の守護はその瞬間、解除されていた。アーリマン、夜の権能は悪の最高神としての能力。闇と同化し、周囲に邪気を撒き散らし、生命の命を奪い去る。長く浴びればまつろわぬ神ですら奪えてしまうその凶悪な力は流浪の守護で抑え切れなかったのだ。完全に闇と同化した瞬間、流浪の守護は効力を失った。

1000年を超えるであろう時を生き、膨大な魔力を溜め込んだ黎斗の気配が露出したのは、日本で初めての事。容易に観測できてしまう、突如出現した、神にも匹敵する謎の莫大な力。一瞬だけとはいえ、未だかつてない事態に、正史編纂委員会をはじめとする各種組織は大混乱をすることになるのだがそれは余談である。

「……逃げられたか。いや、助かったというべきか」

相手の気配を見失ったヴォバンは、知らず知らずのうちにでていた汗をぬぐう。おそらくあの少年はもう捉えることは出来ないだろう。気配を遮断する術を持つ存在を”死せる従僕”で見つけ出すのは至難の業だ。なにより、消え去る直前に感じた魔力。あの強大な力の持ち主に無策で挑むのはいくら自分でも厳しいだろう。

「ふん、まあいい。次に会うときはその命、貰い受けるのでしょうか」

誰もいない空間に、死の宣告が読み上げられる。次の決闘に心を躍らせ、東欧の魔王は姿を消した。

§8 欧州の大魔王、襲来（後書き）

今更ですが僕はネーミングセンスがすごく無いです（汗
しかもなんか黎斗VSヴォバンになりそうなカンジに・・・あれ
？

§9 逃亡した魔王の反省会（前書き）

3月入ってからカンピオーネの二次SS増えてきたのでちよっぴり
幸せだったり

§9 逃亡した魔王の反省会

「ミスったなあ……」

ヴォバンの前から消え去った黎斗は、東京タワーの先端部分で姿を現した。流浪の守護が一瞬といえど解除されてしまったのは大きい。あのまま直接家に帰ると呪力を辿れば身元の割り出しが容易だろう。念のため慎重に帰る必要がある。

「バレちゃいましたね。逃亡には成功したと思いますけど、先程マスターの神力が流出してしまいましたからこれから厳しくなりますよ。いくら魔力を感じなくても私みたいな妖獣を連れている時点で術者に狙われる危険性も」

「こんなことでバレるなんてなあ…… アーリマンじゃなくてツクヨミの権能で逃亡すべきだったか」

「どちらにしろそのレベルの権能の行使に流浪の守護が耐えられたとは思えませんけど。幽世の訓練忘れちゃいました？ それに力を使わずに逃げるのはいくらマスターでも厳しいでしょう。相手も同じカンピオーネであるようですし」

エルの言葉はおそらく現実になる。なんにしてもこれからは今まで以上に行動に気をつけねばなるまい。エリカだけでも大変なのだ。他の人間までもが監視に加わることを想像するとぞっとしてしまう。

「しばらくは幽世行くの控えてネットでもやってるか」

「うっわ……」

肩の上で呆れてるキツネを無視して三百メートル以上の高さから勢い良く飛び降りる。認識障害だけでなく複数の術を起動する。失敗して正体がばれてしまえば現存する最古のカンピオーネとして祭り上げられる運命が待っているであろうことは明白。そんなのはまっぴらゴメンだ。これだけ駆使すればまず露見はしないだろう。

「ん？」

突如、流れ出すメロディ。携帯電話が点滅している。電話番号000-00000-0000、このありえない番号をかけてくるのは、須佐之男命。

「もっしー？」

「よう、なに、お前。結局正体バラすワケ？」

流石、すぐに見抜いたか。まあ彼なら黙っていてくれるだろう。そんな期待を胸に秘め返答する。

「違う。ミスった」

「ふーん。まあいいや。そっち居られなくなったら戻ってこいさ。お前が居なくなってから戦う相手がなくなってつまらん。んで、本題だ。頼まれてた件”7”人目の魔王、草薙護堂について。どうやらやつこさんは軍神ウルスラグナの権能を篡奪したらしい。ま、これは組織の人間の調べたことだからホントかウソかはしらねえがな」

須佐之男命の持つ人脈を使って護堂の権能を調べてもらっていたのだが、予想外に早い。調べる、という経験が無い黎斗は早くて2

ヶ月はかかると予想していただけに1週間かからないというのは嬉しい誤算だ。

「ありがと。にしてもウルスラグナ、か。最初護堂に会った時に感じた妙な感覚はアーリマンとウルスラグナが反応したのかな？」

「さてな。そこらは専門外なんでわからん。2神ともミスラの盟友という点は共通してっからな」

ペルシャ神話などあまり馴染みのない黎斗にとってこのレベルの知識となると完全に未知の領域だ。そして須佐之男命がここまで知ってることに疑問を覚えてしまう。彼は異国の神々を積極的に調べようとする性格だっただろうか？

「なんでそんなに詳しいの？　ぶっちゃけ大抵の人はアーリマンⅡ悪だと思っただけど」

「そこは、お前の持つ力だし？」

「さいですか……」

理由がイマイチ納得いかないが強引に納得する。神々の持つ理由なんてものは大抵理解不能な理由だし。これ真理。

「んで、話変わるが恵那はどうだ？」

何故か嫌な予感がする。雰囲気ガラリと変わったせいだろうか？　こう、タチの悪い酔っ払いの絡みみたいな。

「どう、って？」

「お前、外見は恵那のやつと同じような年だろ。年若い男女が一つ屋」

通信回線を切断する。三十六計逃げるにしかず。この手の話題で勝てる気がしない。

「マスター、切っちゃってよかったのですか？」

肩で沈黙を貫いていたエルが、ひそかに笑っている。終始会話を聞いていた筈だろうに、趣味が悪い。

答える代わりに、街道を走る速度を上げた。アパートまでもう少しだ。

「ちっ、あんにやろー。途中で切りやがって」

電話を切られた須佐之男命は不平を漏らす。それを見て笑う姫君と黒衣の僧。

「流石の黎斗様も口では御老公に敵いませぬゆえ、仕方ないかと」

「然り。然り。黎斗様に今回はしてやられましたなあ」

「まるで剣では黎斗がオレより強いような言い方じゃねえか。オレはまだ黎斗のやつにそっちも負ける気はないぜ」

心外だと言わんばかりの須佐之男命の苦言にますます笑みを深める二人。それがますます須佐之男命のぼやきに拍車をかける。電話なら話題を強制終了させる切断、という手段がとれない須佐之男命に出来ることは、二人のからかいを耐えることだけだった。

「御老公、今の方は？ 清秋院様以外に通話とは珍しい」

事態を静観していた、背広姿の男が口を開く。古老の一角たる彼は、正史編纂委員会の重鎮として普段現世に存在しているので黎斗と直接面識はないのだ。もっとも、基本的に引きこもっていた黎斗と面識があるのは須佐之男命達三人くらいのもなのだが。

「お前はそういえば会ったことなかったな。電話の相手はオレのトコの居候だよ」

「居候……？」

要領を得ない、といった表情の男に対し、黒衣の僧が補足に加わる。

「日本に現れた最初の羅刹の君。御老公と激戦の末、引き分けたお方です。ついいこの間、現世へ行かれました」

背広の男は啞然とする。今こいつは何と言った？ 草薙護堂以外のカンピオーネが日本にいたというのか？

「羅刹の……君？」

「左様」

「な!?! そのようなこと、我々は認知しておりません!?!」

「そりゃあ、話さなかったからな」

黒衣の僧の話に取り乱す男にあっさりと返す須佐之男命。

「このことはここだけの話だからな? 絶対現世で漏らすなよ」

「……おっしゃる意味がわかりかねます」

「アイツは自分の存在を秘匿することを望んでいる。下手に探ると火傷じゃ済まない痛手を被るぞ。オレもバラしたことアイツに知られたら何言われるかわかったもんじゃねえ」

途中からばやきに変わった須佐之男命に引き続いて、黒衣の僧が、意地悪く笑う。

「あのお方、普段は温厚ですが正体を探られたなら激昂して国の一や二つ易々と滅ぼすでしょうなあ」

男の顔が真っ青に染まっていく。自分が今知った情報は、「知るべきではない」情報だったのだろうか? だが、日本のためにはここで情報を得ておいた方が良くことも事実。須佐之男命達の話が事実ならば、海外の結社は「居候」のカンピオーネを知らない。これは大きなアドバンテージになる。

「……どんな能力かお伺いしても?」

恐る恐る、という表現がピッタリの表情で問いかける。一步間違えれば待っているのは国を巻き込んだ破滅だ。慎重すぎて困ること

はない。

「話してやってもいいんだが、アイツは権能多いから全部説明するのはめんどくせえ。洗脳したり束縛したり真似したり周囲を消し飛ばしたり。連戦になると怖くもなんともないが1対1ならつえーぞ。権能抜きに純粹な武術でもオレと張り合えるしな。なに、そんな怖れなくてもオマエがここで聞いたことを忘れてしまえば問題ないだろ。さっさと忘れろ。お前が黙ってさえいれば、みんなが幸せってなあ」

今度こそ、男は完全に沈黙した。権能を使わない武術で目の前の神と互角というのは戯言だと信じたい。この神が認める実力者とは、どれほどのものなのだろうか。

「……時が満ちるまで、このことは胸の内に秘めておきます。ご教授、ありがとうございます」

しばしの沈黙の後、一礼と共に男が告げる。直後に姿が喪失したが誰も気に留めない。現世に戻ったことを皆が知っているからだ。

「随分慌ててたな」

須佐之男命が杯を傾け、黎斗が調合した世界に二つと無い美酒に酔いしれる。

「御老公が脅かしすぎましたな。まあ、問題は無いでしょう」

黒衣の僧が笑いながらつまみを食べる。

「くれぐれも黎斗様を怒らせないようにお願いいたしますね」

姫君の眩きが聞こえているのかいないのか、男達の酒宴が始まる。

「ただいまー」

夜の9時になろうかという時間にようやく帰宅に成功する。追っ手の気配も監視されている様子も、ない。

「おかえりなさい。晩御飯食べよ？」

そういつて準備を始める恵那の後姿が見える。

「……もしかして待っててくれたの？」

まさか、と思いながらも聞いてしまう。

「うん。流石に家主様を無視して食べるのは気が引けるしね。一人で晩御飯っていうのもつままないし」

「……すみません」

「……………ごめんなさい」

思わず土下座してしまう。お腹が空いていただろうに、料理を作って更に待っていてくれる優しさに申し訳なさと胸がいっぱいになってくる。

「いいよいいよ。待ってたのは恵那の勝手だし。あ、お風呂も入ってるけど先に入っちゃう？ 急用があったなら疲れてるでしょ？」

笑顔で風呂を先に勧めてくる恵那。まさにいたせりつくせりである。外出理由の詳細を隠してカンピオーネを探しに行っていた黎斗としては罪悪感しかない。ここで先に風呂などというわけにはいかないだろう。

「先にご飯いただくよ。洗い物は僕がやるから先にお風呂入っちゃって」

「私も洗い物の手伝い……は出来ませんね…… 布団敷いてきます」

いうが早いか駆け出すエル。食事先にしようと言う暇すらなかった。補足しておくところのアパートは多くの部屋があるわけではない。某幻想殺しの人と違い黎斗には浴槽で寝る根性はない。つまり居間に恵那、エル、黎斗の順で布団（エルは籠の中に柔らかい毛布を敷き詰めるのがお気に入りらしいので厳密には布団、籠、布団の順であるのだが）を敷いている。エルが真ん中で寝ているのはエルが最終防衛線だからだ。恵那があんまり気にしてないようなので内心複雑な気分の黎斗である。

「……」

「……」

しばし無言の末、恵那と2人で苦笑い。おそらく口で引っ張って布団を敷くのだろうが、布団を破かないように敷くのは至難の技だろう。そんなことを考えていた矢先、雪崩が崩壊するような轟音が

響く。夜更けにこの音は近所迷惑以外の何者でもない。次いでエルの助けを求める悲鳴が届く。

「マスター！！ つーぶーれーるー！！ 助け……！！ 重……！！」

おそらく布団を押入れから引っ張り出したまではよかったがその後で押しつぶされたのだろう。エルの大きさならば、布団でも十分脅威になりえるような気もする。

「夕食の前に、エルの発掘作業だな。こりゃ」

じたばたと抵抗する音がだんだん小さくなっていく。疲れてきたらしい。恵那と再び笑いあい、黎斗は居間へエル発掘に向かった。早く行かないとまたキツネ様にへそを曲げられてしまう。とつとと敷いて、ご飯にしよう。

「あのカンピオーネはまた明日でいつか」

課題は全て後回し。いつもこれで首を絞めているのだが気にしない。あの男がトラブルを起こさないよう神に祈って黎斗は今後の方針を考えることを諦めた。

§9 逃亡した魔王の反省会（後書き）

視点変更回数減らせるようにがんばります

あ、今回登場した委員会の方はもう登場しないかと。

幽世で行動可能な人材が必要となったのでご足労願いましたっ

あとはヴォバン編終了まで一直線かな？

§10 戦禍来来（前書き）

調子に乗りすぎた感じがいなめない・・・
戦いの描写って難しいですね

そんなこんなで投稿です

§10 戦禍来り

昨夜なんだかんだいって行かなかったことに、護堂から恨みの視線を受けたのが朝の話。そしてその護堂は今男子チームに混ざり無双を繰り広げているエリカに呆れている。

「マジか・・・」

呆然と呟く黎斗。魔力を使っている様子が全く無い（もっともこれは使うまでも無いということなのか正々堂々ということなのかはわからないが）にもかかわらず男子軍団を圧倒しているのが凄まじい。勝てる気が全くしないので黎斗は応援に回っている。

黎斗の身体能力は、ただの人間にすぎない。最初に死んだ神、ヤマの権能を篡奪したときに黎斗の肉体はそれまでと変質してしまったのだ。強大な呪術に対する耐性、という特権は失われ魔力もカンピオーネになる前と同じくらい、つまり皆無になった。運動神経も0といっても過言ではない。権能を発動時は圧倒的な魔力を得られるがそれは一時的なものに過ぎず、長年の修行により魔力などを増やしてきたものの神々の半分あるかどうかといったところだろう。

黎斗の圧倒的な戦闘能力は、全て少名毘古那神の権能や呪力による肉体強化の結果に過ぎない。不意打ちに対処するため神経強化を当たり前前にしているが、していなければ中級の騎士にすら遅れをとってしまう。長年を得て莫大な量となった神力はそうそう枯渇しないので出来る無茶苦茶な芸当だ。もっとも、殺された程度で「死にはしない」のだが。

だからなおさらなのか、エリカの身体能力をこうもまざまざと見せ付けられると羨望の眼差しを送ってしまう。

「しかも護堂はちゃっかり万理谷さんと仲良くしてるしさ」

護堂に目を向ければ祐理と仲良くしている様子が垣間見られる。美少女とお近づきになるのが本当にお上手な方である。護堂を主人公にしてラブコメ小説が書けそうな勢いだ。

「・・・アホなコト考えてる暇あったら今後について考えるか」

黎斗を悩ませるのは、自身の扱う武器に関してだ。彼にはロングヌスという相棒がいるのだが、現代での戦闘を考えると心もとない。昔と違い今の時代は狭い空間で戦闘になる危険性がある。仮に電車の中である死人に襲われたとして、槍を使うのは厳しい。素手で戦うと殲滅速度が格段に落ちてしまうしリーチが皆無。魔法を詠唱している時間がもったいないし詠唱破棄で使おうものなら電車が吹き飛んでしまうだろう。黎斗はそこまで破壊系の魔法を使いこなせる訳ではないので詠唱破棄・無詠唱で威力・範囲を絞れる自信がない。それに神力・呪力などの力を使い切ってしまうとヤマの権能により変質してしまったこの身体は戦闘に耐え切れない恐れもある。

「やっぱ銃か刀剣、ナイフ辺りかなあ」

今度幽世に行ったときにでも武器を漁ってみるか。しばらくは傘を使うことにしよう、と当面の間の代用品に目処をつける。まさか大魔術師の住居に譲ってくれるように願う訳にはいくまい。盗む、奪うという論外な選択肢は当然却下。欲しいからといって相手の都合を無視したらいけない。

この辺りの思考はパンドラに言わせると異色だとか。もっとも「まあ、まだ化けの皮が剥がれていないだけかも」などと恐ろしいことを言っていた気もするが。本来パンドラの事を現世で思い出すことはできないらしいのだが、なんの因果かバラキエルに召喚された際にも色々変化があったらしくそのまま記憶しておくことができ

いるらしい。おかげで「神殺し一の変態」などという不名誉なあだ名をつけられそうになる寸前にまで追い詰められたことがある。補足しておくところの場合の変態というのは「正常ではない」という意味であって「キャー！！変態よー！！」の変態ではない。けっして「そうしたら銃刀法違反にならないようにごまかさなきゃか。めんどくせえ・・・」

一般の銃器や刀剣の類も入手が容易ではない上に迂闊に大衆の目に晒してしまえば銃刀法違反で警察に捕まってしまう。昔と違って大変な時代になったものだ。

「もつとも隣人の家から銃火器が一式出てきたら僕もびびるし、武器の入手が困難なのは良いことか」

アパートの各部屋から爆薬だのミサイルが出てくる様子を想像し青くなる。やっぱり法律があつてよかった、と思う黎斗だった。

得物について考えた翌日の夜。

不穏な気配に、目が覚めた。背中を嫌な汗が伝ってくる。今日は早く寝たのになんてことだ。

「ん・・・？」

「あ、れーとさんもこのイヤな気配感じたの？」

目を開ければ、何時の間に着替えたのか、巫女装束の恵那が草薙の剣を片手に出て行こうとしている。

「どうなってんの？」

「わかんない。なんとなくやな予感がするの。私ちよつと様子見てくるかられーとさん待ってて」

おそらくあのカンピオーネが暴れ始めたのだろう。それ以外に要因が無い。ここ数日平和が続いていたから、争いは起こらないと思っただがどうやらそれは儚い願いだったようだ。相手は護堂だろうか？ 事態がよくわからない。もし、カンピオーネ同士の争いなら恵那がいくら強かろうが敵うわけがない。

「危険だから外にでちゃダメだって」

恵那に声をかけながら外を眺めた。カイムの権能を発動、木々から情報を得ようと試みる。流浪の守護のおかげで至近距離で発動しても恵那に気づかれた様子は無い。

「大丈夫だって。こう見えても恵那強いんだよ？ れーとさんを守ってあげられるくらい。じゃ、いつてきまーす」

「は！？ ちょ、待てってば！！」

やんちゃな娘さんは止める暇なく外へ飛び出していった。猪武者じゃあるまいし、口に出かけた言葉を飲み込む。そんな悠長なことを言って入られない。

「・・・ちっ、スサノオという教育してんだよ！！ みすみす死

地に行くなっつーの!!」

幸せそうに安眠しているエルの毛布を奪い取る。哀れ丸まっていたキツネは籠から投げ出され、畳の上をころころ転がっていき壁にぶつかった。

「ぎゃふっ！　ますたあ、いきな・・・ッ!？」

寝ぼけまなこでいたエルも外の気配を察するなり意識をすぐさま覚醒させる。

「これはいったい!？」

「わかんない！　恵那が飛び出していつちゃったから追いかけるよ!!」

相手が本当にカンピオーネなら恵那が危ない。それなりの実力があることはわかるがおそらくエリカと同等程度、神剣の神懸りで挑んでも相手にならないだろう。着替えている時間すら惜しい。ジャージの上から黒井コートを羽織り、武器用に傘を持って外に飛び出す。

「うわ・・・」

狼。狼。狼。見渡す限りが狼の群れ。30まで数えたところで黎斗は数えるのを放棄した。

「この狼統率されてますね。あっちに向かっているようですが、どうします?」

おそらくこの狼は権能だろう。道路をわき目もふらずに走っていく狼の大群はなんだかシュールだ。恵那が暴走していなければ動画でもとりたいがそんなことをしている場合ではない。

「恵那は・・・こっちか」

草薙の剣の僅かな神力を頼りに狼の走り去っていく方向へ目的地を定める。認識障害をかけて走り出した。狼の進路を邪魔するわけにはいけないので、電線の上を並走する。

「この前のカンピオーネの方が行動を？」

「わかんない。木々に聞いたけど死人と狼が徘徊してることしか。おそらく護堂とアイツとの戦闘だと思う」

「世も末ですね・・・」

本当に、世も末だ。こんな大規模に迷惑をかけるのは勘弁願いたい。あの時に逃げずに挑んでおけばよかったか、と物騒なことを考えてしまう。

「見つけた・・・！」

少し前に見失った恵那だが再び視界に収めることに成功する。足元で呪力を爆発、一気に加速し恵那に追いつく。

「恵那！」

その声に恵那が振り向く。追いつくことは無いと思ったのか追ってくることに無いと思ったのかはわからないが、その表情は驚きに

包まれている。

「れーとさん！？　なんで！？」

「恵那、帰るよ。これ以上は危ない」

「えー、大丈夫だって。れーとさんつまんなーい」

大丈夫と言われても、相手を鑑みるに大丈夫の根拠が全く無い。戦闘の余波で吹き飛ばされるだろうに。

「つまんなくて結構。帰るの！」

なんだろう。駄々をこねている子供をしかる親の気分だ。ジト目でつまらないと言われてもひくわけにはいかない。最悪、ディオニユスを使うか。

「マスター、恵那さん、囲まれていますよ」

周囲を見渡せば、死人が自分達を包围しようとしている。全員がそこそこの使い手、大騎士クラスもいくつも見受けられる。数が多いから恵那を連れての逃走は厳しい。即、全滅させる。

「・・・はあ、こいつら殲滅したら逃亡するよ」

「しょーがないなア。・・・正直これも相手の全力ではなさそうだし、なーんか恵那では荷が重そうだね。たしかに逃げちゃったほうがいいかも」

この死者達が恵那の説得に役立ってくるとは皮肉なものだ。大体

ビックリな野生の勘があるんだから相手の危険を察してほしかったと思うのは我侭だろうか？

「うし、じゃあ蹴散らしますか。・・・行ける？」

傘を構えつつ、恵那に尋ねる。ロングリヌスを使えば恵那に正体がバレるだけでなく、死者を通してあのカンピオーネにも気づかれかねない。もし彼が来た場合、恵那を守りながらの戦闘は困難を極める。今日が満月か新月だったら月読命の権能でなんとかあったのだが、無いものねだりをしてもしようがない。こんなに早く傘で戦うことになるのは少々予想外だが、まあなんとかなるだろう。

「恵那は大丈夫だけど・・・れーとさん、戦えるの？　ってか傘で戦うの？」

戸惑いを含んだ表情で恵那が返事をよこす。傘2本で戦おうとすれば、当然か。

「それでも僕、そこそこ強いよ」

そう返し、両手に傘を持ち、駆け出す。大騎士級はおそらくこの半数。恵那でもおそらく荷が重いこの敵は大半を自分が倒さねばならないだろう。

相手の刺突を避け、間合いに入り込む。呪力で強化した右手の傘で、左下から切り上げる。と、同時に左の傘を投擲、音速を超え放たれた傘は狙い変わらず前方の死者の心臓を直撃した。空いた左手で切り裂いた死者の持つ剣を奪い、左側の死者を頭から切り下ろす。背後からの一閃を地に伏せ見ずに回避、そのまま回転し右に難いで両断する。

「・・・ざっとこんなもんか」

生前名を馳せた大騎士といえども、黎斗の前では赤子同然。剣を交えることすらできず、傘の見事な連携の前に為す術なく屠られていく死者の群れ。惨劇の幕は一向に降りる様子を見せない。もし死せる従僕に血が流れていたのならば、この場には血の雨が降りいだろう。そんな一方的な蹂躪。

「流石マスター、腕は鈍ってませんね」

肩にしがみついているエルが口を開く。慣れたものでしっかりとしがみつきのながらも口調には余裕が見受けられる。

「黙ってて、舌噛むよっ」

エルを黙らせ、電光石火の速さで敵に切り込む。ついさっき黎斗がいた場所から、先ほど切断された死者の首が灰となって飛んでいく。敵の総数はもうそろそろ十人を割る勢いだ。

「マスター！」

エルの悲鳴に、思わず振り向く。

「ちっ!!」

黎斗の駆け出す先には、恵那と彼女を囲む大騎士。足元に数体の死体が灰になりつつある辺り互角に戦えることがわかるが、満身創痍な今の恵那ではもう無理だろう。殲滅したつもりが取りこぼしていたことに歯噛みしつつ駆け寄り恵那に振り下ろさんとする刃を傘で受ける。

「れ、れーとさん!？」

「大丈夫？ こいつら倒すからちよい待ち」

返事をしながら、左に剣を突き刺す。右手の傘を前に投げる。投げられた傘は、途中で開き相手の視界を奪う。右からの攻撃から恵那を庇いつつ避け、後方からの切り上げに合わせて上空に飛び上がる。傘が破壊される頃には黎斗は距離をとることに成功した。

「くっ・・・」

傷に触れたのか、恵那が苦しそうなうめき声を上げる。このままではまずいか。顔色が土気色になりつつある。

「限界だな」

これ以上の戦闘は危険だと判断し、邪眼を発動。瞬間、相手の輪郭が歪む。ゆっくりと、しかし確実に相手の身体が消滅していく。あの男が今の消滅に反応するか。半ば博打だったがどうやら到来する気配は無い。

「あ・・・ありがとう・・・」

最後に、そんな言葉を残して死人は全員消え去った。意思でなかったとするならば、権能で囚われていたのだろうか。

「ほんにまあロクでもない力だな・・・」

無然と呟き、気を失っている恵那を背負う。早く帰って手当てを

しなければ。

「つか、認識阻害かけていなければコレ明らかに僕不審者だよなあ・
・・」

夜更けに意識の無い美少女を背負う男。絶対これはアウトだ。認識阻害をかけていることに感謝しつつ家路を急ぐ。

「治癒は苦手なんだよな・・・」

出血自体は収まりつつあるものの恵那の容態は回復しない。こんなことなら本当、治癒を習っておけばよかった。

「マスターは身体の構造上やむなしかと。いつも自己^{リジエネレーション}再生ですし」

この際泣き言は言っていられない。やらないよりはマシだろう。恵那へ呪力を送り治癒の術をかける。

「早く帰って風呂に投げ込もう」

「少名毘古那神の力ですか。・・・治癒を名目に女の子を全裸にするとか鬼畜ですね」

「このまま突っ込むわ!」

お湯の量を少なめにしておけば溺死はしないだろう。それにいくら治癒のためとはいえ女の子の衣服を勝手に脱がすのはいけない気がする。

「マスター」

「わかってる」

真剣な声音になったエルに返す。恵那を戦闘不能にしてくれたお礼はきっちりしよう。もつとも、恵那の自業自得とも言えるのだが。

「恵那の手当てだけしたら行くから。エルは恵那を看着て」

アパートに戻ると恵那を部屋に寝かせる。出血箇所が多い上に雨に当たっているので衰弱が激しい。激しい振動が悪影響を与えることと覚悟で疾走すべきだったか。応急処置レベルでもいいから手当ての方法を学んでおくべきだったと今更後悔してしまう。

「マスター、お湯入れてきました。私見てますけど溺死しないレベルの水量にしてくださいね？」

エルに頷き、恵那の部屋に侵入。流石に箆笥を開けるのは気が引けるので、壁にかかっている千早を一着持って退室、バスタオルと共に脱衣所の籠に入れる。水量を確認。まあ、こんなものだろう。

「あつつ・・・」

右手を浸し、少名毘古那神のもうひとつの権能を発動、温泉療法の創始者たる彼にかかれただの風呂を治癒効果のある秘湯に変えるなど造作も無い。今回の風呂は傷・疲労に良く効くように效能を

調整した。ついでに温度も適温にする。火傷されたら怪我が増えてしまう。これならば即効性こそないものの、数時間つけておけば全治するだろう。

「ま、こんなもんか」

一人で納得し、恵那を抱いてくるために部屋まで戻る。抱きかかえて風呂まで運ぶ。出血していなければ、アヤシイ雰囲気にもえないこともない。今は別の意味で怪しいが。

「よっと。・・・服濡れるけど勘弁ね」

服を着せたまま浴槽へそつと下ろす。脱がす脱がさないで葛藤したのは心の隅にしまっておく。お湯につける瞬間に、恵那が僅かに身じろぎした。

「エル、後は頼むね」

エルが浴槽にやってくるのと入れ替わりで黎斗は部屋に戻る。ふと、見下ろせば畳が血でベトベトだ。振り返れば、廊下もだいぶひどい。

「うへえ・・・これ乾いたら絶対落ちないよなあ」

雑巾を持ってきて、掃除を始める。数回往復してようやく血は目立たなくなった。

「これでいいや。暢気に掃除してる時間はないし」

バケツを洗って、ようやく玄関に出る。外の天気は荒れに荒れて

いる。

「さあて、行きますか」

目指すは、この嵐の中心部。そこにあの男も、護堂も、きっといる。

§10 戦禍来来（後書き）

V S ペルセウスをすっかり忘れていたので微妙に焦ってます（汗
外国まで黎斗飛ばす理由がああああ

あ、原作3巻の話（護堂 V S ウルスラグナとか）は当然のごとく省
かれます。ご理解を

まあそこは変化させようないし・・・

§11 都内決戦（前書き）

ええ、題名魔王縛りしてたつもりなんですけど諦めました（苦笑

活動報告で10日とか言っていましたけど予想外に周辺整備が進んだので前日投稿っ！

2011／04／10

リリアナの台詞と月の神の下りを若干修正

§11 都内決戦

暴風が吹き荒れる嵐の夜に、無数の狼が出現する。生まれでた狼達は、夜の街へと駆けていく。狼達が湧き出る中心、佇むのは最古老の魔王たるヴォバン。嗤う。嗤う。嗤う。哄笑が響き渡り、雷鳴が轟くその様は、見るもの全てに恐怖を呼び起こす。

「ハハハハハハ・・・！！！！ 探せ！！ 探し出せ！！」

我が狢犬共よ！！ 我が従僕達よ！！ あの小僧を見つけ出せ！！

あの巫女を見つけ出せ！！ 私の獲物を連れて来い！！」

彼が口を開くたび、雷雨は強さを増す。もうこの地域には避難警報が出ている。天候は悪化する一方で改善の様子を見せない。この事態を引き起こした元凶が、さらに楽しそうに、上機嫌になりつつある。じきに都内全てが避難対象となるだろう。未曾有の大災害が、ただ1人のカンピオーネによってもたらされたなどということを理解できる人は当事者を除けばいないだろう。

「ヴォバン侯爵、まさかここまでとは・・・ これは参りました。権能すら使わずにこの有様とはちよつと勘弁してほしいですねエ・・・」

どんよりオーラを漂わせる甘粕冬馬は、これから起こることを想像して暗惨たる気分に含まれる。余興でこの有様なのだ。カンピオーネ同士が全力でぶつかり合ったらどうなるのか、想像するだに恐ろしい。このままでは首都が壊滅しかねない。日本の記録に初めて刻まれるカンピオーネの闘争とそれによって引き起こされる被害。今ですら地域によっては水没、落雷、暴風で怪我人が出ているのだ。死者がいないのがせめてもの救いだが、いつまでその幸運が続くか

わからない。

「今日が日本最後の日にならなきゃいいんですが…… あそこまでノリノリだと……」

正史編纂委員会は今、都内の人間の避難にかかりつきりだ。政府と協力しているものの人口を鑑みればもうしばらくはこちらに手を回す余裕はないだろう。もっとも、こちらに人手が来たところで何もできないのだが。

「欧州のほうはどうやって被害を抑えていらっしゃるのですか？」

隣でこの光景を眺めているエリカへ語りかける甘粕の口には、いつもの余裕を感じられない。この展開に相当参っているらしい。予想外にヴォバンが上機嫌で権能を振るっているのだ。

政治的な話を苦手とするリリアナは、エリカと甘粕の話を半分流し聞きしながら老王を眺め、護堂と彼の会合を思い出す。候は草薙護堂との会合のとき、なんと言ったか。

「そうか、この所領の主は君の方だったのか」

君「の方」だったのか。君でなく君の方と言ったのは何故だろう？ おそらく先日の強大な気配が関係しているはず。つまり――

「候のあの台詞が意味するのはおそらくもう一人のカンピオーネ。リリイもやっぱり引っかけたのね。甘粕さん、こちらについては何かご存知？」

こちらの考えていることを一瞬で悟ったエリカは甘粕へ疑問を投げかける。

「残念ながら全く何も。こっちが知りたいくらいですよ。魔王なんて大物の誕生がここまで秘匿されてるってこと自体が異例中の異例だと思いますが。存在を隠す旨みなんてないでしょうし」

「組織の言いなりになるカンピオーネなんて未だかつて聞いたことが無いわ。だからこれは本人の意思よ」

本人の意思、と断定したエリカにリリアナは懐疑的な視線を向ける。

「隠遁生活をしている方が居られる、と？ 賢人会議にすら察知されないなんていったいどのような行動をとればよいと思う？ アイーシャ婦人ですら」

「落ち着いてリリィ。別にそれ以外にも方法はあるわ。たとえば、賢人会議発足前に権能を篡奪し直後に隠遁とか」

雪崩のごとく言葉を吐き出すリリアナをエリカは諭すように語り掛ける。

「・・・我らがまつろわぬ神の出現を把握する前に篡奪した、というとか」

エリカの澄んだ瞳に彼女が言わんとすることを察し、リリアナは言葉を吐き出した。

「なるほど、それなら可能性はありますねエ。だとしたらその方、被害を隠し切ったワケですから凄腕ですね。組織が絡んでいれば情報は漏れるでしょうし単独ってところですか。・・・今回の事態に

介入してくれないかなア」

甘粕は切実な表情で、神殺しの来臨を神に祈った。目を開ければ少女達がヴォバンに挑まんと動き出す。見送ろうとした矢先、電話が入る。嵐の拡大に歯止めがかかったらしい。護堂との戦いを前に呪力の放出を控え始めたようだ。なんという僥倖。

「御武運を」

声にならないその呟きとともに改めて彼女達を見送る。自分の実力では歯が立たない。足手まといもいいところだろう。青年は神殺しの少年と彼に仕える騎士達の勝利を願う。

闇夜を疾走する。周囲に人影は皆無であるが、認識障害は怠らない。

「なんかアテナの時と似てるな」

漠然と思ったことを口にする。あの時との最大の違いは黎斗が被害を被ったか否か、ということだろう。水を回避する古い呪法、”避水訣”により雨は彼に当たらない。勝手に避けて落ちていく。流石に暴風は抑えきれず若干速度が鈍るが、その程度なんの障害にもならない。

「風除け呪文習っとけばよかった」

そう呟く彼の表情は、厳しい。今回参戦したら、今までの苦労が全ておじさんになってしまふ。護堂にバレてしまえば、これから先は護堂単独で戦う機会を奪ってしまうことになるだろう。それは避けたい。しかし、参戦しなければ首都壊滅が時間の問題になってしまふ。最悪の場合、護堂死亡のオマケつきで。それは絶対に阻止せねばならない。個人的には恵那の分のお返しもしてやりたいのだがそんな私情を挟める余地はなさそうだ。

「僕が影から援護したとして護堂にあの男を倒せるか。つまるところ、焦点はそこなんだよなあ」

とりあえず状況把握、と黎斗は両者をよく見ることでできる位置に移動する。

「・・・護堂、また女の子連れてるし。なにもこんな非常時にハーレム建設しなくても。事態の深刻さわかってんのか？ 人が必死に被害を抑える結界を都内全域に張っている時に・・・なーんか馬鹿らしくなってきた」

首都が壊滅しそうという話が出ていることを近所のタマ（三歳♂ 三毛猫）からの連絡で察知した黎斗は急遽行動を変更、護堂の援護より先に暴風雷雨の抑制結界を見抜かれないように苦労して張ってきたのだ。護堂が秒殺されないことを前提として、それでも全力疾走でやってきたというのに当の本人は新たな美少女を捕まえている。こっちの必死の努力を返せと叫びたい。

「あーあー。やってらんねー。」

氷点下の瞳で護堂を眺める黎斗。状況は依然不利なのだが光る剣で狼に変化した男を切り裂いたし、銀髪&mp;エリカがサポー

トしてるし、危機的状況に陥ることはないだろう。あの剣は反則と
思えるほど強い。

「あとはあの死者をなんとかできればい……る？」

いいんだけどね、と続けようとして絶句した。護堂が再び光る剣
を持っている。あの剣は一回ポッキリではなかったのか！

「はあ！？ ひよつとして条件は一日一回、じゃなく一つの神に一
回、とかそういうオチ！？ 意味わかんねえぞ！！」

周囲に人が居ないのをこれ幸いと喚き散らす。足元に合った空き
缶が黎斗の蹴りを受けて彼方まで吹き飛ばされ、小石は遙か上空に
打ち上げられた。本当に護堂はいたい何なんだ。もっとも、彼も
疲弊が凄いように見える。傍目にわかるほど息が荒い。

「もっともこれが朝飯前だったらそれはそれで困るんだけど。護堂
のあの疲弊具合じゃこれ以上は厳しいか？」

黎斗の言を証明するかのごとく、男の一方的な攻撃が始まる。稲
妻を落とし、暴風をぶつける。銀の少女も、エリカも、抗うすべな
く吹き飛ばされる。護堂も反撃に移れる様子が無い。今回はここま
でか。

「なんかこの人長年現役やってそうなオーラだしてるしね。生涯現
役じいさんの相手が今の護堂じゃムリなのは当たり前か」

覚悟を決め、乱入しようとして足が止まる。護堂の気配が、変わ
った。

「なんか雷撃使い始めやがったし・・・」

突然稲妻を打ち始めた彼をみて、驚くより先に呆れてしまう。窮地に能力覚醒とか主人公みたいなのをする奴ではないか。もつとも今はまだ互角だがいずれは押し切られるだろう。おそらくあの男は覚醒すれば勝てるほど甘い相手では、ない。

「っーかさつきからこの辺ノイズが多いな。誰かが誰かになんか話しかけているのか？」

稲妻の応酬が始まってから、この周辺で雑音がしきりに発生し黎斗の脳に響く。ここまで喧しいのは非常に稀だ。カイムを発動、意思疎通を試みる。

——死者の、応援。あの男を倒せ、と護堂を奨励する無数の呼び声。

呼び声が増えるほど、稲妻の威力が僅かだが上がっていく。

「なーる、っーことはあの雷撃は応援もらうと強くなるのかな？」

ならば、陰から手を貸すことは出来る。カイムの権能はそういうことに特化している。まさにうってつけではないか。

「これすんの久々なんだよなあ・・・ 最大出力、いきますか」

自身の周囲に不可視の結界を簡易生成。認識阻害も重ねがけをする。その上で、カイムの権能を最大出力で発動。神、カンピオーネ、人間以外で都内に居る、あらゆる生命に協力を要請する。協力してくれる生命の思念を収束、護堂のみに届くように変換して送りつける。幸か不幸か今回は災害を引き起こす存在が相手だ。こちらへの協力者は鼠算で増えていく。最初こそ膨大な量の思念を掌握するの

に手間取ったが、慣れてしまえばあとはたやすい。

「破壊者を食い止める。みんな、護堂に力を・・・!!」

「ヴォバンと戦う力を貸してくれ!!」

手を掲げ叫ぶ護堂。瞬間、とてつもない量の思念が舞い込んできた。さっきまでとは桁が違う。

死者だけではない。近隣住民だけでもない。エリカ達だけでもない。この嵐によって苦境に立たされた、数多の生物。彼らまでもが老王を倒せと護堂に呼びかける。個々の呪力は取るに足らないものの、それが無数の量となれば話は別だ。倍以上の呪力を得て、彼らの声援を受けた護堂は、灼熱の雷をヴォバンへ放つ。

「!?! 小僧、貴様いったい何をした!?!」

突然、段違いの威力・精度で雷撃を放ってきた護堂にヴォバンは目を見開く。更に現在進行形で護堂の呪力が膨れ上がっていく。

「ならば、これでどうだ!!」

護堂の呪力が急激な増加の一途にある。その上数十名はいるだろうか、元従僕達が鹵向かって来る。これ以上長引かせても自分に利無く害しかない。そう判断したヴォバンは、頭上に蓄積してきた莫大な雷雲を解き放つ。必滅の紫電が護堂へ向けて落とされる。

——勘付いたのは、卓越した霊視能力を持ち、離れた場で見守っていた祐理だけだった。

突如護堂に直撃しようとしていた、紫電が歪む。姿を捉えることが出来なくても、祐理の霊視は何者かの存在を感じ取る。僅かに感じたのは、強大な月の神の気配。出鼻を挫かれ呪力を減らした紫電は、護堂、エリカ、リリアナを直撃することなく大きく逸れて大地へ落ちた。当事者達には、紫電が歪んだ事は認識できなかったに違いない。

「我は全ての敵と悪を打ち砕く！！ 我は勝利を掴む者なり！！」

護堂の声と共に、まばゆい閃光が視界の全てを塗りつぶしていく。

「無事に防げたようだなによりなにより」

ロンギヌスを右手に黎斗が呟く。

あの雷を護堂達だけでは防ぎきれない、と判断した彼はロンギヌスで雷と化した呪力の核を破壊したのだ。神すら殺すこの槍に呪力を破壊できない道理は無い。核を失った雷はもはやただの落雷、彼らだけでも対処は可能だろう、と踏んだのだが目論見道理に事が運んだようだ。月読の権能により生じさせた外界との時間差は三十倍以上、その上自身の最大速度を出していたのだ。流浪の守護による隠密効果は月読の権能のような強大な力を発動させると一時的に無効化されてしまうのだが、認識阻害を重ねがけし超神速で飛翔した黎斗を認識できたのは誰もいないだろう。雷を遥かに凌駕する速度を久々に出したせいかな、足が痛い。

「相手が相手だったからこのくらいの助けはしょうがないか。そういえばあの男、なんて名前なんだろう？」

今回は動物からの情報以外ロクな情報を持っていないためなのか、あの男の名前が最後までわからないままだった。護堂に聞けばわかるだろうがそれをしてしまえば関わっていたことがばれてしまう。隠した意味が無い。

「ま、この勝負ドローになったっばいいいか。　僕が帰っても大丈夫かな？」

様子を見れば、祐理が二人の中に乱入しているではないか。あの中に乱入する胆力は感嘆に値する。彼女が口を開いた途端、男の殺気がみるみる失われていく。私のために争わないで！ 的ななにかなのだろうか？

「・・・あの男ロリコン？　万理谷さんになんか言われると矛収めるんかい」

当事者達の会話を聞いていない黎斗の中で誤解が加速していく。

「ロリコンVSハーレム大王。万理谷さんを巡っての争い。首都崩壊はオマケ、ですか。崩壊防ぐために必死してたこっちがホント、馬鹿みたいだ。かえろかーえろ、ったく・・・」

すっかりへそを曲げた黎斗は、護堂達をもう一度見るとアパートへ向けて歩き出す。打ち上げられていた小石が地面に衝突し、小さな音を軽く立てた。

§11 都内決戦（後書き）

場面転換多いですね・・・

これは今後の課題かなあ（汗

あ、前回の補足なんですけど恵那が神懸りしなかったのは相手が自分と同レベルで複数いたため発動させる余裕が無かった、という流れです

これもしっかり描写できなきゃなあ・・・

・・・つか僕って愚痴ばつかな気がしますな（苦笑

ヴォバン編、もう一回続きます

§12 ヴォバン編、あとしまつ（前書き）

場面切り替え頻繁に起こりますがご勘弁を
とりあえずこれで原作2巻までは終了、かな？

あ、感想下さった皆様、評価してくださった皆様、ありがとうございます
いますっ

累計PVが5万超えててビックリしました。

これからお付き合いたいだけだと思いますっ

§12 ヴォバン編、あとしまつ

「あ、れーとさん・・・迷惑かけてごめんなさい・・・」

帰宅するなり恵那が頭を下げてきた。顔色良好、目立つ外傷もなさそうだ。エルにこってり絞られたらしい。

「んー、今度から気をつけて。それと今日のこと、秘密だよ。僕は今日ずっと家に居た、ってコトで口裏あわせよろしく」

「うん・・・おじいちゃまかられーとさんを戦わせたこと怒られちゃったよ。れーとさんもおじいちゃま達から力を借りてるんだね。恵那よりも格段に親和性が高いから戦うたびに取り込まれやすくなってる危険なんだってね。本当にごめんなさい」

どうやって誤魔化そうかと悩んでいた矢先、須佐之男命が上手く誤魔化してくれたことを知りそっと心の中で感謝する。こんなに上手な言い訳は黎斗では出てこなかっただろう。

「いいって、こっちも毎日迷惑かけてるからあいこってコトで」

笑いながら手を少し振る。治癒した、といってもそれは肉体的な話。疲労まではおそらくとれていないだろう。はやく寝かせたほうがよい。反省してくれたなら特にそれ以上咎めるつもりはないし。

「今日は早く寝なさいな。明日からまた忙しい毎日が始まるんだし」

睡眠を促すと、しばし逡巡した後おずおずと尋ねてきた。

「あ、あのさ・・・今度、恵那に武術教えてくれないかな？ 恵那
ちよっと強くなきゃいけない用事があつて」

「強くなきゃいけない用事？ 恵那くらい強ければ十分な気もする
けれど」

普通の女子高生に強さなんて必要ないだろうに。草薙の剣も持つ
てるし巫女というのはいつの間に物騒な職になったのか？

「まだ、今の恵那じゃ敵わない気がするんだ。おじいちゃまがれー
とさんにはまだ言うなつて言うから詳細は教えてあげられないの。
ごめんね」

須佐之男命が一枚噛んでいる、という時点で何か怪しいものを感じ
る。あいつは恵那を強くしてどうするつもりなのだろう？

「危険なニオイが漂ってるんですが・・・」

「だいじょうぶ！ みんなの迷惑になるようなことはしないから、
きつと」

「きつとつて恵那さん・・・」

エルが呆れたように口を挟む。自信満々で大丈夫と言い切るとこ
ろが逆にすごく不安を感じる。きつととか付け加えてるし。

「まあ・・・恵那が元気になったらね」

恵那はまだ数日は体調の様子見が必要だ。その間に直接、須佐之
男命に聞いただそう。現代日本で今の恵那以上の武術が必要という

のはどんな事態なのか。

恵那が先に寝かせた後、ベランダに出て麦茶を飲む。三日月を見ながらのお茶も、乙なものだ。馬鹿正直に一人働いた今日はなんか飲まないとやってられない。

「まさか護堂がこの恵那の件に関係してるんじゃないかな……」

「何を馬鹿なこと言ってるんですか、と言い切れないのがまた……」

普段なら一笑に付す発言だ。だが巫女という立場にしながら力を必要とするのだ。まず無いであろうそんな事態（黎斗にとっての巫女は神社で箒を掃いているイメージしかないのだ）ならば神殺しが関連している可能性が非常に高い、というかそれ以外に彼の貧困な脳では考えられない。祐理も確か巫女だったはず。彼女に聞いてみるか。

「でもリスク高いよなあ……」

「恵那さんと一緒なのがバレたら絶対面倒なことになりますよ。ただでさえエリカさん達に目をつけられているのに」

「ですよー」

祐理に話せばおそらくエリカにも伝わる。そうしたらバレるのは時間の問題だ。巫女& a m p; 妖狐を連れている一般人で通すにはエリカという相手は強すぎる。

「ホントどうしたもんかねえ・・・」

「いっそほったらかしては？ 過保護になりすぎると愛娘から嫌われますよ？」

「結婚もしてないのに娘がいるか！」

反論しつつエルの言葉に頭を冷やし考え直す。ここは恵那の好きに任せるべきか。いくら狡猾な須佐之男命でも自らの身内（しかもすぐく自分に懐いている相手）を使って権謀術数の類をする程ひどくはないはずだ、きっと。今回の敗北を須佐之男命に知られ笑われたので修行に目覚めたとかそんなオチなのだろう。疑ってしまったことに若干の後ろめたさを感じつつ黎斗はベランダより部屋に戻り茶碗を洗う。静かな台所に水の流れる音が響き、エルが欠伸をひとつした。

「・・・ねえ、帰っていい？ どう考えても僕場違いだよね？ もしかして僕も護堂の攻略対象なの？ ねえ？ 僕ソツチの趣味はないんだけど」

溜息とともに尋ねる黎斗。

「お兄ちゃんソレ本当！？　だらしがないにも程があるんじゃない！？」

真に受けた静花が取り乱す。

「あら、護堂、今まで私達に素直になってくれなかったのは男色の気もあることを言い出せなかったからなのね。そういうのでも理解あるから心配いらないわよ？」

これはおもしろそうだと、エリカが悪魔の笑みを浮かべて参戦する。

「草薙さん！？　ふ・・・不潔ですっ！！」

顔を真っ赤にしながら叫ぶ祐理。

「俺だってねえよ！！　なんでそんな話になるんだよ！！　エリカも煽らないでくれ！！」

屋上での昼食は護堂の絶叫で始まった。護堂にとって既に黎斗も一緒に昼食をとる相手の一人になっているのだが、黎斗からすれば護堂を中心としたハーレムの中に迷い込んだようで居心地が悪い。

草薙静花はブラコンである。今クラスの男子の間で囁かれる噂だ。護堂（及び周囲の女性陣）と親しい（と思われる）黎斗に噂の真偽を確かめる役だ回ってくるのは、ある種当然といえよう。もっともクラス男子の八割はこの噂は真実だと認識しているのだが。かくいう黎斗もその一人だ。正直確かめる意味があったのだろうか疑わしい。

「なんで僕がこんなこと・・・ 妹萌えの伝道師反町辺りが適任でしょーが・・・」

こっそり呟きながら状況を観察する。彼女の向かいに護堂が中央、右にエリカ左に祐理が座っている形だ。ちなみに黎斗はエリカと静花の間だったりする。

「・・・まあ、静花ちゃんがキレるのもわかるよ、うん」

ここまで自然にいちやつかれると黎斗としては噛み付くのも馬鹿らしく感じるが。噛み付いたら負けな気がしてしまう。護堂によりそった祐理がさりげなくお茶を注ぐ様など見ていて虚しくなってくるので少し前に視界から外した。他所でいちやつけと言いたいがこの妹さんに任せよう。

「だいたい何よその王様ポジション!!」

鋭い、正解です。彼は王様ですよ。魔王だけど。

そう答えたくなったが必死に我慢。答えたところで静花からは頭の可哀想な人扱いされ三人に事情を説明せねばなくなるだけなのだから労力の無駄というものだ。黎斗を取り巻く状況も悪化するし。

そんなことを思い耳を澄ましながら弁当を突っついてしていると祐理が真っ赤になって静花に反論を始めたではないか。

「に、新妻——私が護堂さんの!?!」

結局そこかよ。

どうやら本当に祐理も護堂のハーレム入りか。あの男の一件で仲が深まったのかと勝手に予想を立てる黎斗。新妻に反応する辺り彼

女も自覚があるのではないだろうか。

「なんか僕ギャルゲの親友ポジだよなあ・・・」

黎斗がぼんやりとくだらない考えをしている間も、ずっと護堂達のランチタイムは華やかで賑やかだった。珍しくエリカが静かにしていたのが気になるが、放っておいて十分だろう。何か考えているのだろうけどどうせ護堂が巻き込まれるだけだ。こっちには関係ないだろう。

そう思った日の夜。

「黎斗助けてくれ!!」

「・・・護堂、こんな夜にどうしたよ」

眠っている最中にたたき起こされた黎斗は、薬草図鑑に熱中している恵那とエルを横目にそう答えた。どうせ昼間予想したようにエリカが何か仕掛けてきたのだろう。

「エリカの奴が俺を婚前旅行に連れて行こうと画策しているんだ！
！ じいちゃんも味方につけて根回しも済んでるみたいなんだよ。
夏休みの間どこかに身を隠さないと無理矢理」

「・・・行けばいいじゃん。つかこんな時間に惚気かよ」

「こんな計画に付き合ったら待ってるのは破滅だろうが!!」

護堂の台詞を途中で遮り提案するもあっけなく却下される。しかしなぜ破滅なのだろうか。相思相愛なら破滅どころか幸福へ一直線だと思ふのだが。

「なるほど。つまりもうしばらく美少女を侍らせる生活を続けたい、と。流石外道な護堂先生。そこに痺れるけど憧れねえ。いつそ地獄にでも行けば流石のエリカさんも追ってはこれな・・・おつとごめん、本音が出た」

「お前俺に恨みでもあるのか!?　　すげえ黒いぞ!!」

流石にここで肯定するのは可哀想だと思い沈黙を選ぶ。この場合は肯定と同じ意味になってしまう気もするが直接言うよりはいいだろう。

「・・・・・・・・」

「れーとおおお!!」

「護堂、こんな夜更けに近所迷惑だよ。こっちも耳が痛い」

護堂の叫びで耳が麻痺した黎斗は、しかめ面で抗議する。

「誰のせいだ誰の!!　　ええい、話がすすまん!　　そういう訳だからどこか潜伏場所ですよさそうなところ探しておいてくれ。俺も探すが黎斗は転校してきたんだからここ以外の地理も詳しいだろ?　　前住んでいた土地とか」

そんな、と一方的に通話が切れる。たしかに転校してきたが前黎斗が住んでいたのは幽世だ。そんなところに招けとでもいうのだろうか。あいにく他人を連れて幽世へ行けるほど魔導に熟練していないのでそれは無理な話だ。

「故郷は日本海側なんだけど・・・夏休みにもう一度、行ってみようかなあ」

パンドラによれば黎斗にとってここは平行世界ではなく過去の世界らしい。本来ならば存在すべき家族が居ないのは黎斗のしてきた行動によるバタフライ効果が積み重なった結果とのこと。事実、元の世界で東京タワーが炎上した、という噂を聞いた記憶がある。ネットで映像が流れて荒れに荒れた事件だ。すぐに消されたらしく動画を直接見えない黎斗はデマだと思っていた話。真相はこれだったのか。

「とすれば栃木のクレーター事件もか？」

黎斗の知っている最後の怪奇事件。これもカンピオーネが関わっていたのだろうか？

「そのことはその時考えればいいか」

「マスター、どうしました？」

微妙な雰囲気を感じ取ったのか、エルがこちらへ視線をよこす。

「んー、夏休みどうしようかな、って話」

「恵那夏休みは山籠りしなきゃなんだー。れーとさんもどう？」

たったいま風呂から上がったと思われる恵那が会話に参入する。湿気を帯びた髪と上気した顔が色っぽい。物騒な刀を持っているだけでそれも台無しなのだけど。

「・・・謹んでご辞退させていただきます」

「恵那さん、マスターは肉体強化かけなきゃ100メートル20秒近いんですよ？ 登山なんかさせたらぶっ倒れますって」

情けなさ過ぎる事情に恵那も苦笑いを隠せない。自分が苦戦したような敵をダース単位で秒殺した相手の身体能力が論外な程低レベルだったのだから無理もないだろう。

「じゃあ夏休みは恵那も居ないのか。はてさて、本格的にどーしようかねえ・・・」

夏なのに引きこもっているのは青春をドブに捨てているようにもつたいない。

「夏だし反町達とバカな事するかな」

「脈絡全然ありませんしソレいつもと同じじゃないですか」

「・・・」

間接的に言われると堪える。いつもバカじゃないですか、と言われたほうがまだマシな気がしてしまうのは気のせいではないだろう。

「夏休みに勉強してみる？」

「マスターが勉強が続けられるとは思えませんね。三日坊主で終わります」

「・・・」

「つまるところ、夏休みに期待するだけ無駄ですよ。私はマスターは言葉だけで行動しないってことも計画立案能力皆無であることもわかってますし」

「・・・」

黎斗は無言で空を仰ぐ。絶対に何か一味違うことをしてやる、そう心に決めた、夏のある夜のことだった。

§12 ヴォバン編、あとしまつ（後書き）

ちよこつと前にも触れましたがペルセウス戦開幕前に短すぎるネタ集だけ投稿させて頂きださいますっ

あ、「整理用」ですが9巻の内容受けて若干訂正入れるかもしれませんが。ご迷惑おかけしますっ

履歴っ（ただの確認用です）

あってもなくても変わらない気もしますが、一応。

更新したら載つけていきますので参考までに

細かいところを修正する日が来そうですので作ってみる（何

特に最初の方は文字も少なかったので少しずつ話を変えない程度に修正を加えていけたらな、と思ってます

・・・こういうのって余計な物に入りますかね（汗

とりあえずこれを作り始めた時のログから残しますっ

2011/04/09 §11投稿

2011/04/10 §11修正

2011/04/16 §12投稿&コレを投稿

2011/04/17 §???投稿

2011/04/22 整理をちょこつと修正。本格修正はもう少し先で。10巻が出たとき辺りに修正しようかな、と考えてますがど上手い考えが思いついたらその前にするかもしれません。 §02修正。千年幽世に住んでるかっ召喚されたのも千年前は少し変ですよ（汗

2011/04/24 §13投稿

2011/04/26 §4&§10修正

2011/05/01 §13結末修正、混乱させる真似ごめんなさい！&§14投稿

2011/05/09 §15投稿

2011/05/10 整理用大幅変更、毎度ご迷惑おかけします

（汗

2011/05/18 §15修正&§16投稿っ

2011/05/27 §15&§16修正 お騒がせしました

2011/05/29 §17投稿

2011/06/08 §1-? 投稿

2011/06/20 §1-6までを修正。「・・・」↓「……」
他数点。

2011/06/20 §小ネタ集part2 投稿

2011/06/21 §小ネタ集part2修正(ラスト追加は
まだです)

2011/06/30 §小ネタ集part2修正……というカラ
スト追加&改変。またやらかしてしまいました、ごめんなさい!!

2011/07/01 §小ネタ集part2修正(汗 修正前の
上げてましたよはは……すいません §17・5 投稿&修正

2011/07/04 §小ネタ集part2修正&§17・5修正

2011/07/16 §18 投稿っ §7-9を修正「・・・」

↓「……」

2011/08/01 §19 投稿&即日修正

2011/09/01 §小ネタ集part2に「《お盆》」を追

加 季節的にだいぶ遅れた感がありますが、まあ。&§1修正。正
直前半部分は分量も論外ですし書き直したいところ。冬辺りにはど
うしようか考えたいところ

2011/09/05 §20 投稿っ

2011/09/22 §21 投稿っ

2011/09/29 §21修正 マシになってるといいなあ…

：

§? ?? 番外編《短編集》（前書き）

これは小ネタ的なやつです。

本当は一つの話にしたかったんですけど話を上手く膨らませることができずめっちゃ短いお話に・・・

でも没にするのも癪なのでまとめてしまおう、的なノリだったり（汗
やっぱり話作るのって難しい・・・！！

多分本編と絡みませんので飛ばしても問題ないです。

っていうか、蛇足感が非常に強いです。閲覧要注意。

ちよこちよこ書いているので、また溜まったらこんな形で出していければ、と思います

§?? 番外編《短編集》

《4VS1》

「黎斗、今日決行するぞ」

「マジか。とうとうやんの？」

「コレがお前の仮面だ」

そう言って渡されたのは、紙袋に視界を確保するための覗き穴が二つくりぬかれたものだった。

「・・・コレハナンデショウ？」

「何ってお前、正体を隠すためのマスクに決まってるだろ」

平然と答える高木に、二の句が告げなくなってしまった黎斗。コレなんかまるっきり不審者じゃないか、と発言することも憚られる。文化祭ならまだしも平日にこの仮面を被って廊下を移動するのは正直勘弁願いたい。

「・・・まあ、なににしろなんか被った時点で不審者っぽくなるんだからコレじゃなくても一緒か」

「なんか激しく不名誉な納得のされ方されたぞ!!」

叫ぶ高木を華麗にスルーし、反町へ最終確認を取る。

「次の月曜、なんだね？」

「ああ。次の月曜にこそ、草薙護堂に正義の裁きを下してくれる！」

「「美少女を独占するクズに呪いあれ！！」」

もし、教室に誰が残っていたならば、まず間違いなくドン引きされたであろうテンションで、4人の勇者は爪を砥ぐ。全てはハーレム王を打倒するため・・・！！

「俺？ 平凡だろ？」

翌日、勇者達は護堂まむらに問うた。汝何者なりや、と。その結果が、平凡発言。現実には、彼らに残酷だった。護堂は自分を平凡だと思っているらしい。彼がカンピオーネであることを知っている黎斗としては「嘘つけえ！！ オマエが平凡なら六十億以上の人間は平凡じゃなくなるだろうが！！」と叫びたかったが自制心をフル稼働、抑えることに成功する。

「・・・」

「・・・」

後ろ側に座っている黎斗には護堂の前で会議を開いている三人の会話内容は聞こえないが予想できる。鋭すぎる視線だけでも予想は

容易だ。

「・・・大丈夫か？」

護堂が心配して声をかけてくるが、元凶に心配されても、と思う。

「黎斗、予定変更だ。今日の放課後に決行する」

「了解。流石にこれは捨て置けないね」

高木と一瞬でアイコンタクトを成立させる。大丈夫。計画が早まっただけだ。準備は万全、いつでもできる状態にしてある。あとは、放課後を待つのみ。

「今だ！」

先陣を切って、黎斗が駆け出す。職員室の帰り、今なら周囲に人は居ない。護堂を捕獲する絶好の機会——！！！！

「うお！？」

暴れる護堂。誰だって麻の袋を被せられれば抵抗するだろう。しかし事前準備を重ねに重ねた四人の行動に一切の無駄など存在しない。ただ、黎斗の不幸は階段付近で護堂を襲撃したことだ。護堂の力にインドア派少年黎斗が敵うわけはなく、反町の援護が来る前に黎斗は体勢を崩してしまった。踏ん張ろうと足を伸ばした先にあっ

たのは、ビニール袋。風で飛んできたのだろうか。

ビニール袋を踏んでしまった黎斗は、体勢を支えきれず、階段下へ落ちていくことになる。

「おわー!!?」

「同志Lよ、お前の犠牲は無駄にはしない!!」

落ちていく黎斗に投げかけられる頼もしい言葉。見上げれば、護堂確保に成功した反町、もとい同志Sの勇姿。革命の成功を確信し、黎斗は運良く(?) 階段の踊り場に放置してあったゴミ箱の中へ、吸い込まれるように姿を消した。

「う・・・、ゲヘッ、ゴハッ・・・!!」

黎斗が目を覚めたのは、外のゴミ焼却場。天に届きそうな高さに積まれた燃えるゴミの山の中だった。夕日が目にしみる。

「えっと・・・たしか護堂を捕まえようとして落下したんだっけ」

やっとの事でゴミの山から脱出する。埃やバナナの皮が気持ち悪い。運んだ人は中に人が居る事に気がつかなかったのだろうか？平均やや上の身長だから気づかれない訳はない筈なのだが・・・

「うう・・・最悪だ・・・」

このなりで校舎に入るのはおおいに噂されそうだがやむを得ない。教科書の類は全て教室だ。数学の宿題をサボったら死ぬ。それに携帯電話がなければ天罰の結果がわからない。

「・・・・・・・・おのれ、護堂」

教室で見たのは、絶望に倒れ伏す我が同志達。黎斗は天井を見上げ、呪詛を紡ぐ。

ゴミまみれの黎斗が恵那&エルに冷水を浴びせられるまであと一時間。

あまりの冷たさに絶叫を上げた打ち回るまで、あと一時間。



「ぶえつくし!!」

「・・・・・・・・三十八度。完全に風邪ですね。だから水風呂に浸かるなどあれほど・・・・・・・・」

エルがぶつくさと小言を言っているが、黎斗にそれを聞く元気な
ど残っていない。声を発することさえままならず、苦しうに寝返
りをうった。今のような状況まで追い詰められたのは久々だ。

「こんな無様な神殺しってマスターくらいじゃないですか？ 変質
したせいで肉体の成長は止まってるくせに睡眠やら食事やら排泄や
らする必要があって更に風邪まで引くなんて。ヤマの権能、メリッ
トよりデメリットの方が格段に大きいんじゃない？」

エルがボロクソ言っている横で、黎斗は鼻を吸っていた。やっぱ
り水風呂はマズったか。恵那が風呂から上がった後数時間経過後に
入った湯船は見事に水風呂。面倒くさいからとお湯を新たに入れな
かった黎斗は水風呂で我慢をしたのだが、朝起きてみればこのザマ
だ。人間だったころはあまり身体が丈夫ではなかった黎斗だが、風
邪を引いたのは実に五百年振りだろうか？

「恵那さんがおかゆ作ってってくれたんですからとっとと食べて薬
飲んでください」

最後まで黎斗の身を心配していた恵那だったが風邪をうつさない
ためにも普段どおり学校に行かせている。朝の忙しい時間帯におか
ゆまで作ってくれたのだから感謝はいくらしても足りることは無い
だろう。

「おかゆあじないからいや・・・ うめぼしすっぱいしくすりにが
い・・・」

「何言ってますか・・・ 良薬口に苦しっていうでしょ。今まっ
ろわぬ神が襲ってきたらどうするんですか。本日急病につき休ませ

てもらいます、なんてマヌケな展開私は御免ですよ」

「ごどーがいるし・・・」

「ああ、もう！ この人はー！！」

エルの怒号が室内に響く。このていたらくっぷりで古参の王と呼んでいいのだろうか。

皮肉にもこれによって「カンピオーネともあろうお方が風邪なんて引くわけ無いわね」とエリカが黎斗への疑いの視線を弱めることになるのだが、それはまた別の話である。

「ん・・・」

「あ、れーとさん。どう？ よくなった？」

部屋が夕焼けに染まる頃、黎斗は流れる水の音で目を覚ました。一日中寝ていたおかげか、はたまたエルに無理やり飲まされた薬が効いたのか、体調はすこぶる調子が良い。冷やした手ぬぐいを頭に載せるなどして、かかりつきりで看病していたと思われるエルはすっかり夢の中だ。そっと籠の中へ入れて毛布をかける。

「うん。だいぶ良さそう。ありがと、ご迷惑おかけしました」

「油断はダメだよ？ とりあえず山から色々採ってきたんだ。ちょっとまって」

「・・・山？」

激しく嫌な予感がする。山ってなんだ？ 採ってきたってなんだ？ 一旦台所へ姿を消した恵那は、洗ったばかりとおぼしき数種類の雑草といくつかの妙な道具を引っさげて姿を現した。黎斗の背筋を汗が伝う。

「え、恵那さん？ それはいったい・・・？」

「何って風邪に良く効く野草だよー？ どれもこれもすごく苦いけど効き目は抜群なんだ。今磨り潰して煎じるから」

いやけっこうです、という黎斗の発言はさらりと流され、緑の粉末が大量に生成されていく。いかにも苦いオーラが漂ってくる。

「できたー！ ささ、どうぞ」

「え、ちょ、まっ」

必死に避けようとするが、弱りきった今の黎斗の身体は上手く動いてくれなかった。避けようとして、恵那の方へ倒れこむ。

「うおっ」

「きゃっ」

恵那を見つめること数秒。それが黎斗の限界だった。再び風邪が活動をはじめ、黎斗の意識を奪っていく。

「・・・もう、しょうがないなア」

最後に聞こえたのは、そんな声。口の中に何か入ってくるのを感じながら黎斗は眠りにつこうとして――飛び起きる。

「#”\$%’\$”&#・・・!!」

声にならない悲鳴。口の中のものを吐き出しそうになるが吐瀉物が恵那に直撃コースになってしまうので必死に我慢。目を白黒させていると恵那が天使の微笑みを浮かべている。

「どう？　すごい効くんだよ。コレ」

その言葉を最後に意識が途切れる。殺人ドリンクとはこういうものか、などということを漠然と感じながら。

あまりの味に黎斗は一週間もの間味覚障害を引き起こすのだが、それもまた些細な出来事である。

《嫉妬狂奏曲》

「質量モル濃度？　溶液100g中の物質質量だっけ？」

今にも泣きそうな黎斗の声に、呆れたようにエルが答える。

「キツネの私がそんなの知るわけじゃないですか。この時代の子供はこんなのやってんですか」

日差しが強くなりひぐらしの鳴く季節、夏がやってくる。期末テストが、やってくる。

赤点をとって追試に追われる学生生活は真っ平だ。元受験生だし大丈夫、とタカを括っていた中間試験では化学が赤点だったのである。これでも元理系なのだが……

「今回場合の数と確率は範囲外だから放置でいいな。化学は濃度と物質量を抑えれば八割はいけるハズ」

明日は日曜なので護堂・高木・名波・反町の四人と教室で勉強会だ。未だかつて高校生活でこんなに勉強したことがあっただろうか、いやない。明日で化学を抑えてみせる。熱意に燃える黎斗の隣でエルが「ふわぁ」と欠伸をしていた。

「なあ黎斗、この式どうなってんだ？」

「この式これ以上割り切れなくないか？」

「なんでこれ塩基性塩なんだ？」

ある程度予想していたことだがもっぱら解説側のようなのだ。彼らの聞いてくる問題を解くことだけならなんとかなる。ただ苦手分野を除いても平均的受験生の知識の持ち主でしかない黎斗には「わかり

やすく」解くという行為はなかなか難題なのだが。一応こうなることを予想して広範囲を確認してきて正解だったようだ。

「そーいや護堂は？」

護堂の姿が見当たらないことに気づいた黎斗はそう問いかける。

「草薙の奴、昨日電話したら先約あるからって言ってたな」

高木から返事がきた。確かに急に言われれば厳しいだろうしやむを得ないか。そう思った矢先、爆弾発言が廊下を通り過ぎるクラスメートから飛び出した。

「草薙君？ さっきブランデッリさんと歩いているのを見たよ」

護堂デートとはいいいご身分だな、と軽く妬んだのはどうやら黎斗だけだったらしい。後ろの席から悲痛な叫びが聞こえてくる。

「うおおお草薙のヤツ！！ こんな時までッ・・・！？」

「畜生、畜生っ・・・」

「神はいないのか！？」

あ、ヤバい。そう思ったときにはもう遅い。悪鬼と化した三人の殺気に、流石の黎斗も後ずさる。このままだとこいつらがいつ怨念を放つ悪霊になっても不思議ではない。

「やってられるかー！！」

「俺達が学生の本分に励んでいるのにアイツはエリカさんとデートだとお!!」

「絶対間違ってる!!」

ここになってようやく地雷を踏んだと認識したクラスメートが縋るような目でこっちを見てくる。止めろというのだろうか。保護者ではないのだけれど。

「まあまあ、とりあえずおちつ・・・」

「れいとお!!」

「は、はひい!？」

無理でした。高木の剣幕に疎んでしまったのが敗因、そのままズルズルと、なし崩し的に参加するハメになりそうだ。

「者ども、招集をかけろ!! 第一種非常態勢!! ハーレム野郎を叩き潰す!!」

「無駄にかっこよいのね・・・ 理由は非常にかっこ悪いけど」

どこからか無線を取り出した名波の叫びに呼応するように、学校が震えた。まるで学校全体が護堂に嫉妬しているかのようで。

「いくぞ、同志達よ!!」

その言葉と一緒に、黎斗は教室を連れ出される。向かう先は、体育館。何十人いるのかわからない。男子は全校の半分と近くが居る

勢いだ。女子がちらほら混じっているのは、護堂の周囲の女子のレベルが高すぎて彼に話しかけられない子なのだろうか？ 反町、高木、名波の三人が入場すると水を打ったようにざわめきが鳴り止み、モーセの如く進路が分かれていく。悠然とそこを歩いていく三人＋引っ張られる黎斗。

「諸君、集まってもらったのは・・・」

名波の演説を聞きながら絶望に襲われる黎斗。ここまでするのか、全員目がヤバイ。みんな、明日のテストは大丈夫なの？ こっちはまだ試験範囲の復習終わってないのだけれど。

「「天罰を！！ 天罰を！！ 天罰を！！」」

ヒートアップしていく場内。もうだれにも止められない。黎斗も嫉妬することはするが流石にこのレベルになるとついていける気がしない。デモ行進やらかしそうな勢いだ。おそろべし、草薙勢力。

「誰か止めて・・・」

神に祈る彼に、救いの手が差し伸べられる。もっとも、悪魔の手だけれども。

「こらー！！ 貴様ら、何をやっている！！」

風紀委員と体育科教師の強制介入。こちらの人数が多くテンションが高いことを警戒したためか、いつのまにやら風紀委員が包囲網を敷いていた。体育館を使ってこんなことしていれば当然か。怒られるのはいやだが三人を止められなかった責任を甘んじて受けとめよう、そう覚悟した黎斗だったが、事態は彼の予想の遥か斜め上に

向かっていく。

「おのれ、草薙のやつ教師と風紀委員まで味方につけたか！！
よろしい、ならば戦争だ」

名波の声は、黎斗の思考を停止させるのに十分で。

「へ?」

その一瞬が、明暗を分けた。ここで名波を止めなかったことが、城南高校史上初の学生運動のようなものを引き起こしてしまうなんて、千年の時を生きた黎斗といえども予想出来るわけなどない。

「草薙に独占された美少女を解放するという崇高な使命を背負いし同志よ、敵は強大だが立ち向かうぞ！ 我らに負けは許されない！
！」

「「「応!!!!」」」

ここに、一人の高校生への嫉妬から始まった、教師陣&風紀委員と生徒達（八割男子）の大乱闘という前代未聞の珍事件、通称「血涙大戦争」が幕を開けたのだ。夜七時まで続いたこの休日にかきた抗争は、生徒側の敗北で幕を下ろした。この日来校していなかった生徒には嚴重に伏せられ関係者の心の奥にこの事件は秘められた。最後の方は教師陣も「俺だってなあ！！」などと泣いていたような気もするが気のせいだ。絶対に。

参加した生徒は、全員が正座と反省文五枚。富の独占に教師側にも思うところがあったのだろうか。主犯のうちの一人に認定されてしまった黎斗が解放されたのは、午後十時のこと。

「エライ目にあった・・・」

長時間の正座で足が痺れるせいで歩くことすらままならない。担任にアパート前まで送ってもらった後、手すりを使いながら必死に階段を上がっていく。背中の荷物が重い。きつと青チャート一冊で十分なのに三冊も持ってきたせいだ。

「た、ただいま・・・」

「敗残兵ですね、マスター。恵那さんさっきまで起きて待っていたしゃいました。が寝てもらいました。お静かに」

「りょーかい」

ふと時計を眺めれば、もう日付が変わってしまう。階段をのぼるのに一時間以上使っていたのか。寝るよう説得してくれたエルに小声で礼を言い、防音術式を展開し、気配を殺して移動する。こうでもしないとせつかく眠ったあの野生娘を起こしてしまう。

「あとで化学最終確認を・・・」

そう呟く黎斗の顔は幽鬼のようだったと、後にエルは語っている。

「よう黎・・・どーしたんだ？」

「やあ」

誰かと思えば草薙護堂。一瞬誰かわからなかった。頭を活性化させなければ。このままでは非常に不味い。

「・・・おい大丈夫かお前。今日はなんかクラスの奴ら眠そうな奴がいっぱいいるけどお前特に重症だぞ？」

「多分大丈夫・・・一限数学か・・・」

すれ違う生徒が皆怯えている。そこまで顔酷いだろうか？ 恵那やエルが起きる前に家を飛び出したのは失敗だったようだ。

「席につけー、問題配るぞー」

チャイムと前後して教師が入ってくる。数学は今回の範囲なら楽勝だ。

「はじめー」

教師の声と共に用紙を表に。眠い。まず問題を一通り眺める。眠い。大丈夫だ、問題ない。眠い。この程度ならすぐ終わらせて睡眠時間にしよう。眠・・・い。まずは・・・平方完・・・成を。

そこで黎斗の意識は途切れた。

「・・・」

もう一度、名前が間違っていないか確認する。間違っていない。ということはこの用紙は僕のものだ。頬を抓ってみる。痛い。ということは間違いなく現実だ。

水羽黎斗、数学零点。開始直後の爆睡により白紙提出。問題解く姿勢で爆睡した結果、教師もクラスメートも彼の睡眠に気付かなかったらしい。回収の時に気付きそうなものだがなんで気付いてくれなかったのだろう。結果、彼は一限数学から始まるその日のテスト全て零点という人生初の経験をしてしまった。

「護堂、どうだった？ この私が直々に教えてあげたんだからそれなりに出来たわよね？」

「ああ、ありがとう。エリカのおかげで今回のテストは九割いった」
後ろで何か声が聞こえる。神様、この展開は理不尽すぎはしませんか？

「うわああああああああああああああああ！！！！」

「ど、どうした黎斗！？」

「ごどー！！ お前ー！！」

ワケも分からず追われる護堂と発狂して追いかける黎斗。血涙大戦争の情報をどこからか入手していたエリカだけが、魔性の笑みで二人を見ていた。

§13 強運と凶運（前書き）

通称三馬鹿の扱いがエラいことになってます（汗）
彼ら好きな方ごめんなさい、と今のうちに謝罪を

そんなこんなでVSペルセウス編、開幕です

2011／05／01

ごめんなさい、修正入れました

結末が変わっているので申し訳ありませんがもう一回見ていただくと幸いです

§13 強運と凶運

空を眺める。澄んだ青い色。快晴だ。眼下には無数の建造物と人せわしなく動く様子はまるでいつも黎とが見ている風景と同じで。街中を闊歩している日本人が黎斗達四人だけであること以外は、普段の日常と変わりない。太陽の日差しに黎斗は思わず目を細めた。

「やっぱ外国ってすげーな！！ どこもかしこも文字が読めねえ・・
」

訂正。そういえば看板などの文字も日本語ではない。あらゆる言語をすぐに理解できる黎斗は反町の反応を見るまでその事に気付かなかった。今からこんなことでは先が思いやられる。すぐにボロが出るな、と苦笑する。エリカや祐理といった強敵が居ないからといって気を抜きすぎだ。反町達経由で誇張された情報が彼女たちの耳に入る恐れだってあるのだから。彼女達に聞かれれば三人は天にも昇る心地で今回のことをペラペラ喋るに違いない。「そんなことまで気にするなんて神経質すぎですよ」とエルは言っているがあの二人は、特に祐理は黎斗の直観が危険だと告げている。

「ささ、黎斗センス、通訳頼むぜ」

「へいへい・・・」

名波が商店街の福引一等を当てた。景品は欧州への飛行機チケット五人分。売るのは勿体ないが家族みんなで欧州に行っても誰も言語がわからない。困り果てた名波は黎斗の「欧州？（五百年以上前だけど）一応行ったことあるかな」という発言に喰らいついた。すったもんだの末、黎斗をガイド役に男子高校生四人で夏休みに欧

州へ行くという事態となってしまうたのである。本来は護堂も一緒に行く予定だったのだが、更に安全な隠れ家を見つけたからそっちへ避難する、などとわけのわからないことを言って少し前に参加辞退を表明している。三人の家族から「息子をよろしくお願いします」と土下座までされて困り果てたのは一昨日の話だ。今ならわかる、三人のご家族の心境が・・・！！

「さっすが黎斗！ 英語のテストで八割以上とるだけのことはあるぜ」

「いやキミ達、高一の英語のテストで八割以上取ればガイドが務まるって発想がまずおかしいからね・・・」

「おお、美女発見！」

ダメだこいつら。人の話聞いてない。カンピオーネの言語能力をこんなことで使う日が来るとは夢にも思わなかった。しかもこれではまるで引率の先生だ。嗚呼、周囲の視線が痛い。美女と見るや手当り次第話しかけ（言葉が通じてないのに！）ナンパを仕掛けるバカを連れ戻す。汚らわしいものを見るような女性の視線が黎斗を見た瞬間憐れむような眼差しに変わるのが堪えた。そんなに疲れた表情をしているのだろうか？ この勇者達を抑えるのは非常に骨が折れる。そもそも現地語がわからないのに三人は来るという決断をしたのだ。その勇気の前には勇者も裸足で逃げ出すか。

「まったく・・・ガイドの基準がひどすぎだよ。現地で僕の会話が通じなかったらどうする気だったのさ。そもそも現地の有名物件とか観光名所なんてグーグル検索で調べた付け焼刃知識でしかないんだけど」

何十枚もあろうかという分厚いA4サイズの紙の束を隣において一人木陰のベンチに座った黎斗。中身は欧州の名所一覧と観光ポイント。カバンの中にもそんなガイドブックが何十冊も入っている。一息ついて沈黙したのもほんの数秒、すぐに口から文句が飛び出る。カンピオーネたる黎斗が意思疎通に困ることはまずないが彼らがそんなことを知るわけがない。彼らは本当に「高校一年のテストが良ければ」現地でガイドができると思ったのだろう。カンピオーネになる前に外国に行った経験がない、つまり日本語とセンター試験レベルの英語能力で海外旅行をしたことのない黎斗には本当にその程度の能力で大丈夫なのかわからない。一応、中学三年で一応日常生活くらいの英会話能力がつくとどこかで聞いたような気がする。それでもガイドを出来るとは思えないのだけれど。

考えていて思ったのだがここでは英語が使えるのだろうか？ 考えなしに話していると自分が今何語を使っているのかわからなくなってしまう。相手との会話に支障こそないものの何語を喋っていたのか三人に聞かれても何処の言語か答えられないというのはどう考えても変な話だ。学校生活でも本を読んでいてどれがなんという言葉で書かれているのかわからなくなることが多々発生するし。今回三人になんの言語か聞かれなかったのは幸いというほかない。他のカンピオーネもこんな風にどの言語を使っているのかわからなくなることがあるのだろうか？

「古今東西こんなことで頭を悩ませた神殺しは僕くらいのもんだろ
うな・・・」

その言葉を聞いて理解したのかしてないのか、湖を泳ぐ白鳥がこちらを見つめる。同情するように鳴いた。つられたのか、近くにいた他の白鳥も鳴き始める。輪唱のような鳴き声は当然周囲の耳にも入る。

「・・・」

ベンチに座る日本人と湖から顔をこちらへと向けた白鳥達の大合唱。これが美男or美女なら絵になるのだが、あいにく黎斗は冴えない顔の学生だ。白昼突如発生したある種異様な光景に注目が集まり始めるのはある種当然で。ビデオカメラを回す家族もちらほら見受けられる。黎斗としては見世物になったつもりはないのだけれど。

「・・・僕こんなキャラだっけなあ」

自分のことはこれまでお気楽極楽人間だと思っていたのだが、いつの間にこんな苦労性リーダータイプにクラスチェンジしたのだろうか。半ば諦めにも似た表情で、黎斗は買い物に飛び出したまま帰ってこない三人をひたすら待った。止めようとしたのだが「大丈夫だって！ 黎斗の様子さっきからずっと見てたから要領はわかった」と言う三人に押し切られたのだ。さっきからジロジロと大衆の目にさらされている自覚はあるが、動く気力も全くない。きっと明日にはいろんな動画サイトにこの光景がアップされているだろう。そんなことを考えて、気分がますます下降していく黎斗だった。

「おい、三人ともー。ホテルこっちよ。そろっとチェックインだから行くぞー」

「あいよー」

「おお！！ このゲームに萌えを感じる！」

「華麗なそのお姉さま、そこでお茶でもいかがですか？」

・・・彼らに反省の文字はないのか。眩暈が黎斗を襲う。襲ってきた回数は本日だけで二桁を超えた。ここまできると胃薬が欲しい。いい加減心労で倒れそうだ。それともここは暴走する人間が三人から二人に減ったことを喜ぶ場面なのだろうか？

「・・・いい加減話を聞けー！！」

三者三様の返事。夕方になって日が暮れても結局反町以外の二人は現れず、迷子を捜しに出かけた黎斗達は、警察のご厄介になっている高木と迷子になってグルグル回っている名波を確保することに成功する。あっちへフラフラこっちへフラフラ、そんな三人を引き連れて早数時間、もうすぐ夕食の時間帯だとみてとった黎斗はナポリの中心部へ歩き出そうとして――動きを止めた。

「・・・ッ!？」

「黎斗？」

心配してくれる高木に努めて普通の声を返す。大丈夫、硬い声になっていないはず。

「ん、ごめん。ちょっと忘れ物。先に行ってて？ あのホテルは日本語大丈夫だから。いい？ あのメツチャでかい建物だからね」

そう言って念を押してから走り出す。近くで凄まじい呪力が発生している。その原因を確認しなければ。この発生は普通ではない。まつろわぬ神がこの近くに降臨したのか、それとも魔物の類に施さ

れていた封印が解けたのか。現状では情報が少なく的確な判断が出来るそうにないため、危険性が高いということしかわからない。

幸い、時刻は夜だ。アーリマンの悪の最高神としての権能が使える時間帯となった今なら、現地へ直接転移が出来る。

「エル、一気に邪気化して転移するよ」

「帰りどうするんですか。行きは相手がご丁寧に呪力垂れ流ししてるから場所丸わかりですけど、マスターこの周辺の地理に疎いでしょ。帰り目印ないから転移できませんよ？ 邪気化の転移は座標をしっかりとわかってないとダメでしょう。私雪崩の現場まで飛ばされるのはもう勘弁ですよ」

邪気化したのちに転移をすることで、夜の地域なら一瞬にしてどこでも移動ができる。どこにでも行けるということは、転移先の選択肢が無数にあるということだ。試したことはないのだが夜でありさえすれば火星や月といった別の惑星にまで転移できるのではないだろうか、と黎斗は思っている。試してみたいのだが失敗したらどうなるか見当がつかない。呼吸やら温度の問題は呪力・神力で強化すれば十中八九平気だろうが、真空の中に放り込まれて無事に動けるかわからない。もし平気ならば別の惑星に別荘を建てて優雅な生活を送れるので今後の人生は安泰だ。重力が地球と同じくらいあれば各種権能を駆使してもう一つの地球を作れる自信が彼にはある。その環境に辿り着くには何千何億年必要になるかはわからないけれど不老不死たる彼にとって時間など大した意味はない。

閑話休題、とにかく今回のように相手が呪力を放出して居場所を教えてくれているような状況でない限り狙った場所への転移は困難を極める。世界地図を用いて金閣寺の位置を探すようなものだ。地元の地理に精通していなければ、普通にやったら大体の位置しか補足できない。誤差が数十kmともなればエルでなくとも難色を示す

だろう。しかも転移した先の安全は保障されていないのだ。

「帰りは歩く。なんとしても明け方までには戻るよ。とりあえずここでこんなことされたら三人に被害が出かねない」

「ホントに良いんですか？　これだけ呪力放出している相手の所にノコノコ行くのは正体を晒すことと同義だと思いますが。欧州にどれだけ神殺しがいらっしやるとお思いですか？」

「・・・」

黎斗が権能の行使をピタリとやめる。

「・・・何人いたっけ？」

黎斗のあまりの酷さにエルは嘆きなくなった。同胞の情報をきちんと把握していないにも程がある。隠遁生活するのならこれくらいの情報仕入れておくべきだろうに。

「・・・アメリカ大陸に御一人、中華大陸にも御一人、日本にマスター含めて御二人、あとは全員欧州かと」

「ってことは・・・四人？　行ったらバレルんじゃない？」

「だからそう言ってるじゃないですか。アフリカ大陸やらオセアニア地域、南極北極ならまだしもこんな激戦区に首を突っ込む必要性ありませんって」

道端で作戦会議を始める主従。突如立ち止まり顔を白黒させはじめた黎斗に関わらないよう、周囲の人間が彼を避けて動いている。

そんなことにも気づかずに会議を続行するので、傍目には独り言を呟く危ない人にしか見えない。

「・・・気配、消えたわ」

白熱した談義の最中、状況を把握しようとした彼は呪力が消えていることに気付いた。これではもはや搜索も叶わない。こんな土地で夜中出歩けば迷子になるのは確定だ。

「現地の神殺しが対応なさったのではないかと。流石欧州、対応が素早いですね」

「それで呪力が消えたのか。じゃあ解決じゃん。とっとと帰ろう。・・・でも、なーんかひっかかるんだよねあ」

そう言ってホテルへ戻る主従。あと五分でも相談を続けていたならば、不審者扱いされ警察の厄介になったであろうことを知らないで済んだのは、きっと幸運なのだろう。

§13 強運と凶運（後書き）

七巻くらいまでの話の中でこの話が一番護堂の出番が少ない、かな？
今後の展開次第にもよるんですけど（汗）

プロット中の行動に矛盾を感じて若干の修正したらチュールの権能
使う機会が消滅

あるえー？

・・・そんなこんなですが頑張ります

以下話と全然関係ない余談

最新刊読んで最強の剣がやっぱりそれなのか、と複雑な心境になっ
たのはここだけの話（笑）

たまにはアンサラーとかデュランダルにも光を！

リリなのでデュランダルは（一応）最強クラスですけどクロノ君出
番削られまくりですし・・・

なによりS2U派なんですよ（何

完璧余談でしたね

§14 東西奔走イタリア紀行（前書き）

§13、修正しました。結末が微妙に変わってます。

お手数ですがこちらの前に一度ご覧になっていただけると幸いです。
めちやくちやしちやってごめんなさい！ 今後気をつけますのでお
許しを

意見を下さったお二方、ありがとうございました。

こういうこと言っていたけるととてもありがたいです

・・・前書きに私信って良いのかな（汗

§14 東西奔走イタリア紀行

「黎斗、起きろー。今日はとても清々しい天気だ。まるで俺たちを祝福しているかのような・・・!!」

朝の四時。反町の陽気な声が頭に響く。個人的にはもう少し眠っていたい。が、そんなことを言えばこんなテンションの彼らは自分たちだけで外出してしまうだろう。そうなってしまったが最期、迷子になった三人を必死に探す未来しか見えない。やむなく黎斗はベッドから抜け出した。

昨晚、嫌なカンがして結末が気になった彼はカイムの権能を用いて情報収集をした。護堂が敗北したことで事件の真相を把握した彼は、ため息をついたものだ。まとめるとペルセウスが現れ、護堂が倒れ、アテナ&ペルセウスで一時停戦したらしい。死んだり生き返ったりハーレム作ったり神と戦ったり、護堂はほんとうに忙しいやつだ。アテナにまでフラグを建てたのだろうか。

「結局解決してなかったのね。でもなんでペルセウスに護堂の力が無効化されるんだ？ ペルセウスの権能って封印系能力ではないよな」

他の可能性はギリシアとペルシャの神話に何か繋がりがあること。知識の無い黎斗にはそれを確かめる術がない。唯一ウルスラゲナの力を無効化するペルセウス戦はいくらなんでも相性が悪すぎるだろう。

「・・・これは僕が代打ででるべき？ あの光る剣まで無効化されたら勝機皆無だろ。流石にスルーして護堂を見殺しにするわけにやいかんよなあ。ザルパートレだかなんだか知らんけど元凶に見つからないよううまくやらなきゃ。つかザルさん働けよ。欧州のカンピ

オーネ達働けよ。全員ニートかつつうの」

「サルバトーレ卿、です。あとそんなに見つかるのイヤでしたら最終手段で口封じもありますよ？ 相手がどんな存在だろうがテュール神の権能、破滅の呪鎖グレイブニールで絡め取れば終わりです。これは相手が一人でなかったら逆にマスターが終わっちゃいますけど。ペルセウスと卿で苦戦の末両者相討ちって展開もうまく偽装すれば出来ますよ？ もっとも、そんな外道案実行しようとしたら噛み付きますけど。欧州だったってどんくらい広いと思ってんですか。マスターここを横断したんでしょ？ この広さなら一日二日対応できなくてもしょうがありませんって」

後半はともかく、前半で物騒な案を出してきたエルに再考を願ってみる。というか、噛み付くくらいならそんな案を提案しなくてよいのではないだろうか。

「もうちょい平和的なさ。話し合いとかありません・・・？ 最後の方は納得せざるを得ないけどさ。まあ飛行機あるじゃんとか言い出したらキリがないからやめておくよ」

「自分が戦いたいがために都市に大損害を与える人間と話し合いが通じるとは思えませんが」

「うぐっ」

行動を考えるとサルバトーレとかいう男はおそらく、黎斗を神殺しと察知すれば勝負を挑んでくる。そうなれば自衛のために戦うわけだが噂になるのは避けられない。現在最古のカンピオーネとしてゴタゴタにかかわってしまうのは必至。そんな結末を遠慮したい黎斗のとり手段は二つ。

隠しきるか、知られたら倒すか。つまるところ、それしかないのだ。

「・・・ペルセウスは潰す。サルバドールからは逃亡。見つかったら黙ってくれるよう説得。最悪倒すことも視野に入れる」

仮案を出してみる。とにかく護堂が挑む前に決着をつけねばならない。

「三人には悪いけど今日僕は別行ど・・・」

「マスター、それは彼らの遭難フラグ、しいては死亡フラグですよ」

これまでの惨状を鑑みるに、彼らの末路がありと見えてくる。下手したら”本当に”死亡しかねない。まったく、現地での会話が出来ないのにくるなんて！

「エル、至急幽世行くよ。姫さんとスサノオに協力してもらおう。人化の術式を組み上げる」

「マママママスター、一体何を!？」

突然飛んできた思わぬ言葉に慌てふためく様は見えてとても面白い。が、ここで面白がっている時間はない。広大なイタリアを身一つで探すのだ。カイムの権能で情報を集めようとしてもペルセウスと同じような姿恰好をしている人間だって大勢いるだろう。こういう探し人の場合この力はあまりアテにならないものだ。だから、探索に割ける時間は多いほど良い。今から探せば、夜までには見つけられるだろう。

「幽世で二人の協力の下、エルを女性に変化させる。あとは僕の海外の従妹ってことで三人の案内を」

「イヤですよあんな変態達の!？」

即答。即答である。彼らの自業自得とはいえ、流石に哀れになる黎斗。一応友達として弁護してやるのが仁義だろう。

「たまにはそうかもしれないけどさ、三人ともいい奴だし、ね？」

「・・・いい方々かどうかはこの際置いておきましょう。マスター、あの人たちは本当に”たまに”変態なだけですか？」

思い返してみる。今まで過ごしてきた三人の言動を。変な影響を受けやすく、一度染まってしまうと凄まじい暴走を見せつける高木。巫女萌えを公共の場で宣言してしまう名波。そして、二次元に百人を超える妹を持つと言い、常日頃から彼女たちに愛を注ぐ反町。

「・・・・・・・・」

思わずエルから顔を背ける。変えることの出来ない現実があるのなら、それを受け入れて未来へ進むしかないのだから。

「マスターあー!!」

「高木ー、三人で悪いけどロビー先に行つて。ちょっとトイレ」

エルの悲鳴を外部に漏れないよう器用に遮断しつつトイレの個室に入っていく。ホテルのトイレから幽世へ転移するのは僕ぐらいだろうな、などととりとめもないことを考えながら黎斗はエルを連れ

て転移の術式を組み上げた。

「おまたせー」

「なんで部屋のトイレに入った黎斗が外から現れ・・・!？」

ホテルの玄関から現れた黎斗を見るなり絶句する反町。名波と高木も口をポカンと開けたまま身じろぎ一つしない。黎斗の隣には、紫髪の美少女が一人。護堂の周囲の女性陣に勝るとも劣らない容姿は周囲の視線を釘付けにする。見かけは十八、九だろうか。白いながらも決して病的ではない肌と華奢だが恐ろしくスタイルのよい肢体。艶やかな長髪は腰のあたりまで伸ばされており、そよ風が吹くと流れるように髪先が舞う。薄手のノースリーブとスカートはどちらも黒で地味そうだが、不思議と彼女に似合っているように見えた。

「えっと、エルっていいいます。今日はよろしく願いますね？」

可憐な声音による挨拶と向日葵のような笑顔を向けてくる彼女に、そろって三人の動きが停止する。

「」「」

「おい、生きてるー?・・・まあいいや。この子は僕の親戚なんだ。折角だし案内を頼もうと思って呼んでみたんだ」

(マスター!! 私もこの周囲の地理詳しいわけじゃありませんよ

！！）

念話で、エルの抗議が脳裏に響いてくる。

幽世に撤退した黎斗は須佐之男達の協力を借りて、エルを人に化けさせることに成功した。万が一の為同じ国なら黎斗との念話を可能にしてあるので正直、単純なスペックは普段より高い。魔力消去の結果は時間物資共に足りず簡易術式しか組めなかったが大騎士クルスの相手と至近距離での接触をしなければ問題ない。悪質な不良程度なら一人でも無事に逃げ切れるだろう。半ば即興に近いものの神&神祖&神殺しが共同で術を掛けたのだから当然と言えば当然なのだが。簡素な護身用の呪符も持たせているし事件に巻き込まれても大事には至らないハズだ。

容姿は人化の準備を二人にしてもらっている間に单身様々な店を巡り買ってきた作品のヒロイン達を元に設定。ギャルゲーを山のようを買った時の周囲の視線の痛いこと痛いこと。女性の店員の汚物を見えるような視線に内心涙した。エロゲーを全品買い揃えれば当然かもしれないけれど。もうこんな真似はこりぎりだ。僅か十分足らずで幽世へ大量の資料を持ち込んだ黎斗。彼の並々ならぬ熱意に当初は呆れていた須佐之男命だったが、最終的に二人で容姿について議論を重ねるまでになってしまい二人の様子を女性陣は苦笑い。コスプレにならない程度に服を含めた装飾品も参考にし、エル人間ver.の完成と相成ったのである。ちなみに幽世の黎斗の部屋その二は今回資料として用いたラノベ、マンガ、ギャルゲーの類（全部未開封）で埋め尽くされてしまったので、他人を部屋に招くのは恐ろしい部屋に変貌している。

「今日はエルに案内を・・・って聞いてねえ・・・」

硬直したのもほんの数秒、黎斗の話聞くことなくエルに群がる野郎三人。少し離れたここからでもエルの顔が引きつっているのが

よくわかる。出来ることなら助けてやりたいがここは彼女に頑張ってもらってその間にペルセウスを探そう。

「今日はエルに任せて僕はちよつとホテルで寝てるよ。あとで目的地に行くからさ、現地合流にしましょ」

そう言つて自室に戻ろうとする黎斗の肩を朗らかな声と共に高木が叩く。

「なーに辛気臭いこと言つてんだよ。具合悪いわけじゃないんだろ？ みんなで楽しむべきだ！」

それはもう爽やかな笑顔で。マンガだったら歯がキラリと輝いているような。思わず呆けた一瞬の内に黎斗は腕を反町に捕獲されていた。抜け出そうとしても抜け出せない。こやつは捕縛のプロか、プロなのか。

「せっかく黎斗が美人な親戚連れてきてくれたんだ。まずはどっかで朝飯にしようぜ！」

そのままずるずる連行される中で思考を放棄する。鳥達の話が真実ならば護堂はアテナと一緒になのだ。あの女神様と一緒に悪いようにはならないだろう。彼女が大丈夫と判断しているなら護堂に勝機はあるはずだ。当然のことながら智慧の女神様は黎斗などより遙かに賢い。凡人黎斗なんか心配する必要はないか。ここは三人と一緒に行くこう。

「・・・りょーかい。朝ごはん食べたら移動開始。今日はシチリアだっけ？」

「シチリアは明日だよ。今日はサルデーニャだ。明後日レジョディカラブリアに行って帰国だ。・・・ガイドだろ、しっかりしろよ」

「・・・すげー屈辱だわ。まさか名波にそんなことを言われるとは。つかガイドは無理だと何度言えば」

思いつきだけでここまで来たような人間にしっかりしろと言われるとは世も末だ。だいたい、一日ごとにイタリアを縦横無尽に駆け抜けるこんな日程では観光なんてほとんど出来ないではないか。一日の大半は移動時間で消えてしまう。もし、観光したいのなら今回のように早起きなりなんなり、睡眠時間を削るしかない。商店街は何を考えてこんな滅茶苦茶なプランにしたのだろうか。「イタリア全土を駆け抜けろ！ 夏に攻略するイタリア！！」という副題がついていたらしいが、本当に駆け抜けることになるとは。

「マス・・・じゃない、黎斗の負けですよ。名波君しっかり日程覚えてるじゃないですか。しかしホント、強行日程みたいな無理ありすぎる日程ですね」

マスター、と言いかけて慌てて訂正するエルだが、三人の耳はこういう時に限って恐ろしい精度を発揮する。

「マスってなんだよマスって！？ 黎斗、てめーまさかマスターとか呼ばせて悦に浸ってるんじゃないやねえだろうな！？」

「お前だけは俺たちの仲間だと思っていたのに。紫髪の美少女のマスター気取りかよ！！ この裏切り者！！」

「天誅だ！！」

「ちょっと待て三人とも！！　マスだけでマスターって決めつけるなよ。もしかしたら鱈が食べたかったのかもしれないだろ！！」

悦には浸っていないがマスター呼びされているのは事実。ここでバレたら学校生活が大惨事になりかねない。助けを求めてエルを見るが、三人の剣幕に彼女も口を挟めないようだ。オロオロとするばかり。助けが当てにならないことを悟った黎斗は、最終手段を選択した。

「だー、朝ごはんいくぞ！！」

強引に誤魔化す。朝食を食べてしまえば、少しは三人も落ち着くだろう。そんな希望を胸に秘め、黎斗は中央街へ走り出す。彼と彼を追いかける三人を、エルが苦笑いしながら歩いて追った。

§14 東西奔走イタリア紀行（後書き）

え？強引すぎ？

・・・まあ島行く計画は前からあったのでご容赦くださいな

とりあえずご迷惑おかけしました。

今後は展開を変更するような修正をしないで済ませられるようにしていききたいのでご容赦くださいませ

権能の漢字やラルビがいよいよカンピにあるまじきことになってる
気もしますがご了承ください。

カンピって基本的に漢字のラルビは同じ意味の別の言語、っていう素
直な形が多いですね。ドニとかドニとか。ヴォバン侯爵はドイツ
語かな？ わかりませんけどそんなカンジが。教主と護堂は割愛。

スミスさんは・・・漢字。アメリカなのに漢字だよ（汗

アイーシャさんは不明でおいとくとしても、関係ないのでアレク
さんくらい？

僕はFateっぽいルビも好きだから権能時に結構悩みます・・・

（苦笑

あ、タグって追加した方がいいんですかね？

このままでも良い気はするのですが・・・寂しい？

§15 魔王に立ち向かうのは勇者だけではない（前書き）

某キャラ大暴走の回

・・・どうしてこうなった？（汗

とりあえず各キャラの行動に違和感がないようやってみたんですけど・・・違和感あります？

詳しくはあとがきにまわしまーす

§15 魔王に立ち向かうのは勇者だけではない

「・・・・・・・・」

右手にビニール袋を持ったまま、黎斗は呆然と立ち尽くす。ちょっと目を離れた隙に、四人の姿が消え失せてしまった。一人で飲み物を買に行ったのは選択ミスだったか。彼らが座っていたベンチには、日本のレシートと思しき紙の裏に何かが書かれており、風で飛ばされないように石で押さえられている。

「何コレ？ 書置きか？ 誰かがここに座ったらどうする気だったんだあいつら・・・」

呆れながら紙を手取る。筆ペンだかなんだかよくわからないが、字が潰れていてとっても読みにくい。大方通りすがりの誰かから借りた慣れないペンで立ちながら書いたのだろう。下に何も敷かず、急いで書いたとしか思えない。

エルさんを連れてちよっと散歩してくる。五分くらいで戻るわ

心の友より

「朝まで裏切り者呼ばわりしていたのにエルをきちんと紹介したら心の友ねえ。現金なやつらなこと」

まあらしいといえばらしいか。笑いがこぼれる。散歩くらい大目に見るか、と思ったところで気付く。今変な単語があったぞ。

「散・・・歩・・・？」

もう一度、読み直す。

エルさんを連れてちよつと散歩してくる。五分くらいで戻るわ

心の友より

「ちよつと散歩してくるわ」に開いた口が塞がらない。彼らは現地語ができないこと忘れているのだろうか。昨日も言語が通じないのに勝手に突撃していたことを思い出せば、そもそも考えていないのかもしれない。エルが付いているから最悪の事態は無いだろうが。

「・・・はあ」

溜息が飛び出る。念話でエルに場所を聞けばすぐに済む事態なのだが、そんなに楽な展開になってくれれば苦労しない。空のたびの最中に機内で試してわかったことだが、エルは念話が得意ではなかった。エルは念話で喋る際、発言を声に出してしまうのだ。これでは緊急事態以外は使いようが無い。いきなり空に向かって話しかければ変人扱いされること請け合いだ。国内ならば携帯電話でカモフ

ラージュ出来たのかもしれないが、ここは海外。その手段を用いることが出来はしない。念話で搜索というもつとも確実かつ楽な方法が使えない。

「ねえねえ、この近辺に居た男三人と女一人のグループ、どこに行ったか知らない？」

ざわ・・・ざわ・・・

「・・・おーけー、ありがと。さて、ウォーリーを探せモドキ始めますか。つたく、あんにゃろー」

カイムの権能を発動。木々の話では既に十五分は経っているではないか。街路樹の助けを借りて搜索を開始する。雑草達に応援されながら、黎斗は四人が去った方角へ歩き始める。ビニール袋からペットボトルを取り出す。封を開けてお茶をラッパ飲み。まったく、飲まなきゃやってられない。

黎斗が搜索を開始した頃、事態はとんでもない方向へと動いていた。

「その金髪！！ 万理谷さんに触れるな！」

サルバトーレ・ドニ。欧州最強の剣士。”剣の王”と呼ばれ畏怖される魔王に立ち向かったのは、変態紳士の一角、名波だった。

「え？」

間の抜けた声を出してしまうドニ。まあ、当然だろう。どっからどう見ても観光客にしか見えない日本人が、いきなり立ち向かってきたのだから。

彼らはただの一般人だ。だが、一般人であるが故に、同級生が暴行を受けているのを看過出来はしない……！！

カンピオーネという存在を知らない彼らは、自分の前に立つ存在がどれほど恐ろしい存在か理解できない。相手との実力差があまりにもありすぎて、どれだけドニが規格外な存在なのかもわかってはいないだろう。彼らにとって目の前の金髪は、憧れの同級生に襲い掛かって縛ろうとしている暴漢以外の何者でもない。

「貴方達、やめなさい！！ サルバトーレ卿はあなた方が束になっても敵うような相手ではないわ！！」

エリカですら大声をあげる事態。アイスマンに至っては、目を見開いたまま硬直している。目の前の現実には、理解が追いついていないのだ。そんな状況下で放たれた、エリカの声は逆効果だった。普段の彼女なら気づいたはず。倒れ伏す自分の姿が、彼らにどんな影響を与えるのか。

「うおお、エリカ様！？ てめえ、エリカ様に何をした！！」

逆上する反町。ドニを見つめる目はとても陰しい。

「……ははは、よくぞ着た勇者達。僕に勝てばこの二人を解放しよう！」

おそらく彼らは彼女たちの日本での友人だろう。通りすがりのク

ラスメートが彼女達を襲う自分に敵意を持つのは不思議なことではない。ならば、とことん悪役をやってやろうではないか。その方がきっと面白い。いち早く状況を理解したドニは気取った台詞と共に、三人へと向き合う。さながら悪の大王のように。

「このバカ!! 遊びが過ぎるぞ!!」

事態を把握したアンドレアがドニを罵倒する。ただの少年相手に本気を出すはず無いとわかっているが、だからといって許容できる事態ではない。

「三人ともダメです!! その方には絶対に敵いません!」

「なっ・・・」

「うああ!!」

エルの叫びに反応し彼女に視線を向けたドニが硬直する。結果、素人といっても差し支えの無い反町の一撃が、彼を捉えた。直撃した拳が、彼の身体を吹き飛ばす。

「「!!?」」

無論、ドニに対しした影響など無い。しかし、一般人に過ぎない反町の一撃を受ける彼に、エリカも祐理もアイスマンも息を呑む。目の前の光景は一体なんなのだろう。

「・・・へえ、面白い。こんな形で戦いを仕掛けてくる神様は初めてだよ。ついでに言うなら、直視するまで察することが出来なかったのも初めてだよ」

立ち上がるドニ。そこにさっきまでのおふぎけはない。あるのは明確な闘志。その覇気に三人は無意識下で後ずさる。

「バカ、冷静になれ！！ この少年達の何処がまつろわぬ神だというのだ！！」

「違うよ。後ろに控えてる紫のコだよ。微かに、ほんの僅かだけど気配がする。身体が勝手に臨戦態勢をとるんだから、間違いない」

エルに用いた変化の術は特殊な物だ。須佐之男命の神力を基本に黎斗の神力を反応させる為、他の誰にも真似することなど出来はない。今のエルは「存在だけなら」まつろわぬ神と同等なのだ。ドニの身体が臨戦態勢をとったのもそこに起因する。だが、そんなことを理解している者などこの場に居ない。欧州最強の剣の王、サルバトーレ・ドニが本気になる。今重要なことはそれだけ。他は全て枝葉末節、些細な出来事。

「・・・くっ」

プレッシャーに押され、後退するエル。当たり前だが、彼はエル達を逃がしてくれるほど甘くはない。反町達三人も、エリカと祐理がこの状況では引くことはないだろう。彼らの目は、恐怖に怯えながらも立ち向かおうとしている。

（・・・やむなし、ですか）

懐から呪符を取り出し、三人の方へと投げつける。強制転移で幽世にある須佐之男命の館へと問答無用で吹き飛ばす。あとで須佐之男命から文句を言われるだろうが事態が事態だ、しょうがない。あ

とはこの場から逃亡するだけ。この時エルはそう思っていた。

「へえ、彼らを消したか。」

結果から言えば、エルの判断は間違っていた。彼女はこの場で一目散に逃走すべきだったのだ。そうすれば、追跡してくるであろうドニを三人から引き離すことができるのだから。なまじっか強制転移などという高等術を用いたせいで、ドニの警戒心を煽る結果となってしまうのだ。一般人を駒にするくらいの雑魚かもしれない、という印象から一転、次元転移を可能とする実力者として見られてしまったエルに、彼女一人では生存の目は万に一つもない。転移の護符は一枚しか受け取っていない以上無駄遣い出来ない代物だったのだ。

殺気を察知し背後に飛び退くエル。奇跡的に回避に成功した命を奪う一撃は、彼女の左腕をたやすく吹き飛ばす。

(くっ・・・マスター!!)

進退窮まったエルは、自らの主に念話を送る。ここに黎斗を呼び寄せることは本来なら下策かもしれない。しかし、エルが死亡すれば変化の術が解け、狐の死体としてこの場に残る。解剖されどもしたら、黎斗の神力の残滓を察知してしまうだろう。そうなれば事態が露見するだけではすまない。こんなでも一応神殺しの眷属なのだ。神殺しの眷属の死亡は、絶対に黎斗と欧州に禍根を残す。最善手は一人でのここからの離脱。それが敵わぬ今、次の一手は生きてここから抜け出すこと。幸い相手は勘違いしている。今エルが黎斗を呼び出しても己の契約した人間を呼び出した、と誤解させられるはず。それに、賭ける。

「・・・!!」

風が吹いた。遠くにいても、相手の下へ駆けつけることのできるウルスラグナの力の一端。ただその使用者は護堂ではない。友愛の神アーリマンの権能でその権能を一時的に拝借した黎斗だ。両手にビニール袋を持つ、という戦場に似つかわしくない姿で現れた彼は周囲の様子を素早く確認する。

「今度は買い物帰りの民間人？　・・・本気を出す気が無いのなら、出させてみせようか！」

ドニの剣が、エルへと放たれる。神速で振るわれた一撃は、黎斗の左腕に阻まれた。出血しながらもしっかりと握り締めた手は剣の些細な動きも許さない。ドニの瞳が驚きで僅かに見開かれる。

「へえ・・・」

「有り得ない・・・」

感嘆する魔王。呆然と呟くエリカ。彼の王の剣を見切るような芸当を出来る人間が、この世に果たして何人いるのだろうか！　まして対峙しているのは、自分たちのクラスメート。彼がカンピオーネだったとしても、自分たちと年齢はほとんど変わらない。エリカは夏休み少し前に赤銅黒十字の力を借りて秘密裏で彼の戸籍調査を行ったことがある。結果、水羽黎斗は幼い頃に両親と死別してはいるものの、生年月日および戸籍に偽造された形跡はない。つまり、彼が権能を篡奪し神殺しとなったのはこの十数年以内の話の筈なのだ。十年いくかどうかの鍛錬で最強の剣士と張り合えるようになると思えるほどエリカは非現実的な思考回路を持ち合わせていない。この事態は、異常だ。

「あなた誰？　僕ら須佐之男命様の眷属に対して恨みでもあんの？」

僅かな隙にエルと念話で相談した黎斗の結論は、須佐之男命の眷属という扱いで強引に誤魔化すこと。ここでドニを殺し闇に葬れば、事態は沈黙するどころか大事になるだろう。カンピオーネ殺害などしてしまえばそれは世界中にあらたな神殺しかまつろわぬ神か、更なる存在が居ることを発信するようなものだ。だから黎斗は神に仕える者と偽りこの身を晒す。ゴタゴタに巻き込まれるだろうが、神殺しとバレルよりは影響はないだろう。護堂の傘下に加わるのも悪くないかもしれない。若き神殺しがどこまで育つのか興味がないわけではないし。神と戦って負けかけても援護は出来なくなるが、雑魚の掃討くらいなら大手を振って出来るようになる。チート剣があればまず敗北はないだろう。

須佐之男命には事後承諾をもらえばいい。そう結論付けて彼に拒否される場合を考えていない黎斗の思考は、事態の樂觀視故なのか須佐之男命への信賴故か。

「眷属？」

「そう。こっちの娘は諸事情で須佐之男命様の力を一時的に借りているだけの存在だ。あなたが誰か知らないけれど、その剣を仕舞ってもらおうか」

「・・・断る、と言ったら？」

「貴方、それなりの立場の人間でしょ？　ここで倒すのは忍びない」

黎斗の宣告に、ドニは寧猛な笑みを見せる。まるで、予想外の大物を発見した漁師のように。

「黎斗、貴方何馬鹿な事を言っているの！？ その御方はカンピオーネの御一人、”剣の王”サルバトーレ卿よ。いくら貴方が強くても、勝てる筈がないわ。お引きなさい！！」

エリカが何か言っているが、黎斗の耳には入っていない。万が一戦闘になった場合、権能を使わないで勝つのは如何に彼でも厳しいものがある。気を抜くことは許されない。

「僕がカンピオーネと知ってなお、立ち向かう意思を見せるか。なかなかどうして、面白い。君のその自信の根拠を見てみたい。一手御手合わせ願えるかな？ 大丈夫、勝敗にかかわらず彼女には手を出さないよ。まつろわぬ神でない上にそんなに強くないのなら戦う理由はないからね。あ、そうそうさっきの少年たちにも謝っておいてくれ。無闇に威嚇しちゃったからねえ」

「・・・随分物分かりがよろしいのですね。カンピオーネの皆様は傍若無人と伝え聞いておりますが」

三人に謝っておいてくれ、などという殊勝な言葉に黎斗は感心を通り越して疑問を浮かべる。カンピオーネは自分勝手な連中だけだと聞いていたのだけれど。そう思った彼は一応敬語で返答する。カンピオーネと知らされてしまった以上、タメ口をきくのは不味いだろう。

「だってそりゃあ君、これから御手合わせ願う人に対して、最低限の礼儀くらいはねえ」

「・・・戦うことへの拒否権は無しですか」

なるほど、たしかに自分勝手だ。こっちは良いと言っていないの

にいつの間にか勝負すること前提で話が進んでいる。人の都合を全く考えていない。「願う」とか言っておきながら決定事項とは。

「しょーがないか。・・・ロンギヌス」

自身を呼ぶ声に呼応して、神殺しの槍が姿を現す。他に武器になりそうなのはビニール袋&たくさんの食べ物しかない。手の内を晒したくないが負けるよりマシだ。負けにいく考えを即却下するあたりなんだかんだ言ってもやはり自分はカンピオーネだな、と心の中で自嘲する。

「では剣の王、サルバトーレ卿。お相手するは神殺しの槍とその所有者。神殺しの力、とくにご覧あれ」

§15 魔王に立ち向かうのは勇者だけではない（後書き）

このままだと原作焼き直し（ってか、改悪？）になりそうなのでそこをどうにかするのが課題、ですかね

五巻は恵那の都合上絶対関わるし・・・教主戦ちよっと考えてみなきゃ

ノリノリで書いていたら三馬鹿が・・・

問題はサルバトーレ卿が興味を示すか云々なのですが、まあそこはご容赦を（爆

名前覚えの件とかから見るとこの展開は有り得ないっちゃあ有り得ないですよー（汗

多分護堂の友達だろうボコれば護堂に発破かけられるだろう！

みたいな考えがあったと脳内補完お願いします（汗

違和感、矛盾等ありましたら是非ご助言いただけると幸いです

以下戯言

改めて9巻読んで思ったこと

あれ？ロンギヌスなら不滅設定の聖杯壊せるんじゃない？（爆

聖杯も聖槍も聖遺物の一端だし同種同士がぶつかり合えば相互消滅するんでなからうか

・・・・そんなことを思いロンギヌスの破壊フラグ建てるべきなのかな、と思う今日この頃

あ、9巻で恵那がヒロインやってくれてるので（しかも叢雲だから回避不可ですし）結構焦ってます（笑

護堂に叢雲持たせる場合恵那が護堂側じゃないと無理じゃん！みたいな（苦笑

ま、そこまで到達するのに時間はまだかかりますし気長に考えます

§16 知りすぎた者（前書き）

サルバトーレ↓ドニ

でしたね（汗

前回の訂正します・・・

§16 知りすぎた者

「信じられん。あの少年は一体……」

アンドレアも、エリカも己の目を疑った。

サルバトーレ・ドニと水羽黎斗は既に十分以上刃を交えている。

戦局は、互角。

「もしやサルバトーレ卿、手を抜いていらっしゃいますか？　いくら権能を使っておられないとはいえ、互角に打ち合える人間がいるなんて……」

アンドレアに問いかけるが、正直これで手加減しているなどと信じたことはない。これが手加減なら自分たちへのあの一撃など彼にとっては手加減どころか兇戯に等しいではないか。そう思う一方で、彼は剣を極め神を殺した存在であるのだから実際自分たちのと勝負など兇戯かもしれない、とも思う。武芸においてエリカの上を行くであろう陸家の御曹司も彼の前に何秒立っていられるのだろう。”剣の王”の名は伊達ではない。そんな彼がもし本気ならば、黎斗が互角に戦えることなどありえない。これは黎斗が人間と仮定した場合だが。いくら神降ろしを出来たとしても、剣で神を殺した人間に匹敵する武を修めた人間なんてそう何人もいてたまるものか。

「あのバカは手を抜いているが本気の数歩手前だ。おそらく本気になると自制が効かなくなり権能を使いかねないから意識して抜いているのだろう。いくら降霊術が使えたところで人間が張り合える領域ではない」

予想はしていたが、それでも手加減なのか。この戦いは見るもの

が見れば目を奪われるような素晴らしい勝負なのだろう。だがエリカではその速すぎる動きに目が追いつかない。不可能な体勢から一撃を繰り出し、無数に放つフェイクの中に、必殺であろう一撃を流れるように描き出す。全てが速く、重い。そんな常軌を逸した技の数々。そこまで考えて、ふと痛みが消えていることに気付く。

「・・・あら？」

「大丈夫ですか？ エリカさん」

暖かな光に振り向けば、戒めを解かれた祐理とエルと名乗る少女の姿。エリカが動けるようになったのがわかると、祐理はエリカの治癒をやめてアンドレアの縄を解きに向かう。

「純粋な武術ならばマスターとサルバトーレ卿の実力はほぼ互角。権能を使われない限りしばらくこの拮抗は続きますが、権能を使われると收拾がつかなくなります。私たちがここにいる限り、マスターはサルバトーレ卿と交戦せざるを得ません。よって私たちは全員一回退却します。ご理解をお願いします」

エルの提案は、この場においてもどうしようもないのだから間違っていないだろう。黎斗は彼女にえらく信頼されているようだ。カンピオーネ相手なのに敗北を全く考慮されていない。

「私達はこの事態の解決をして速やかに護堂の援護に行かなければならないの。・・・と言っても私達では何も出来ないわね。わかったわ、いったん引きましょう。護堂が悲しむでしょうしここで黎斗を殺されるわけにはいかないわ。」

エルと会話しているエリカは、とうとう「收拾がつかなくなりま

す」という言葉の真の意味に気付くことはなかった。彼女は「ドニが権能を用いると黎斗を殺してしまう。そうすると後の事態の收拾がつかなくなる」と最後まで思い込んでいたが、エルの実意は「権能合戦になって最悪周囲が焦土になる」である。普段なら気付いたであろう違和感に気付けなかったのは、日常でどんくさいところしか見せていない（体力測定だと彼は学年最下位組の一人だ）黎斗がドニと互角に打ち合う光景を見ていたからだろう。ギャップが大きすぎたのだ。

「この事態とはなんですか？」

「あら、貴女気付いていなかったの？ この周囲一帯に今結界が張られているのよ。効果は文明レベルの衰退。結界内では電化製品などが使えなくなるわ。せめてあの板だけでも破壊できればよいのだけれど、おそらく私たちに臨戦態勢のサルバトーレ卿の索敵能力を超えられるとは思えないわ」

「はい・・・はい、了解です。御武運を。・・・エリカさん、今の内容を念話でマスターに連絡しました。私たちの撤退後に破壊を試みるそうです」

あの”剣の王”を相手に戦いながら他の人間と念話をする余裕まであるなんて、そう思ったが疑問は呑み込む。今はそんなことを考えている時間も惜しい。

「・・・詮索はあとね。今は頼らせてもらおうわ」

「参ったな。自覚してなかったけど相当鈍っているみたいだ」

全盛期なら、容易く勝てただろう。二刀流で互角、槍でなら快勝、といったところか。しかし、今の身体では動きが追いついてこない。模擬戦だけで実力の維持はやはり厳しいらしい。負けることはまずないが、楽に勝てる相手でもなさそうだ。

幾度目かの交差、自分の弱体化を目の当たりにし黎斗は密かに口を噛み締める。周囲から見ればこれは破格の大健闘。なにせ欧州最強の剣士と張り合っているのだから。

だが、これでは駄目だ。一番得意な槍でこの有様ではひどすぎる。圧勝とはいかなくても優勢に立ち回れるくらいの力量を有して無くてはこれからが思いやられる。黎斗の権能は安定した単体攻撃権能が存在しないのだから。邪眼や流浪の守護といった安定した守りはあっても攻撃は日中専用の広域殲滅だったり夜限定の邪気波動だったりして不安定だ。今回だって相手の後ろにある変な板を武術で破壊せねばならない。四人が撤退し、更に結界を破壊されればいかに天性の負けず嫌いとはいえ諦めるだろう。というか、諦めてくれなると困る。黎斗は殺人者になって警察の厄介になりたくはない。

「・・・そろそろいいでしょうか？ 腕試しならこれで十分かと存じますが」

その言葉と共に、ロングヌスを一閃。全盛期ならサルバトーレの持つ剣を吹き飛ばしたであろう一撃も、今の彼ではそこまでの成果を発揮できない。楽に止められ、弾かれた。しかし、それも織り込み済みだ。弾かれた勢いを利用し、背後へ跳躍。結界の中心と思しき板切れを串刺しにする。四人の逃亡は確認済み。これで諦めてくれるといいのだけれど。

「あ・・・」

ドニの一言と同時に、結界の破壊される感覚。このはた迷惑な結界は効力を失った筈だ。

「・・・やれやれ、ここは大人しく引こうか。いつの間にかみんな逃げちゃったし板も割られちゃったし。悔しいけどこれは僕の負けかなあ。流石に”本気”になっちゃうワケにはいかないしね。それにここで時間を食って護堂^{メインディッシュ}vs神様に間に合わないのはとっても困る。だからこれで妥協するよ。ああそうそう、君名前は？」

剣を収めるサルバトーレ。残念そうな台詞の癖に嬉々とした表情を浮かべ王は尋ねる。

「水羽黎斗と申します、王よ」

「うん、黎斗か。面白い少年も発掘できたし成果は上々ということにしとこうかな。本当に護堂の周りは面白い。じゃあね」

去っていく彼を見届けて、黎斗は四人の後を追う。エル達の位置は念話でだいたい判明しているので問題はない。あるとすれば、ただ一つ。

「後始末、めんどくせえ・・・」

思わず口に出してしまう。エリカと祐理だけならディオニュソスによる洗脳でどうにでもなるのだが、眼鏡の男の存在だ。

酒の神にして死と復活の神、ディオニュソス。ディオニュソスの密儀は女性信者のみに許され、男が参加するには女装するしかなかったという。密儀で踊り狂う女性は尋常でない力を誇り、自分の息

子の判別すら出来ない程に狂わされることになる。ここにある彼の力の一部を用いる。ここまで聞けばアイスマンがなぜ問題なのかわかるだろう。この神、なんと権能が女性限定なのだ。「女性限定の能力。手加減で完全洗脳、全力で精神破壊とかねーよ。しかも声聞かせるか相手見れば即発動って下手なエロゲーも真っ青だなオイ」などと黎斗が言うのも無理はあるまい。ドニも護堂みたく周囲の人間が女性だけだったなら、こんな誤魔化すことに苦労しなくてすんだのに。そしたら全部洗脳で解決、という手段がとれる。

「あーあ・・・ 権能使っていないし誤魔化せるかな・・・」

出来ることなら行きたくない。お母さんに0点のテストを見せる子供の気分だ。避けられない追及を想像し、回避の方策を考える。ドニの言っていた「護堂VS神様」のことなどもう頭の外だ。黎斗の足取りは亀のようだった。

「羅刹の君、本日はお助けいただきありがとうございました」

「・・・・・・・・」

開口一番に言われたのは、祐理からの感謝。だがそこには、聞き捨てならない単語が入っている。

「えーと、万里谷さん？ 羅刹の君って」

「エルさんに全て教えていただきました。勝手に事情をお伺いして

しまい申し訳ありません」

祐理の言葉に口が外れた。黎斗はすごい速度でエルの方を見る。

「エルー!？」

「ご、ごめんなさいい・・・ エリカさん相手に隠し通すのは無理でした・・・」

駆け引きになれていないエルは黙秘以外の行動をとらずポーカーフュイスも出来るわけではない。そんなエルが権謀術数に優れるエリカ相手に情報を隠し通すのはやはり無理だったようだ。驚きを素直に顔に出してしまう時点で、敗北は決定していた。彼女ならばエルの表情の一つ一つから見破ることも不可能ではないだろう。大人しく白旗だ。

「はぁ・・・負け、か。では改めて自己紹介。かなり昔に神殺しになりました、水羽黎斗です。おそらく現存する同胞の中では最長なんじゃないかな? 異名つぱいのもあったけど、それを呼ぶ者はみんな死んでると思う。何世紀も前の話だし。だから普通に呼んでもらって構わない。ああ、この話オフレコね。口外しないで。あと録音とか盗聴も禁止の方向でよろしく。普段と同じように接してちょうだいな」

あっけらかんと答えてみる。今まで必死に隠してきたのだ。もつと隠すと予想していたのだろう。呆氣にとられる三人の様子を見て、思わず彼はニヤリと笑う。そんな微妙な空気の中で、果敢にエリカが切り込んでくる。

「御身が我らの王、草薙護堂の周囲にいるのはなぜでしょう?」

「友達だからねえ。正体を告げないのは護堂が”僕”の存在を知って安心することを防ぐためって理由もあるんだよ？ 気の緩みは死を招く。もうちょっと強くなったら言おうかな。今僕の存在を知らせることはマイナスにしかない。もつとも、僕が魔術結社とあまり関わりたくない、という理由の方が大きかったりはするのだけれど」

護堂と敵対する、と答えたらどうする気だったのだろうか。いや、考えるだけ無駄か。そうしたらこの少女達は確実に黎斗を敵と見なすだろう。

「・・・さて、重要情報大安売りしたワケですが」

がらり、と黎斗の雰囲気が変わる。彼女たちにこの権能を使いたくはなかったがやむを得ない。知り合いに対する精神操作を嫌がっていたら今までの苦労が水の泡だ。精神を破壊しないように加減。宝石店での換金作業やらアパートの手続きやらでお世話になった権能。ディオニユソスの力の一端を発動させる。

「我は心を汚す者。全………を忘れて？ 僕は神の力をその身に移す事のできる一般人。ただそれだけだよ？」

葡萄酒の色に染まる黎斗の瞳。色が鮮やかになっていく彼の瞳と対照的に、少女たちの瞳はだんだん虚ろになっていく。彼の言葉が途切れると、糸の切れた人形のように二人は机に突っ伏した。本来ならば意識を奪う必要はないのだが、これからの会話を聞かれるわけにはいかない。

「これで二人に関しては終了。彼女たちの記憶は封印した。僕が公

開する日まで、今日の出来事は偽りの記憶で彼女たちの中に残り続ける。・・・さて、本題に入ろうか。貴方の、名前は？」

そう言ってアンドレアの方を向く黎斗。カンピオーネの視線を受けて、王の執事は僅かに震えた。

§16 知りすぎた者（後書き）

実は書いていて違和感が終始消えなかったり（爆
文章練るのって難しいですね・・・

そしてアンドレアが居なければ・・・！！

いや、まあ目論見が甘すぎたといえどもそれまでなんですが（苦笑

そして最近気付いた事実

カンピ、もしかして男キヤラ絵少ない・・・？

ドニアレクヴオバンは除くと御曹司と甘粕さんとアイスマンくらい
じゃないですか

三馬鹿もスサノオもじっちゃんもないんだよねあとか思った五月の
昼（何

§17 ペルセウス・・・もといサルバトールあとしまつ (前書き)

ここにグダグダ書かなくても活動報告あるじゃん!と思った今日の頃(苦笑)

§17

ペルセウス・・・もといサルバトールえあしまつ

それは、恐るべき剣筋。神速の剣は、既に護堂と戦い負傷していたペルセウスに回避出来るような代物ではない。サルバトール・ドニの一撃で、”まつろわぬ神”ペルセウスはあっけなく消滅した。

「やれやれ。これならまだ黎斗の方が強かったよ、全く。あ、失敗したな。黎斗に倒してもらえば神殺しになったかもしれない。首に縄つけてでも、引きずって来れば良かった」

色々な意味で間違った考えをしているドニだが、生憎この場にはツツコミが出来る人間も、訂正が出来る人間も存在していない。

「大体弱った神様倒しても権能は増やさない、って釘刺されてたもんなあ。あーあ、ホント連れてくればよかった。本当大失敗だよ。・・・あれ？　どこで釘刺されたんだっけ？　そういえば黎斗が変態だからあまり関わらないほうがいいってどういうことなんだろう。え？　変態って何処で聞いたんだっけ？」

黎斗変態説について聞いたのはパンドラに会った時なのだが、彼はそんなことを覚えていない。彼女が黎斗のことを変態呼ばわりしていたのが頭の片隅に残っていたのだ。

「ふーむ。ま、いいや。黎斗が変態かどうかは今度、護堂やエリカ・ブランデッリに聞いてみよう。最悪彼の周囲に聞けばいいかな」

勝手に納得したドニは、一人その場を後にする。背後でなにやら喧騒が騒がしくなってきたが、彼の知ったことではない。

「ん・・・」

エリカ・ブランデッリは目が覚めた。ここがカフェの一角であることを認識した彼女の頭脳は素早く状況を整理し始める。祐理が隣で平和そうに眠っているということは、二人で仲良く寝落ちしてしまったのだろうか。太陽の日差しが心地よい。

「目が覚めたかね」

男の声に、一瞬硬直した彼女は、顔から血が引いていくのを自覚した。状況を完全に思い出し、失態に動揺してしまう。エリカ・ブランデッリともあろうものが会談の席で眠ってしまうなんて！この場には”王の執事”アンドレア・リベラと”須佐之男命の秘蔵っ子(仮)”水羽黎斗が居るのだ。こんな所で無様な真似は許されないのに！

「申し訳ありません・・・！！」

「私はあまり気にしていない。まつろわぬ神に加えてあのバカの行動があったのだから疲労が蓄積していて当然だ。寧ろ謝るべきはあいつだろう。・・・そうそう水羽君は先に帰っていった。なんでも友達を回収するだのなんだのと言っていたが」

回収、とはあの三馬鹿のことだろう。自分達が危機に陥ったのが原因とはいえ、彼らの行動は自殺行為以外の何物でもなかった。一段落ついたら説教するべきか。それよりも記憶をどうにかしなければ

ば。おそらく黎斗が記憶改竄をやってくれているとは思うが。

「それにしてもこれだけの実力を完璧に隠していたなんて。黎斗、今に見てなさいよ・・・」

不気味な笑みを浮かべることで、アンドレアの表情が引き攣っていることに彼女は気づいていない。彼は今まで「こちら側」であることを隠し切ってきた。不審な点は多々あれど、明確な証拠を一切出してこない。これを彼女は自身の敗北と考える。彼を細かく調査して「異常なし」と判断していたのだから。ここで一矢報いずになんとする。本来ならば交渉で有利に使える手札だが、幸か不幸か今の彼女は年相応の精神になっていた。結果、黎斗（というより背後の須佐之男命達）はとんでもない地獄に叩き落されることになる。

「って、いけない！ 早く護堂と合流しなければ・・・祐理、起きなさい。失礼します。アンドレア卿、ご無礼ご容赦を」

今自分がすべきことは何かを思い出した彼女は慌てて祐理を叩き起こす。駆け足で去っていく少女達を見て、アンドレアは溜息を一つ。

「・・・なんとか誤魔化せたか」

彼の顔には、疲労の色が隠しきれないほど滲み出ていた。

「とりあえず黙っててもらえるかな？」

少女達がすやすやと眠っている隣で、アンドレアと黎斗は対峙する。交渉が黎斗以上に苦手なエルは一人で暢気にグレイプジュースを啜っている。口出ししてこれ以上事態が悪化したらとても困るし。

「王の仰せとあらば」

声を絞りだすアンドレアに、黎斗は更なる追い討ちをかける。

「サルバトーレにも、言っちゃダメだからね。現在、僕が神殺しであることが露見するとしたら貴方経由以外にないんだよね。だから一発でわかるよ」

本来ならば須佐之男命ご一行を除きヴォバンともう一人、黎斗がカンピオーネであることを知る者が居る。だがヴォバンからは秘密にする、と言質を取っているから問題ない、きつと。もう一人の方はそもそも黎斗自身が「正体がバレていること」を知らないのだから対処しようがない。

「一応警告しておこうか。もし僕がカンピオーネであるという噂が広まるようならば、北半球根こそぎ焦土にするよ」

「は・・・？」

隣でエルが、ジュースを吹き出したが無視。ちなみに黎斗としてはそんな事をするつもりは毛頭無い。ただこう言っておけば確実に黙っているだろう、程度の軽い気持ちである。暴虐で知られている（らしい）後輩達の所業を考えればこれくらい法螺を吹いても大丈夫だろう。と思ったのだがアンドレアの顔色が変だ。流石に北半球

は無理があったか？　だがここで案を引っ込めるわけにはいかない。ここで引っ込めたら怪しまれること請け合いだろう。

「疑ってる？　なんならやってみせようか？　全員合わせても僕の年齢に届かない後輩達をかき集めても防止できるとは思えないけれど。妨害なければ一日で十分だし。地球から人間がほとんど消えるから環境もマシになるよね」

勝手に暴走して引くに引けなくなった黎斗はどうとう恐ろしい発言をしてしまう。正直、爆弾発言をカバーするために更に自爆している気がする。エルが呆れた視線を向けてくるのだが、どうしようもない。墓穴を掘りすぎたことに気づいたが、後の祭りである。

（頼む、ここで引いてくれ・・・!!）

ここで「そうですか、ではやってみてください」などと言われたら土下座することになる。すいません調子乗りました、と。各個撃破が出来るならまだしも七人の神殺しと一度に戦おうもんなら勝てるかどうか分からない。スーリヤの権能を乱発すれば大丈夫だとは思うのだが、太陽に耐性のある神が居たり夜戦う可能性も有る。自分にとって最善の戦法で戦える保障は何処にも無い。逐一邪気を叩きつけていてはキリが無いしロンギヌスでぶすぶす刺すのも馬鹿馬鹿しい。そしてそれらを遥かに上回る最大の問題は大量殺人者になってしまうことである。地球の人口は六十億。人口密度を考えなければざっと半分の三十億は殺してしまうことになる。そんなのは真っ平ごめんだ。黎斗の背中を冷や汗が流れる。

「・・・かしこまりました。命に代えても、このことは私の心の内に秘めさせていただきます」

勝った。黎斗は勝負に、勝利した。相手の顔を見るにちよつぴりの罪悪感。

「そう、ありがとう」

立ち上がって小躍りしたいがそんな様子はおくびにも出さず、彼はアンドレアの方を見る。これ以上ボロを出す前にとんずらしよう。三十六計逃げるに如かず、だ。

「エル、行くよ。スサノオのトコ行って三人を拾わにやらん」

「了解です、マスター」

彼女の動きに合わせて紫の長髪がふわりとなびく。柑橘系の香りが漂い、鈴の音がちりん、と鳴った。

「とりあえずここに代金置いておくね。釣りは・・・あげる」

これ一度でいいから言ってみたかったんだよねえ、などと言いなから最古の神殺しは姿を消した。人の技量を凌駕した転移魔法によって。後に残ったのは、拳ほどの大きさの金塊。

「・・・これで払えと」

自分のポケットマネーから出して、この金塊は換金しておこう。そう決めたアンドレアは財布から札束を出す。

少女達に意識が戻るのは、この数分後の事になる。

「あー助かった。ホント、北半球潰さないで済んで良かった良かった」

「マスター、もうちょっと考えてから行動してください。下手したら大惨事だったんですよ。もっともマスターにそんな事出来る度胸があるとは思えませんけど。第一、何発スーリヤの権能を打ち込めば北半球全域焦土に出来ると思っているのですか？」

「・・・あ」

まったく考えていなかった。スーリヤの権能で半径十数km以内は焦土に出来る。これを何回繰り返す必要がある？

「えっと地球の面積が・・・5・10072×10¹⁴?か。北半球ってことは単純に半分にして大体2・5×10¹⁴?。スーリヤ一撃で半径十km焦土にすると考えて面積は3・14×10⁸?。ザル勘定で10¹⁴／10⁸＝10⁶だから・・・ひやくまん？」

幽世では必要な情報がすぐに手に入る。地球の面積がすぐにわかるなんて便利すぎる。嗚呼、大学入試もここで受けたい。ここならどんな入試問題でも満点回答を作成出来る。

思わずそんな現実逃避をしてしまう。百万なんて単語知らないわからない聞いてない。

「マスター馬鹿でしょ。その計算があつてると仮定して、スーリヤの権能を”場所を変えながら”百万回撃てると思ってます？ 一日

で。妨害以前の問題だと思っんですけど」

「出来るワケがねえ・・・」

物理的に不可能だったのだ。大量殺人者になるのは不可能だったらしい。そう思い安堵する一方、改めてアンドレアに感謝する。ヤケクソになって実行したら人類史に残る大馬鹿者になるところだったのだから。有言不実行にしても趣味が悪い。百万という単語で自分のやろうとしていた事に、今更ながら背筋が冷えた。果たして自分に力があれば本当に実行したのだろうか？

「・・・やっぱ無理、だな。その場のノリって怖ろしい。帰ったらボランティアでもして道徳やり直すか」

戦慄の会話をしながら主従が目指すのは須佐之男命の屋敷。転移することにより一気に庭までは来るのだが、やはり玄関から入るのが礼儀だろうとの考えにより彼は直接屋内へ転移したことは無い。今回も庭まで一気に転移するつもりだったのだが、気が緩んだ状態で座標を組んだせいだろうか、誤差が山一つ分になっていた。かくして主従は山を越えるのに余計な手間を取る羽目になる。そしてこの時間は、エリカ・ブランドツリ紅の悪魔が一矢報いる準備をするのに十分すぎる時間だった。

「やほー、邪魔するよー。あ、スサノオの眷属ってことで誤魔化してたから口裏あわせヨロシク」

気楽に構えて須佐之男命の屋敷に入る。普段は黒衣の僧達がいるのに、今日は須佐之男命しかいない。レアな日だ、などと暢気な思考は須佐之男命の怒声に掻き消された。

「黎斗、てめえざけんな!! ヨロシクじゃねえよこのボケ!!」

普段の彼らしからぬ乱雑な口調に黎斗は内心眉を顰める。不良時代の口癖に戻っているということは何かあったのだろうか。

「どしたん？」

「どしたもクソもあるか! 神殺し相手に引き分けるとか何馬鹿やっつてんだてめえ。今日だけでどれだけ魔術組織から追求されたと思っつてやがる。姫さんまで弁明に現世に出張っつてんだぞ」

須佐之男命の一言は、黎斗の予想を超えていた。もうちょっと緩やかに噂が広まっていく、と考えていたのだがその考えは甘すぎたらしい。

「・・・マジ？」

「証拠に姫さん達がこの場にいなえだろうが」

「・・・早くない？」

「紅の悪魔経由で情報が拡散してやがる。ホントてめえは・・・」

情報の拡散具合が異常なのはエリカのせいらしい。記憶操作で胡坐をかいていたらこれか。彼女らしくない気がするが。

「またイヤがらせしてくれたなオイ・・・」

「んで、俺たちはもう過労死しそうな位に忙しいんだが? どっかの誰かが滅茶苦茶目立ってくれやがったせいで」

「・・・ごめんなさい」

こんな状況でもきちんと庇ってくれている須佐之男命一行に沸いてくる罪悪感と感謝。このタイミングで書き物を須佐之男命がしているとなると十中八九自分のことだろう。聞いてみようかとも思ってたがあまり引っ掻き回さない方が良いか。ここは三人を引き取ってとっとと退散しよう。

「あ・・・こっちに転移させた三人は？」

「その机の上に麵棒が三本あるだろ。あんまこっちに人間、それもただの一般人連れてくんなよ」

「ごめんごめん。非常事態だった、ってことで勘弁してちょうだいな」

麵棒になって机の上を転がっている三人を回収。櫛でなく麵棒なのはなんでだろう？ ふと疑問に感じるが、答えを須佐之男命にわざわざ聞くのも馬鹿らしい。これ以上迷惑かけないうちに離脱が吉か。

「んじゃ邪魔したね。迷惑かけてるけどよろしく頼むわ」

「おう。茶を出せなくて悪いな。次来た時はいい菓子用意しといてやるよ」

「・・・期待してる」

次に来るときは上質の酒を持って来ようと、心に固く決意した。

§17

ペルセウス・・・もといサルバトールあとしまつ

(後書き)

北半球云々の計算ですが、策勘定以前に「海洋面積」込みで計算しているので計算間違っていたりします。

陸地面積だけでやればもうちょっと減ると思いますけどどっちにしろ万超えは確定ですね（苦笑）

まあ口では潰すだのなんだかんだ言ってますが一般人に毛が生えた程度の精神なんでそんな事したら精神が押しつぶされて倒れる気がします（爆）

とりあえず、原作五巻相当に入るのは七月～八月になるかと（殴）
小ネタやらなんやらの更新がしばらく続きますのでご了承をば
・・・ベツニ、テンカイカンガエテナカッタワケジャアリマセンヨ
？

§1ー? 数百年前(前書き)

オリキヤラオンリーです。申し訳ありませんが苦手な方は注意をば。
・・・今更何を、ってカンジですけど(汗

§1-? 数百年前

日が沈み、大地が漆黒に染まっていく。一寸先も見えぬ闇の中、人外同士が激突する。

「がはっ・・・」

「これでまた終わりだよ、ヤマ。アンタが何度でも復活するのなら、こっちは再生できなくなるまで殺すだけだ。あと何回で神力は尽きるかな？」

黎斗は指揮者のように腕を振る。それだけで死の神の身体はコマ切れになった。よく目を凝らせれば見えるかもしれない。この空間に張り巡らされた無数の糸が。もっともそれは昼の話。星明り以外の光が存在しないこの場において、魔術強化されたこれらの糸を視認することは容易なことではない。とても細く、とても複雑に張り巡らされているそれは、黎斗の意に沿い自在に動く。

「小僧が・・・いい気になるな!!」

地の底から響くような声と、突き刺すような殺気が黎斗を襲うが、当の本人は涼しい顔。瘴気の満ちる毒々しい空間の内部に存在してなお、彼の表情に焦りは見えない。——いや、無表情な仮面の裏では焦っているのだ。神殺したる彼には大したことない毒だとしても、他の生命体には猛毒以外の何物でもないのだから。早急に決着をつけねばならない。村まで瘴気が広がればこちらの負けだ。

「だから、無駄だよ」

数多の糸が絡みつく。直後、またもや微塵切りの命運を辿るヤマ。糸はただの糸にあらず。魔力を通したそれはとても頑丈で、容易く鉄をも切断する。まつろわぬ神を相手にしても、武器としての役割を十二分に果たしてくれる。

「小癪な・・・！」

最初こそ傲岸不遜だったヤマだが、今や彼の神の声は焦りと苛立ちに満ちている。黎斗の指先が僅かに動いた瞬間、右足が吹き飛び左腕が細切れになった。更に首が吹き飛び、再びヤマは「死」を迎える。これで三百六十七回目。状況だけで判断するならば黎斗有利に見える。しかし日没と共に始まったこの戦闘は、当初の予定を超えて長引いていた。もうすぐ夜明けだ。このままではヤマの放出している瘴気がこの地域を制圧してしまう。ここまで広大に広がってしまったては邪眼で消去しきるのは無理だ。焦燥感が徐々に心の内で鎌首をもたげる。

「死者よ、我の・・・」

「唱えさせるかっーの・・・！」

敵が言霊を唱えきる前に頭部を粉碎する。相手に攻撃させないそれは一方的な蹂躪以外の何物でもない。主を守ろうと突撃してくる鬼達も、時折吹き荒ぶ死の風も、邪眼が輝くたびに消去されていく。ある程度消去耐性を持つ強大な鬼ですら、黎斗まであと数歩というところで崩れて消える。それでもヤマは召喚を続ける。

「舐めるなあ！！」

ヤマが採ったのは、強靱な再生能力に物を言わせた突撃。本来な

らば瞬時に再生する肉体も、邪眼のせいで速度が鈍い。しかしく
ら身体が引き裂かれようと再生するのだ。こちらが限界を迎える前
に黎斗を殺せばいい。単純であるがもつとも効果的。普段、このよ
うな戦法をヤマはとらない。神力の限界が早く来るからだ。更に彼
はアテナ達と異なり闘神では無い。純粋な戦闘能力ならば彼女たち
の下に位置するだろう。しかし今回は話が別。このままではギリ貧
なのだから、肉を切らせてでも骨を断つ。彼の得意とするのは眷属
大量召喚と瘴気放出。黎斗との相性は最悪だ。片っ端から消去され
てしまう。それゆえの、突撃。

「・・・ちっ、まだ再生すんのか。ロンギヌス！」

舌打ちと共に召喚するは、神殺しの槍。ヤマが間合いに入った刹
那、右手が煌めき敵の心臓を貫く。そのまま蹴って相手との距離を
引き離す。左手の指先から糸が舞い、更に四肢を寸断した。

「まだまだあ・・・！」

「・・・マジ化け物だろ、オイ」

接近してくるヤマをロンギヌスで突いてまた殺しながら、辟易と
した声で黎斗が呟く。何度殺そうが甦り襲ってくる様は軽くホラー。
手持ちの糸はもう無い。さっきの攻撃でとうとう耐久が限界を迎え
自壊した。いくら丈夫でも聖遺物たるロンギヌスと異なり限界があ
る。これで、残る得物はロンギヌスのみ。

「捕まえたぞ！」

焦る両者が何時間と戦う中で生まれたほんの一瞬の隙。その隙をヤマは制することに成功する。乱戦の最中、ヤマの右腕が黎斗を掴む。黎斗を掴む右腕から、ヤマは生命力を奪っていく。神殺しの呪術に対する絶対的耐性を持ってなお、壊死を始める黎斗の肉体を前に彼は陰鬱な声で嗤う。

「・・・やっべ」

咄嗟にロンギヌスでヤマの右腕を破壊、脳天を潰し素早く距離をとる。が、肉体の壊死は大きい。今の僅かな一撃だけでだいぶ魔力も奪われた。内臓までやられなかったのは不幸中の幸いか。数秒遅かったら、喉だけでなく心臓や肺まで壊死していたかもしれない。紙一重の幸運に感謝し、黎斗は気を引き締める。

「我は無知なる闇の神！ 怒りに震えし邪悪の化身！」

言霊と共にアーリマンの力を発動。右腕を邪気化、死の波動を収束し解き放つ。螺旋を描く死の風を相手に直接叩きつける！

「効かんなあ神殺しよ・・・！！ あははははははは！！！」

「くっ、やっぱ無理か・・・」

平然と嗤うヤマ相手にやはり、と言った表情で邪気化を解除。ロンギヌスで接近してきたヤマを吹き飛ばす。「最初に死んだ」という名を持つ神に即死系攻撃が無効だったのは当然というべきか。死人に概念的な死を与えることなど出来はしない。もう死んでいるのだから死にようがない。黎斗はそう思い納得している。死者から生

命力を奪うなんておかしい話だ。まあ、死者が動いている時点でおかしいのだけれど。とにかく、これで黎斗の手札は無くなった。日が昇るまであと数時間、スーリヤの権能”破壊光線”カタストロフ・レイも使えない。やはり、物理的に破壊することで死を与えるしかない。

「・・・しようがない、奥の手だ」

ヤマの神力は莫大。半分以上削ったとはいえ、おそらくあと三十回以上は殺さねばならない。正攻法を諦めた黎斗は、一対一の戦闘の切り札を切る。それはこの場に敵がもう一人でも居た場合、黎斗の敗北を確定させかねない諸刃の剣。

「天空よ、我が名の下に裁きを与えよ。未来より迫る滅びを縛れ。左に剣を。右には鎖を。我が腕^{かいな}を贅とし汝を封ぜん！」

言霊を紡ぐと黎斗の右腕が壊死を始める。それは、天空神テュールの権能、破滅^{グレイブニール}の呪鎖の代価。一ヶ月もの長きに渡り彼は利き手を奪われる。だが、この力はその欠点を補って余りある力。邪眼^{サリエル}と破滅^{テュール}の呪鎖。この二つこそ黎斗がシルクロードを旅していた頃、無^{ディ}に帰する主と呼ばれ畏怖された所以。相手に行動をさせないのが彼の戦闘法。どんな相手でも封殺する。一切の抵抗を許さず潰す。数百年を生き延びて来たのは流浪の守護だけに頼ってきた訳では無く、また決してまぐれなどではない。

「ぐっ、なんだこれは!？」

鎖に囚われ叫ぶヤマ。グレイブニールに絡め取られ自由を失った相手は、自力で戒めを破れない。たとえどんな権能を持っていたとしても、どんなに身体能力が高くても。一度捕まってしまうえば脱出は不可能。転移も、破壊も、憑依も、ありとあらゆる力を撥ね退ける。外部より攻撃を受けるその日まで、所有者を破滅より守護し続

ける呪いの鎖。外部からの攻撃には非常に脆いが、内部からの行動には絶対を誇るインチキじみた、滅びの鎖。紐でなく鎖なのはパンドラ曰く黎斗の心理が関係しているらしいが、鎖でも紐でも構わない。今の彼にとっては形状より効果こそが重要なだけだから。

「こういうのは卑怯であまり好みではないのだけれど、流石にこれ以上相手をするのはしんどいからな。時間も無いし。悪いが許して頂戴な」

黎斗の声と同時に、槍の一撃がヤマを襲う。心臓を抉った一撃を受けてなお、不死なる肉体は甦る。だが、鎖に囚われたヤマはもう、蘇生以外の行動が出来ない。動くことも攻撃することも叶わないヤマの頭部を再び槍が穿って抉る。

「甚振るのは嫌いだから、全部心臓か頭狙うよ。お互い早く終わらせよう？　——早く、死ね」

冷酷なる宣言。一方的というにはあまりにも一方的な、情け容赦の無い蹂躪。ヤマの絶叫が辺りに響き渡る。

それは幾度目か。一方的に蹴られていく光景が、ついに終わりを告げる。既に死亡数のカウントを放棄した両者だが、神力の減り具合がヤマの余命を確実に伝える。太陽が姿を見せ始めるころには、彼は死亡寸前になっていた。残り命運が僅かとなった彼を前に、思うところがあったのだろうか。黎斗は最後にヤマへ告げる。

「これで終わりかな。次会うときは再生ばっかすんなよ。っーか瘴気撒き散らすな」

夜明けの日差しを浴びながら、黎斗は最後になるであろう一撃を放つ。ロンギヌスが太陽の光を受けて、黄金色に輝いた。対象の消滅と共に役目を果たした破滅の呪鎖も消えていく。死者が七色に煌めく粒子となりて、霧散していくのは幻想的で、ついさっきまで凄惨な虐殺の場だったとは思えない。

「ん・・・権能の片方はヤマみたいな超再生か」

パンドラに会ってきた黎斗は、自身の篡奪した権能を確認する。最初に死亡した神、ヤマ。彼の神を葬った彼は不老不死となった。正確にはこの権能を篡奪した時点で一回死亡。その反動で神殺しとなる以前まで肉体が戻る。一見デメリットしか見えないこの権能、この権能の真価は”既に死亡していること”これに尽きる。老いることは無い。寿命も無い。既に死んでいるのだから。死の呪詛も受け付けない。死者を呪い殺すことなど、誰にも出来はしない。あらゆる精神攻撃も通用しない。死んでいるのに風邪引いたり生理現象があったりするのが謎だが、そこはまあご愛嬌だろう。死人と化した彼を討ち滅ぼすには物理的に肉体を破壊し尽くす他は無い。しかし、ヤマの力により規格外ともいえる再生能力を有した彼を殺し尽くすの困難を極める。肉体全てを一瞬で全消滅させても次の瞬間には再生するのだから。神力での再生が何回可能かは彼自身にもわからない。ただ二桁ギリギリくらいは再生できるだろう。ヤマの逸話

に再生関連のエピソードがあったかどうか知らないが、死者を救う地蔵菩薩と同一視されたことからこの権能は誕生したのだろうか？

小学生の頃、授業で調べた地蔵菩薩のご利益に「何度でも天界に生まれ変わる」というのがあったような気がする。正直、ご利益が多すぎたので合っている自信はない。小学校での学習がこんなところで役立つとは。

それより問題は人間時代、つまり引きこもり少年時代だった頃に戻った、ということだ。身体能力が壊滅した、ということでもある。致命的な弱点となってしまった以上魔術強化で補うしかない。神殺し時代とは比ぶべくも無いが、魔術強化しないよりはマシだろう。強化すれば聖騎士級までとはいかずとも大騎士一步手前くらいまでなら追従可能だと思いたい。

「しかも魔力ガタ落ちつてのが笑えないな・・・地道に鍛錬しかないか」

魔力が神殺しとなる前まで戻ったことにより、激減してしまったことも痛い。こっちは訓練で伸ばしていくしかないだろう。一般人クラスの身体能力＆凡人級の魔力量ではまっろわぬ神と戦っても勝り殺しに合うだけだ。下手をすれば聖騎士にも劣る。今後の課題を認識した彼は、下を向いていた顔を上げる。

「さて、とりあえずこれで問題は解決でしょう。パンドラさんに文句言われたけど」

今回のように破滅の呪鎖で絡め取り一方的に攻撃するのは次から権能を増やさないと、と言われてしまった。破滅の呪鎖は使い道に気をつけなければならなくなりそうだ。戦法に頭を悩めつつも気を取り直した黎斗は朝の日差しを背に、宿泊している村へ戻る。ヤマの撃破に伴い、死の瘴気は無くなっているだろう。村のみんなが無事

だとよいのだけれど。

「・・・・・・・・」

世話になっている村への帰り道、金色の毛並みのキツネが足元に倒れている。何かの事情で右前足を失ったキツネ。既に呼吸をしていない。そっと、手を触れてみる。冷たく硬い感触が、黎斗の指を迎え入れた。

「・・・・・・・・・・はあ」

迷子になり空腹で今にも倒れそうな彼を今居る村まで案内してくれたのは、このキツネだった。罨にかかっているのを助けはしたが、それだけだ。マモンの権能で植物と会話することが出来ても動物と会話は黎斗には出来ない。意思疎通ができないにも関わらず村までの道を案内してくれたのだ。

そのキツネは、もう動かない。周囲を見渡せば木々が枯れている。この辺はヤマの瘴気に当てられた領域か。

「恩人・・・じゃない。恩狐が死んでいる、ってのは目覚めが悪いな。やっぱり」

それは、禁忌を破る決意。死者は蘇らない。世界の根本原理を覆す力。地獄の主、閻魔王となったヤマのもう一つの権能。

「開け、黄泉の扉。地獄の主たる我に応えよ。魂を、呼び戻せ。喪

われた時を、巻き戻せ。我は遍く死を司る者。死を領域とし、万物を従える者。終焉を破棄し輪廻を呼び込まん」

一つの種に対し、同時代に現界させられる魂は一つのみ。このキツネを蘇生させれば、このキツネが死なない限り黎斗は他のキツネを蘇らせることができない。しかし、これは完全な蘇生を可能にする力。肉体のみの復活や人格の完全再生などといった程度の能力ではない、正真正銘、生命を従え制御する術。更に蘇った命は寿命の楔から解き放たれる。古来より幾人もの権力者が渴望した、秘術。それがヤマのもう一つの力、”偽りの灯火”イミテーション・ライフ。

とくん、と既に止まった心臓が再び鼓動を始める。むくりと、起き上がりこちらを見つめてくるキツネ。失った足もどういう理屈か取り戻している。どうやら完全な状態での蘇生を可能とする権能のようだ。

右手を動かして撫でようとして、失敗。右は壊死していることをすっかり忘れていた。気を取り直して、左手で撫でる。チロツと舌を出して嘗めてくるキツネに、思わず笑みが零れた。なんか気が合いそうだ。今まで一人旅だったし、こいつをこれから相棒としようか。村へ連れて行く道中に交渉してみよう。

真夏の正午、少年が一人砂漠を歩く。フード付きローブの下はジーンズとパーカー。この時代には有り得ない服装だ。少し後ろを、一匹の狐が追いかけてくる。

これは、過去の物語。一人の神殺しが、相棒を見つけた時の昔話。

§1-? 数百年前（後書き）

ルーツを調べたり民俗学的にひも解くのは僕の技量では難しいので
すっ飛ばしました（爆

注意書きにも前から記載してましたしね・・・

些細な話ですが今回戦闘で使った糸は村の御婆さんから貰ってきた
ものです、ってコレ本当は作中で言わなきゃなんですよね・・・

（苦笑

割と圧勝している印象を受ける方もいらっしゃるかもしれませんが
ヤマは”闘神”ではないので、ともう一度。
相性が最悪だったのもありますし。

アテナ辺りだと多分こう上手くは決まりませんよ・・・？

§小ネタ集 part 2 (前書き)

※信憑性に期待しないでくださいませ (殴

※特定宗教の方で不快な思いをなさる方がいらっしやいましたらごめんなさい

と、予め予防線を張っておきます (爆

……スサノオのキャラがエライことになってます。要注意 (これも今更ですかね)

あ、三点リーダーの件に関してはしばしお待ちを。

また明日以降チマチマ修正していきます

書き方なくてすいません (汗

s小ネタ集 part 2

《鬼札》

アーリマン。闇の最高神にして諸悪の根源。「善」を司るアフラ・マズダの主に挑む無知の魔王。文献によっては一度勝ってんだぜ？ スゴクね？ 別名、怒りの霊。アンラ・マンユ

アーリマン。友愛の神にして救世神ミトラ第一の従神。ミトラの天地創造に助力した善良な神。拝火教以前の神話において重要な神の石柱。アーリマンとは古代ペルシア語で「人間の友」を指す。月日が流れ、拝火教の信仰が拡大する中で悪魔に堕とされても、一部の地域ではその信仰は続いて行った。これはミトラとの絆を示しているとも。墮天してなお、ミトラは庇いつづけたという話から来たのだろう。

アーリマン。アフラ・マズダの双子の兄と言われる存在。ズルワーンの子。

アザゼル。グリゴリの統率者の一人とされる墮天使。名前は「遠くへ去る」の意。元はシリアの神とされる。人間に兵器の製造法を伝え、化粧を教えた。

アザゼル。別名孔雀王。ミトラ教七大天使筆頭。日曜日の天使。墮天使となるも復位、全天使の頂点に立ち光芒に包まれている。その古き名をアーリマンという。真名は「われは神なり」

アザゼル。キリスト教・ユダヤ教のサタン・ルシファーに相当したことから欧米には悪魔崇拜として伝えられた神。イスラム教での名は「イブリース」

僕のとつておきであるこの神は非常に多岐に渡って伝えられてる。ジョーカー地方によって伝承が異なり、名前も異なっている神だ。善神にして悪神。筆頭天使にしてグリゴリの長。・・・ロマンじゃね？

またアザゼルが象徴とする孔雀、仏教では孔雀明王という名の明王が存在する。孔雀は毒蛇を食べることから命を救うとされインドの女神マハーマーユリーがルーツと言われる。道教において孔宣と呼ばれる將軍として、周の前に立ちはだかる。太公望達崑崙の道士では全く歯が立たないチート……もとい圧倒的な強さを叩きだす楊？―（Ⅱ二郎真君）や？？ですらフルボッコ。彼が封神されたのち、孔雀明王となる。

「……ってことはさ、孔雀王Ⅱ孔雀明王だしたら、東西あらゆる宗教に登場するメチャメチャ知名度のデカイ神様だよ。本地垂迹説合わせればこの神様で欧州から日本まで全部つなげるんじゃない？ いや、この神様日本に対応版あるかなんて知らないけどさ。八百万の中に一柱くらいいるだろ、って痛っ！！」

書物が指先に落下してきて黎斗が呻いた。幽世の屋敷で山のような資料に埋もれた彼は、一見どこにいるのかわからない。よく見れば、崩れた古びた冊子の中で指がもぞもぞ動いているのがわかる。足の踏み場の全くないその部屋は、黎斗が現世から持ち帰ってきたり、黒衣の僧に頼んで持ってきてもらった本が所狭しとひしめいていた。過去形なのは黎斗の不注意により天高く積まれたそれらが今しがた崩れたからだ。部屋が揺れるような轟音と共に、彼は本の中に埋没している。

「道教じゃなくて封神演技だろ。しかもまたいい加減にまとめたなお前……っかコレ人に見せる文章じゃねえよ もうちょい粘れ。あと僕ってなんだ僕って。ちゃんと名前に直せ。これは作文じゃねーの、わかってんのか？ チートとかフルボッコとか意味わかんねえ

ぞ」

隣に座り酒を飲んでいた須佐之男命が呆れている。彼は黎斗の解説の真偽に言及することはほとんどない。言及するのは書類の書き方など内容以外の面がほとんどだ。「素人にひも解きなんぞ期待してねえ」と言うくらいならやらせるな、と黎斗は思う。これだけ資料があれば、もう少しまともな解説を作れそうなののだが。途中までは（鼯目に見れば）それらしかったのに、後半のまとめ方、文章も酷い。これでは（三人の中で最も採点の甘い）瑠璃の媛でも赤点と言うだろう。

「結局何書こうと同じでしょ？　アーリマンが親しい相手の力を拝借できるってことと邪気化して転移したり生命力奪えることがわかればいーじゃん。それにいい加減書物漁るのあきたし」

「……はあ」

須佐之男命は呆れることを諦めた。この馬鹿に呆れる時間が勿体ない。こんな使い方をされているのだ。世界中から集められた資料に意思があったならきつと泣いているだろう。集めた人間も報われない。

「っーかさ、なんで僕の権能解説を「僕が」やらにやらんのだ。全部”No, Date”でよくねえ？　その方が格好いいし。何より秘密保持の観点でみてもいいじゃない。プライバシーの保護を求めろ！」

現世ではようやくプライバシー保護が叫ばれる時代になったらいい。ここまで本当に長かった。これでやっと須佐之男命にもプライバシーという単語が伝わる。今までは説明が面倒で口に出せなかつ

た言葉だ。

「一応作っておけば便利なんだよ。お前が現世で暴れて存在が公になったときとかな。正史編纂委員会の連中がオレに事情を聞きにやってきたところでこいつを突き出してやればお前の危険性は十分わかる。お前がオレの力を使えば絶対聞きに来るだろ。そこから情報が他の神やら神殺し共に漏れれば万々歳だ。友人が増えるたびに危険度を増していく神殺し。人の輪を断ち切らない限り延々と強化され続ける存在相手に真っ向から噛み付く阿呆はそう居ないだろうよ。……夜の闇討ちはあり得るだろうがな」

今の黎斗は須佐之男命から一時的だが彼の権能を含む全ての力を借りることが出来る。彼が今までに篡奪した権能と組み合わせることで非常に多彩な戦法がとれるのだ。この脅威だけでも教えておけば黎斗に手を出す輩はまず居ないだろう。惜しむらくは借りれる相手が死亡すると能力を借りれなくなることか。

「そのためかよ！ ……ったく、現世にはケータイの充電関係以外で出ることないから無用なのに。しかも最後こわいから」

「まあそう言うな。人生何があるかわかったもんじゃない。大体お前少し前に数日間どっか行ってたじゃねえか」

そう言う須佐之男命に、どこか保護者のようなものを感じて黎斗は一人笑う。保護者。それは、どこか懐かしい響き。須佐之男命が怪訝な顔をしているが、別にそれを教えるつもりはなかった。

この会話の僅か数ヶ月後、水羽黎斗は現世へと旅立つことになる。彼がまとめた資料は、皆から忘れ去られ、今も机の引き出しに眠っている。結局埃を被っていた。

《自称魔神》

幽世に引きこもってから数百年が経過したある日、酒を飲む黎斗の口からとんでもない発言が飛び出した。

「やっぱさ、魔王ってなんかやだなあ」

「は？」

この時点で須佐之男命は、黎斗は永遠の命に飽きて神殺しの生をやめたくなったのだと思った。だが、次の発言は彼をして想像出来はしなかった。

「だってなんか負けちゃいそうじゃん？　魔王って最後は勇者や英雄、神によって負けるイメージが」

須佐之男命は思わず彼を凝視する。どこか頭でも打ったのだろうか、こやつは。

「……」

彼の沈黙を肯定と受け取ったのか、黎斗は持論を展開する。

「魔神とかかつこよくない？。まあ魔神が負けないとは言わないけれどさ、魔の王と魔の神くらべてみ？　後者って心にすげえ響かない？」

「発想が痛々しいぞ、お前……」

黎斗のあんまりな発言に須佐之男命は突っ込む気力も失せた。永久に等しい命は人の精神を蝕むらしいがこれは酷い。一回現世に出して娑婆の空気を吸わせるべきだ。良くなる保証はどこにもないが悪化はしないだろう。それともこれは酔っているのだろうか。いろんな意味で。それなら寝かしつけるのが手っ取り早いだけけれど。

「……媛さんがいりゃあ話は楽なんだがな。酔っ払いの世話押し付けられるし。エルもこんな時に限っていねえ」

自説を延々主張する黎斗に対し須佐之男命は身代わりを探すも見つからない。ヒートアップしていく黎斗を目に、須佐之男命は彼が酔っ払っているのだと認識する。自説を垂れ流すだけならともかく、それについて絡んでくる酔っ払い程、性質の悪いものはない。

「ちょっとー、スサノオ聞いているうー？」

逐一聞いているか確認してくる酔っ払い。勘弁してほしい。黎斗に飲ませる水を取りに動きたくても、黎斗がそれを許さない。これは覚悟を決めるしかないか。

「あーあー、聞いてるよ畜生う……」

抵抗を断念する英雄神。酔っ払いに逆らうはどこの世界でも下策なのだ。相手に思う存分喋らせてとっとと眠らせよう。下手に歯向かえば喧しい事この上ない。

かくして須佐之男命の憂鬱な一日が幕を開けた。酒を飲みながら行われた黎斗による須佐之男命への主張「いかに魔神という称号が素晴らしいか」は限界に達した須佐之男命が黎斗に詫びを入れることで幕を閉じる。最期の方は黎斗も朦朧としながら喋っていたのだが、酷く酔っ払ったことにより発言内容がより一層理不尽に、意味不明になり更に一々確認をとってくる程に悪化していた。酔っ払いの猛威の前には流石の彼も無力だったのだ。

屋敷へ帰宅したエル達が見たのは、部屋に転がる無数の酒瓶と、堂々と中央に陣取り大の字で眠る黎斗、部屋の隅で打ちひしがれている須佐之男命という意味不明な光景だった。須佐之男命がこんな醜態を晒すことなど、前代未聞だ。これまでも、これからも無いだろう。

以後、百年近く黎斗は禁酒をさせられる羽目になった。本人は異議を申し立てていたが、まあ自業自得である。

《水羽黎斗》

水羽黎斗

黒髪黒目の日本人。身長175cm、体重62kg。右利き。学業は平均的、外国語と数学が平均より若干上。身体能力は学年最下位、視力も悪い。甲信越地方出身で家族から離れて一人暮らし。家族構成は父、母、祖父、祖母、妹。父は大学講師で専攻は看護及び介護、母は量販店の店員、祖父母は農業を営んでいる。妹は今年から県内の公立高校に通学。家族中は良好。孤児であったところを数年前に引き取られた模様。

重要事項

須佐之男命の眷属。眷属でありながら須佐之男命と対等の立場のように振る舞い、また何故か須佐之男命本人もそれを認めている節がある。事実上古老の第二位。正史編纂委員会含む各魔術結社との面識は確認できず。”剣の王”サルバトーレ・ドニの剣に匹敵する槍術を修めている。隠密系の術に優れ一度逃せば発見は絶望的。他の魔術は不明だが要警戒。魔力・霊力を巧妙に隠しており全力は未知数。

以下現在調査中の案件

- ・いつ須佐之男命の眷属となったのか
彼の家系はごく普通であり「こちら側」との関係は皆無に等しい
- ・どこでこれだけの実力を修めたのか
権能こそ未使用なもののカンピオーネと互角という非常識な戦果を叩き出している
- ・嚴重すぎる秘匿性について
古老直々に水羽黎斗本人の調査を打ち切るよう圧力をかけてくるという異常性をどう判断するか

「とんだ大物が釣れましたねえ。エリカさんに人間がカンピオーネとやりあった、と聞いた時は四月馬鹿を疑いましたが。……しっかしこの少年、胡散臭いことこの上ないですねえ」

自身の胡散臭さを棚に上げて、甘粕東馬は上司に見ている書類を渡す。手書きで色々書き込まれており、空白の部分がほとんどない。黎斗について調べ上げられたこの紙の束は、ここ数日で慌てて作成されたものだ。

「正史編纂委員会が知らない、ということはご隠居様の私的な友人かなにかかな？ ……いや、まつろわぬ神に人間の友が居るはずないか」

書類の内容を頭に叩き込んでいく。その最中にふと湧いた思考。ありえないと一蹴したこの考えこそが、真実であることを沙耶宮馨はまだ知らない。

「監視は……やめておこう。バレた際のリスクが大きすぎる。恵那が情報をくれるとは考えにくいけど、一応聞いてみることにしておこう。恵那がこんな長期間山籠もりに行かないというのも引っこかるんだよね。そこから何か掴めるかもしれない」

神懸りをする巫女は強大な力を得ることが出来る。しかし、そのかわりに彼女たちは俗世の穢れに身を汚すことは許されない。恵那も例外ではない筈なのだ。にもかかわらず、彼女は春からずっと彼

の住処に居座っている。霊山に行くこともあるようだが、頻度も期間も以前とは比べ物にならない。もはや行っていないも同然だ。上層部の一部には「清秋院家の娘が駆け落ちした」などと言う者が始まる始末。一歩間違えれば分裂しかねない状況だったにも関わらず古老がこの行動を黙認していたのは、宿泊先が彼らの手の内だったからなのだろう。だが、だとすれば彼女が霊山に行かなくなったのにも理由がある筈なのだ。

「そうそう、その件なのですがね」

事の真偽はわかりませんが、と前置きして甘粕は馨にとんでもないことを言い放つ。

「彼の家、この前お邪魔してみたんですよ」

「……は？」

「彼の周囲をそれとなく探ろうとしましたらあっさりとバレてしまいました。彼の部屋でお茶を頂いてきました」

隠密に関して言えば最高峰の実力者である甘粕を容易く発見する。黎斗の脅威を再確認した馨は、黎斗が凄まじいまでの気配察知能力保持者と認識したのだが実際は異なる。

いかに黎斗でも甘粕の隠行の術を察知することは出来なかった。せいぜいが「なんか見られてる気がするなあ……」レベルの話である。だから黎斗がもしカンピオーネでなければ、この事態は起こらなかっただろう。甘粕の誤算は、黎斗がカイムの権能”リンク・ザ・ウィル繋げる意思”を所持していたことだ。いかに甘粕といえど、大自然全てからその身を隠すことなど出来るはずもない。

「……なにをやっつい」

「それですね、入った時に感じたんですが彼の部屋は人間のものじゃありません。ラノベとかゲームが乱雑に置かれてるんですがね、澱みが全くないんですよ。下手な霊山を凌駕する聖域ですよ、あそこ。最初入ったとき震えが止まりませんでした」

馨の叱責を回避するため、彼女の言に割り込んだ彼は言いたいことを言っ肩をすくめた。

「……お灸は後回しだね。とりあえず合点がいったよ。それならわざわざ山に行くことはないだろう。不肖の部下が行ったことを謝罪するためにも直接こちらから会いに行こうか。二学期始まっているし学校帰りの方がいいかな」

甘粕が無事に帰ってきているのだから、相手はそれほど気性の荒い相手ではないのだろう。もし彼がヴォバンに代表されるカンピオーネのような存在ならば、甘粕は今頃墓地にいるはずだ。古老の関係者なのだからこちらに害をなさないだろうという予想もある。ならば彼の暴挙の謝罪を兼ねて直接会ってみた方が早いかもしれない。そんな決意を、甘粕はいとも容易く打ち砕く。

「ひどいですねえ。人をダシにするなんて。ああ、彼今居ませんよ。友達に引きずられて昨夜北海道へ旅立ちました」

「北海道？」

「なんでも夏休みの続きだとか。昨夜散々メールで愚痴ってましたねえ」

「……メール？」

「はい。私お茶した時に彼とアドレス交換したんですよ。ハマってるゲームの対戦もすることになりましたし。言ってませんでしたっけ？」

「……なんかもういいよ」

ここまで相手の懐に潜り込めた甘粕を称賛すべきなのだろうが、素直に称賛できない馨だった。目の前で「吹雪？ ……やっぱ冷凍ビームですかね。特性はシェルアーマーか」などと言い出した男を見れば、しょうがないのかもしれない。

「だが、これで他組織には一歩リードかな」

黎斗はカンピオーネとは違う。警戒しすぎる必要もないとわかってはいるのだが、サルバトーレ・ドニと打ち合える程の手練れを野放しにしておくのは危険すぎる。当人にバレないように首に鈴をつけるのなら、甘粕のやり方が一番良いのかもしれない。何より、これから先彼が神を殺める可能性は非常に高い。日本に二人目のカンピオーネが現れれば万々歳だ。正史編纂委員会が強大なパイプを持つ神殺し、というのは他の魔術結社に対し優位に立ち回ることを可能にしてくれるだろう。草薙護堂との仲も良好。なんとまあ、おあつらえむきではないか。

「こんな考え、お偉いさまに聞かれたら怒られそうだけどね」

一応繋がりを強固にするために甘粕友人Aだけでなく愛人も送っておくべきか。年頃の男子なら美少女をつければ一発だろう。ハニートラップ万歳。

「って、恵那が居たんだけ。じゃあ十分か。……ふふっ、しかし我ながら罰当たりな事考えてるなあ」

あとは、水羽黎斗が神殺しとなるのを待つばかり。そんなことを考えながら沙耶宮馨は一人苦笑する。

「へくしっ！」

「なんだなんだ黎斗、風邪か？」

「待て、反町。そんなことあってたまるか。ここで風邪引いたら新学期そうそうにピンチじゃん…… 噂だよ噂」

「こういう時の噂ってのはロクな噂じゃねえぞ、きつと」

名波の言うとおりだと黎斗も思う。嫌な予感がビンビン来ている。虫の知らせというやつだろうか？ こちらは昨夜敵さんと戦って疲れているというのに。今回は相手が精神攻撃系だったので物理被害がほとんど無く、魔術組織への隠蔽工作も楽に終わったのが救いだ。被害者全員の記憶が無いおかげで黎斗がした隠蔽工作など必要最低限でしかない。しかし一難去ってまた一難。もうウンザリだ。このエンカウント率はおかしい気がする。

「多分寝不足だよ。昨日遅くまで眠れなかったし」

「……夜コッソリと外出してお姉さまとよろしくやってなかっただろうな!？」

なぜそうなる、と事実無根な反町の問いに言い切れなかったのは悪魔狩りに外出していたからで。ばれないだろうと思っていた事実が一部あっけなく露見したことに黎斗はわずかに動揺する。

「アホか、反町。黎斗がそんなことするワケねーだろ、と冗談は置いておいて、風邪引いたらお前親御さん心配するだろ？ 早く治せよ？」

絶妙のタイミングで援護してくれた高木が居なければ、事態は更にややこしくなっていただろう。

「ありがと、そーするわ。みんな心配性だからねえ」

「ま、長男が一人で上京してくれば心配するのも当然だろ。むしろオレは黎斗一人を都会に送り出したことに驚くぞ」

家族が居ないままではマズイと考えた黎斗が記憶改竄と洗脳の呪術を用いて偽造家族を作り出したのが、飛行機に乗る数日前。記憶改竄をミスったのか元からなのかはわからないが、親の黎斗に対する想いが重い。これが本当の家族なら気にならないのだが、偽りであることが黎斗の良心を刺激する。

「せめて立派な長男を演じないとな。あと仕送りか……」

「あ？ 黎斗なんか言ったか？」

「んーん、なんでもないよ。大丈夫。北海道の土産も郵送するかな」

今、委員会で自分の正体が論議されているとも知らずに、黎斗はお土産コーナーへ歩き始めた。知らぬが仏とはこういうことを言うのだろうか？

《お盆》

「あーづーいー」

「お兄ちゃんだらしないよ」

「そう言ってやるな。都会のクーラー生活に慣れた黎斗にこの大地は辛いだろうさ」

お盆。実家に戻った黎斗は熱気に負けて倒れていた。扇風機の前でグダグダしている様は、とてもじゃないが恐れる魔王に見えない。扇風機に向かって「あゝ」などと言っている神殺しが見れるのは後にも先にもここだけだろう。ちなみにエルは留守番。連れて行くとしたのだが「私をまたリュックに押し詰める気ですか!？」とキレられて断念したのだ。

（洗脳してなきゃホント寛げるんだがなあ……）

洗脳していることによる罪悪感がひしひしと募り、心があまり安らがない。

「あ、お父さん。はい、コレ宝くじ当たったからお裾分け」

「また！？ お兄ちゃんどれだけクジ運良いのよ…… 今度は一体何等？」

少しでも家族の役に立てるように、マモンの権能で得た財産を換金し渡す。といっても現金数百万を稼ぐ高校生など目立ちすぎてしようがないので、宝くじが当たったことにしているのだが、流石にやりすぎたか。義妹が呆れた目でこちらを見てくる。

「何等だったっけなあ。そんなこと忘れたよ」

「お父さんとお母さんの稼ぎより黎斗の宝くじの方が稼ぎが良いわねえ」

義母も苦笑いを隠さない。春と夏だけで一千万近くを当てているのにこの対応。これは器が大きいと言えるのだろうか。少なくとも選んだ家族が強欲まみれでなかったことは幸運だった。

「運が良かったんだよ」

「運、ねえ。私、最初はお兄ちゃんが犯罪でも始めたのかと思ったけど、犯罪に走ってもこんな額なかなか貯まるはずないし。ホントお兄ちゃん神がかって運だよね」

「お義兄様をなんだと思ってるんだ…… 犯罪なんかしませんよ」

真っ当な稼ぎか、と言われれば疑問符が付くが犯罪には接触していない筈だ。相場より若干安値で宝石を市場に流しているのでその筋の人間にとってみれば不倶戴天の敵かもしれないが。

「黎斗、お客様。玄関で待っていらっしゃるから早く行っておあげなさい」

そんな兄妹のじゃれあいの中。義理の祖母……もとい祖母の呼びかけに応じ、玄関まで出た黎斗を迎えたのは予想外の人物だった。

「媛さん……？ な、何故に……」

玻璃の媛は涼しげな声でクスリと笑う。

「お久しぶりです、黎斗様」

黎斗より早く、二人の人物が素っ頓狂な叫びをあげる。

「「れ、黎斗様あ！？」」

「義父さんも母さんも煩い。近所迷惑でしょーが」

振り返れば義妹は口を金魚のようにパクパクさせ、声を出す様子は全くない。

「媛さん、人が悪いぞ。らしくない。こーなることくらい予想して

いたでしょ？」

「申し訳ありません。早期に隠密かつ確実に黎斗様に接触する方法がこれ以外に思いつきませんでした」

念話でここまで言われればいくら黎斗とて重大用件と気づく。この距離でなら念話の盗聴もまずされないだろう。

「…………おっけー。部屋に行こうか。僕の部屋で良い？ お茶くらい出すよ」

階段を上っている最中に下から「お、お兄ちゃんが亜麻髪美人の彼女を連れてきたー！！」などと悲鳴が聞こえるが、聞こえないふり。嗚呼、今日の晩御飯が怖い。みんなから尋問されそうだ。

「申し訳ありません。幽世^{あちら}の黎斗様のお部屋を掃除させて頂いたのですが、黎斗様の権能を記載した用紙が紛失しております」

「部屋…………あーギャルゲエロゲ乙女ゲーで足の踏み場がない状態だったのに。って、は、入ったの！？」

女性に入られたらアウト確実な部屋である。下手したら男性でも引く可能性がある混沌^{カオス}領域。天井に届くまで積み重ねられたゲーム^{パベル}の山は、数知れず。ある種の芸術すら垣間見られる開かずの間。そこに入ったのはよりにもよって玻璃の媛。黎斗の精神ダメージはいかほどのものか。大半はエルの人間変化の為の資料だが、黎斗の私物もあったわけで。

「うわああああ……………」

頭を抱えて転げ回る黎斗に、生温い視線を向ける媛。

「まあ、黎斗様も殿方ですしそれらは全て処分しましたし・・・って違います違います。権能を書いていただいた書類を紛失してしまひすみません。古老のいずれかが持つて行ったものだと思うのですが・・・」

油断しました、と申し訳なような表情の媛。ゲームを処分したことをサラリと言うあたりちゃっかりしている。

「処分・・・ま、まあいいさ、うん。権能の紙もさ、なんとななるっしょ。あれはもともと僕が表舞台に立った時用なもの。見られても致命傷とまらないレベルでしか書いてなかったと思う。アীরマン切札、サリエル邪眼、ヤマ不滅、スーリヤ主力あたりは書いたかもしれないけど。ただ僕が神殺しと公表されるのは困るから各方面の間諜を増やしてもらえると嬉しいかな」

「畏まりました。仰せのままに。今回はまことに申し訳ありませんでした」

玻璃の媛の謝りっぷりはこちらが罪悪感を覚えるレベルだ。本当、美人は得である。大きく構えていられるのも、古老の面子なら須佐之男命の下で一枚岩であるだろう、という考えがある。それならば須佐之男命の友人たる黎斗の扱いも決して悪くはならない筈だ。古老など須佐之男命以外では黒衣の僧と玻璃の媛君くらいしか知らないが。

「用件はもう一つ。黎斗様の保険証を始めとする正式な身分証作成が終了いたしました。よほどのことがない限り偽造発覚はないかと」

たしかにこれの受け渡しをするなら玻璃の媛に出てきてもらわねばならないと、黎斗は一人納得する。なにせ黎斗が神殺しであることを知る関係者の数は少ない。これは機密保持には有利に働くが人員の面でみれば圧倒的に不利だ。偽造を実行した方々が探ったところで真相には辿り着けないように配慮してあるに違いない。幽世に呼び出す、という手を用いなかったのは気を使ってくれたのだろうか。わざわざ面倒くさいことをしてくれて感謝である。

「確かに。ありがと。これでようやく堂々と旅行が出来る」

各種身分証明書を受け取って黎斗は安心したように息を吐く。これでようやく男性職員の受付も行ける。いままでディオニュソスの権能”^{マイナデス}葡萄の誘惑”頼みだったため女性職員が受付に居なければアウトだったのだ。最悪の場合は認識障害で強引に侵入していた彼にとってこれであろうやく大手を振って各種機関を利用できる。

数日後、夏休みから二学期にかけての北海道旅行が計画されていることをしった黎斗は絶叫を上げるが、この旅行が新身分証の初陣となる。

§小ネタ集 part 2 (後書き)

三馬鹿暴走ネタ(限度をわきまえない)もやりすぎ感があるので自重しようと思ったんですが……

あと一回お見逃しを(笑)

強引にカイムの権能名ねじ込んでみました(笑)

ごめんなさい、超訂正です

V S ペルセウスの時の宣言覆しちゃってすいません(滝汗)

すごく冷静に考えてみたらDNA検査まで騙すにはもっと広範囲かつ強力な洗脳スキルorハッキング系(ハイテク系?) 権能ないと無理ですよー、と

感想くださった方々の返信と矛盾しまくりですがご勘弁いただければ幸いです

ご意見下さった方々、ありがとうございました

願わくばまた何かあったら容赦なく突っ込んでくださると嬉しいです

ついでにルビ消し忘れ修正(汗)

9/1、小ネタ追加です。新たに一つ立てるほどの文量も無く、貯めようとしたらますます時期外れになりそうなので(爆)
タイトルが内容とほとんど関係ありません。ホントはお墓参りするはずだったんですが……どうしてこうなった

§17. 5 夏休みの終わりに（前書き）

6／30日に小ネタ part2 追加修正行いました、すみません
よく考えた結論は僕の考え不足で落ち着きました。これから迷
惑おかけしますでしょうがよろしくお願いします

……実はついさっきまた part2 修正しました（汗
ルビを削除したただけなんです。が割と重要だったり。

§17. 5 夏休みの終わりに

「グベえ」

蛙が潰れたような声と共に、黎斗の体は吹き飛んだ。地平線の彼方までノーバウンドで飛ばされていく様子はまるでギャグアニメ。少し見たくらいでは生きているのか死んでいるのか判別できないだろう。

左腕？ さっき天之羽々斬で切り離された。どこに飛んで行ったのかわからない。

右腕？ スケルトンと見間違える程に、骨以外が全く見えない。その骨すら、ヒビが入ったり折れていたり。

右足？ もう粉碎されている。ここまでくると原形を保っているだけで奇跡だろう。

左足？ 腿から下は須佐之男命によって発生した暴風で行方不明。

そして今、頭と胴体が天之羽々斬に両断され、左半分の残骸が暴風で飛ばされた。やはり空中浮遊している状態では回避は厳しい。浮遊が苦手だから、どうしても行動が遅くなる。

普通ならば、いや黎斗以外ならば既に死亡しているであろうグロテスクな光景。左半分の頭をくわえて、エルは懸命に黎斗の元へ走っていく。須佐之男命もそれを止めることはしない。流石にこれは放っておけば彼の命に関わることだ。代わりに彼は酒を飲む。万が一、いや億が一酔っ払っても「今の」黎斗相手なら負けはない。普段ならいざ知らず再生以外の権能不使用な上に呪力魔力も底を尽き、身体に刻まれるのは無数の傷。この状態で勝てるほど須佐之男命は甘くない。そもそも勝てるならば、数百年前の殺し合いは引き分けでなく、黎斗の勝利で幕を閉じているだろう。

「マスター、これ左半分です。いくらマスターでも頭がち割られたら十分程度しか生きられないんですから、優先的に再生してください」

左半分を右半分の上に置きながら懇願する。いくら黎斗が化け物じみた生存能力を持っていたても、頭を失ってなお数時間の生存は出来ない。頭を再生しようにも、現在の状態では満身創痍すぎて再生に回す神力がほぼ無いのだ。一から再生出来ないということは、エルから左半分を持ってきてもらえなければ死亡した可能性があることを示している。

「ん…… サンキュ、エル。流石に死ぬかと思った……」

頭をくつつける。これで死亡の危険性は無くなった。全身に力を巡らせ再生を続行。原型が無い足を優先的に修復する。動けなければ話にならない。

「いやー、やっぱり呪力による肉体強化だけじゃサノオに勝てないか」

この男、少名毘古那神の身体すら使用せずに、権能封印状態で須佐之男命に挑んでいたのだ。ヤマの再生だけは使っているがそれはご愛嬌。使わなければ死んでいるし。鎧袖一触されたのもむべなるかな。サルバトーレ・ドニと戦い知った自身の鈍り具合が、よほどショックだったのか。

「ロンギヌスの治癒も併用して使ってもこれが精一杯か」

「……普通は両足を一から再生するのにかかる時間が数分とかあり得ませんよ。神力も、呪力もすっからかんなのに……」

エルが呆れているが華麗にスルー。白骨化している右腕にロンギヌスを掴み歩き出す。神経が無いから魔力で強引に動かす。さっきので二十三連敗。

「さて、もういっちょ行きますか」

気合を入れて立ち上がり、黎斗は須佐之男命の元へ向かう。ボロ負けは避けられないだろうけれど、もう少しで一撃を叩き込める気がした。

「……それ、絶対おかしいから。神殺しの王様相手に勝てなかったからおじいちゃまと鍛錬ってれーとさん何考えてるの？　いくられーとさんが強くても勝てるわけないじゃん」

変な物を見る恵那の視線もやっぱり流し、夕食を一心不乱に食べ続ける黎斗。動きすぎたのでお腹がすいた。このカボチャの煮物、甘くてとてもおいしい。今度かぼちゃを育ててみようか。

「恵那さん、言うだけ無駄です。言っただけわかるような回数ボロクソになったところで悟りますから」

「だよねえ。でもおじいちゃまと戦える、ってか戦おうとするのはすごいよやっぱり。それが数分で惨敗だったとしても」

「さっきからボロクソだの惨敗だのひっどい言い方だね…… 反論

できないけどさ」

我が家の女性陣は今日も厳しい。スサノオにぼこられているのは事実だが、もうちょっと言い方があるのではないだろうか？ 流石に悲しくなってくる。

「大丈夫。だんだん身体が慣れてきたのがわかる。次は一撃入れてみせるよ」

「まだやるんですか……」

結局今日は一撃入れる寸前に失神してしまった。まあ一撃叩き込める寸前までいけただけでも上出来だ。これなら全盛期に戻る日も近いかもしれない。

「おじいちゃますっごく強いよ？　こんだけやられればもうわかってると思うけれど」

「次はいける。媛さん謹製の”とおき”も完成したし」

背後の小物袋を見やる。中身は超極細のワイヤー。全長数十mはあるだろう。黎斗の得物その三だ。双剣は手ごろなものが見つからないのでパス。瑠璃の媛に無理を言って準備してもらった品物だ。これの性能に媛や黒衣の僧は疑問を感じているようだが、須佐之男命だけは笑っていた。そんな代物に対し恵那は前者の感想も持ったらしい。

「ソレ使えるの？　恵那にはよくわからないんだけど」

「糸使うの随分久方ぶりですね」

「まーね。コイツは結構いいよ。実戦で使う前にスサノオで最終調整しなきゃだけど。神すら殺してみせましょう、ってね」

「おじいちゃまで調整……」

恵那が複雑な表情なのはしょうがない。なにせ日本の英雄神相手の勝負で調整すると言っているのだから。それを抜きにしても各上の相手で調整などと言っているのだから呆れないだけ上々だ。

「スサノオ様々だよ。第一スサノオでもなけりゃ相手にならないし。今度またなんか酒持ってたかなきゃな」

「だーかーらー、それが既におかしいんだってばあ。……なんでおじいちゃま相手にそこまで出来るかな」

「^{こいつ}ごちそうさまー。とりあえず学校のグラウンド行ってくるわ。ワイヤーの使い方思い出さなきゃ」

神を相手にする前に使い方をある程度思い出しておかねば。いかに黎斗とて手も足も出せずに捌られる趣味を持っていない。数百年ぶりだから念入りに練習だ。ワイヤーは不審物ではないし、幽世より現世のほうが障害物などの関係で操作は難しい。ならば難しいほうで特訓しないだろう。

「あ、待ってれーとさん。恵那も行くよ」

「え？」

「本当にそれが強いのかいまい恵那には信じられないし。それに

れーとさんも相手が居たほうがいいでしょ？　ということで一手御指南お願いしまーす」

あつという間に天叢雲剣を持ち出してくる恵那。その身のこなし、まさに疾きこと風の如く。

「まあいいか。槍無し双剣無しワイヤーのみ、でいけば大丈夫かな。一本取れたら恵那の勝ちね」

「れーとさん余裕だねえ。恵那も負けないよ」

そういう巫女の瞳は派手に燃え盛る炎を映しているようだった。ハンデをこつてりつけられた、と思っているのだろう。

「巫女様のお手並み拝見といきますかね」

「はあ……はあ……何、コレ。こんなものってありなの……？」

一時間後、満身創痍の恵那と無傷の黎斗がグラウンドにいた。

「降参？」

「っ、まだまだあー!!」

三日月を背にして笑う黎斗へ、突撃。直感で動いた恵那だが、こ

のルートならば木々が邪魔をしてワイヤーも上手く扱えないであろうことを無意識に判断していたのだろう。

「ははっ、甘い甘い。別に森の中だろうが深海だろうがあんま関係ないんだよねえ」

「嘘お!？」

黎斗まであと数m。そこでワイヤーに全身を雁字搦めに縛られた彼女はサッカーゴールへ投げ飛ばされる。ワイヤーで投げ飛ばすのだから器用なものだ。

「ええー…… れーとさん一体どうやってるの？」

ゴールに絡まった恵那がずるとネットから脱出を果たす。天叢雲剣などもはや泥まみれだ。神々しさなどとうに消え失せ、神器と一見しただけでは見抜けないだろう。

「ワイヤーに魔力を通して自在に動くようにしてるの。操作は慣れかな。んで、あとは注ぐ魔力量を調節しながら指先の動きで相手を束縛又は切断と」

「……聞いた恵那が間違ってた」

顰め面で神剣を握る。恵那はまだ、諦めていないようだがふらついている。そろそろ限界だろう。

「そろそろ帰ろう? もう訓練十分だよ。ありがとう」

「最後にもう一回……!!」

体に鞭打って立ち上がる恵那。天叢雲を構える彼女の瞳に迷いは無い。

「これが最後だからね」

「最後か。なら無茶出来るね。絶対れーとさんに一泡吹かせてみせるから」

不敵に笑う恵那の様子に、黎斗は嫌な予感を感じる。

「え？ それってどうい」

「天叢雲劍よ。願わくば我が身を……」

「うわ、ちょ、待て待って！！ 結界張こんなどこってない場所でソレはやバイから！！」

慌てふためく黎斗を余所に、恵那は悠々言葉を紡ぐ。

「ああ、もう！！ 塩は……もってきてねえ！？ 僕の馬鹿ー！！
我流形成しかないか、我が前にラファエル。我が前にミカエル。
我が前にガブリエル。我が前にウリエル……！！」

東西南北を起点とした黎斗の呪力が渦を巻き、急速にグラウンドを覆っていく。不可視化及び魔力探知遮断の結界だ。攻撃に対する防御機能は皆無だが、相手に攻撃を何処にも当てさせなければ良いだけの話なのだから問題は無い。

「ムチャクチャやるなあ。……付き合う僕も大概か」

「いくられーとさんでも、これを防げるかな!？」

恵那の振るう、凄まじい速度の太刀を難なく回避。ワイヤーで天叢雲剣を絡め捕り遠くへ飛ばす。投げられた神刀は弧を描くようにバスケットゴールに入っていく。

「あ、ラッキー。入った入った。狙ったワケじゃないんだけどな。ついでに恵那も捕獲っと」

相棒を失い雁字搦めに束縛された恵那に降参以外の術は無い、そう思った黎斗は仰天する。

「まだまだあ!!」

「な!？」

肉を切らせて骨を断つというのだろうか。須佐之男命から借り受けた莫大な力に物をいわせて、出血しながらも力尽くで束縛から逃れる。ワイヤーを紙一重で回避しながら突き進んでくる恵那に対する黎斗の反応は、面白い程に慌てふためいている。てっきりここで終わりだとおもったらしい。

「え、ええ!？　ねえ、ちよっちょ、デタラメだろこんなの!!」

「れーとさんに言われたくないよ!　それに窮鼠猫をかむ、っていうでしょ。最後までわからないんだから!!」

「ぐもっとも」

ずっと隅で傍観していたエルがぼそりと呟く。

「マスターにデタラメなんて言われるのは可哀想ですよ」

その言葉の終わらぬうちに、恵那の身体は大地にひれ伏していた。黎斗のワイヤーが、恵那の身体を捉えたのだ。

「あつぶねえー。……しかし恵那で見切れるんだったら神相手は精度不足かな。要練習、っと」

「お取込み中かもしれませんがマスター、この場どうするんです？」

「え？」

なにが？と首を傾げれば、エルが恵那を尻尾で指した。

「結果は解除すれば済みますし問題ないでしょう。でも恵那さんとうやって連れて帰られるのですか？ 気を失ってますよ。傷ついた美少女を背負って深夜に歩く男。不審者ですよねどう考えても」

「……」

恵那をみやるとなるほど、確かに気を失って眠っている。服がロボロで目のやり場に困る状態。服対素肌が3・7と地球の陸海比などとくだらないことを考え現実逃避している暇はなさそうだ。そんなあられもない姿で巫女様は倒れていらっしやるわけで。これは確かに背負って歩けば職質は免れないだろう。下手したら強姦魔と間違われかねない。

「結界張って正解だったな。明日から外歩けなくなるトコだった…

…」

「最後の神憑りで一気に服が消滅しましたね」

「ねー。試合なのにわざわざ服を破ってまで勝ちに来なくても……」

もしやこの子は恥じらいというものが無いのだろうか。もしそうならば今度瑠璃の媛に躑けてもらわねばなるまい。そんな感想を抱きつつ黎斗は恵那を背負って歩く。

「でも恵那さん、最近好戦的ですよ？ 最近は模擬戦の頻度前とは大違いですよ」

「だよ。それは気になった。別に僕を殴りたい、というような理由で挑んできてるわけでもないし。強くなりたいたい理由でもあるのかな？ こっそり式神作成してるのも気になるんだけど。しかも種類が危害を与える類の物騒な代物だし。それにそんな種類だからっていつでも隠さないで堂々とやればいいのにさ。なーんか、いやな予感がする」

「マスター、明日から北海道でしたよね。私だけでも残りまするか？ 例の呪符使えば遠隔通信位私でも可能になりますし」

「うーん、頼める？ ヤバかったらすぐ戻るから。昼間なら護堂の”風”でエルのところに、夜はアーリマンの邪気転移で家まで戻ってことで」

「了解です」

これで安心だ。エルが入れば異変が発生した場合でもなんとかな

る。安心した黎斗は、北海道へと思いを馳せる。

「御老公、やはりそれはおやめになられた方が」

「今しかねえだろう。幸い黎斗^{オニ}は外出だ。鬼の居ぬ間になんとやら、つてな」

「左様。媛よ、新たな羅刹の君を試すのは今においてありませぬぞ」

美貌の顔を曇らせて、瑠璃の媛はため息を吐く。須佐之男命は意思を曲げるつもりはなさそうだ。

「……私はこの試みが行われないことを願います」

今说得するのは諦めて次の機会に回そうと考えた瑠璃の媛だが、その機会が訪れないことを知っていたならば、結末は変わっていただろう。

§17. 5 夏休みの終わりに（後書き）

技量が全盛期でもやっぱり大騎士クラスの身体スペックじゃ権能無しでもスサノオにや敵わないでしょう、というネタ（？）

あ、ラストちよっぴり暗めですが別に暗くなる予定はありませんのであしからず（爆

§18 新たなる刺客達、もとい転校生&居候（前書き）

まさかのエリカが（今回限定）ヒロイン化（爆
エリカのキャラ崩壊が恐ろしいハメに（汗

どうしてこうなった・・・？

§18 新たなる刺客達、もとい転校生&居候

「あれ？ 僕の席……」

三馬鹿を連れて凱旋したのがついさっき。欠席よりは遅刻の方が良いだろうと三人を引きずって学校に向かった黎斗を待っていたのは、自分の席が消えているという事実。今まで黎斗が座っていた席には、クラスメイトが座っている。三人の暴挙を阻止できなかった罰かなんかのだろうかこれは。理不尽極まりない。

「あ、水羽君ひさしぶりー。新学期そうそう席替えがあったんだ。クラニチャールさんが転校してきたから」

「くらにちゃーるさん？」

どうやら罰云々は完全に被害妄想だったらしい。しかしクラニチャール。聞きなれない名前だ。語感外国っぽい感じがする。ということはつまり外国の人だろう。はて、城楠学院^{コゴ}はいつから国際色溢れる所になったのだろうか？ 黎斗の記憶では学校で外国人が二人も同じクラスになることなどまずない。天文学的数値の筈だ。それとも関東の学校では常識だったりするのだろうか？

「男子か女子かはわからないけれど、随分急だな。今年に入ってから転校生三人目だぞ。エリカ様、黎斗、次がクラニチャール……」

徐々に尻すぼみになっていく名波。彼の視線は教室の前を捉えたまま動かない。

「どしたん？ 一体何が……あれ？」

つられて振り向いた黎斗の視線に移るのは、護堂と親しげ（に見えるが若干硬い気がする）に話す銀の髪の美少女。どうやらあの少女がクラニチャールのようなのだ。しかし、どこかで見たような気がする。あんな美少女、一回見たら忘れそうにないものなのだが。

「……あー。あのじいさんと戦った時の娘か。っーことは護堂のフラグだろうな。ここまで追っかけてくるとはなんとまあ」

たしか彼女の技量はエリカとほぼ同等。大騎士級だった筈。あの年齢では破格といえる。今から将来が楽しみだ、などと考えこれでは自分が年寄りのようだと苦笑する。あれだけの実力を得るのにどれだけ苦労したのかを考えると頭が下がる。

「護堂ハーレムは着々とでっかくなってるようで……」

「「「……非モテの敵めー！！」」」

ハーレム、という単語に反応し三人が護堂に襲いかかる。

「うお！？ お前らどうした！？」

「どうした、と聞いてくる護堂もどうかと思うんだけどね」

「あはは……同感だわ」

嫉妬に駆られ突撃する三人をクラスメイトとともに見送って、黎斗は自分の新しい席を探す。気がかりは休んでいる間に授業がどこまで進んでいたかだが、苦手分野筆頭の物質量やらなんやらは一学期の話だ。授業も追いつけなくなる心配はないだろう。

「まあモテる代償だとして嫉妬の視線を浴び続ければいいさ」

席を見つけると、護堂達の喧騒をしり目にノートを開く。あの少女の様子からすると魔術結社本部からの要請か何かだろう。エリカも赤銅などかの魔術結社所属だった筈だし。その対抗馬かなんかと予想できる。それを頭の隅に置いて観察すれば彼女と護堂の関係は主従関係に見えるし。だから、このフラグが恋愛フラグかどうかは微妙なラインではないだろうか。こんな微妙なフラグにまで噛み付いていたらこっちの精神が持たない。

「フラグが本物になったら噛み付けばいいや。護堂頑張れ」

「応援するなら助けてくれ!!」

自分には関係ないとはかりに気楽にメールを送る黎斗。護堂の訴えは右の耳から左の耳へ抜けて行った。

「……………」

「あ、れーとさん。やっほー」

「……………」

放課後。護堂に”護衛”として連行された黎斗は、この学校にいない筈の人物と会ってしまった。

「……え？」

「あー、そういえば黎斗も”そっち側”なのよねえ……」

「……なんでこんなことになってんの」

かろうじて、それだけを絞り出す。困惑した様子の護堂より、達観した様子のエリカに聞いた方が早そうだ。

「……黎斗が知らない、ということはこれは総意ではないのね」

「総意って何よ。っーかこれ何よ。どうなってんのか説明を求めるッ！ー！」

「うんとねー、恵那は祐理が草薙さんのお「恵那さん!？」……えー、別にいいじゃん」

慌てる祐理に口を塞がれた恵那は不満そうに口を閉じる。心底残念そうな顔だ。

「大体わかった。……僕はまーた、惚気に巻き込まれたワケね。いい加減滅びろハーレム男」

「なんで予先が俺に来るんだよ!？ 絶対おかしいだろ!！」

護堂の決死の訴えを脳内裁判所は満場一致で否決する。恵那がだいぶ前に言っていた友達の手伝いとはおそらくこれだろう。須佐之男命一（というか古老の面々）が恵那に手伝わせる用事なんてそんなに多くはない筈。数日で済むような簡単な用事なら長々と黎斗の

家に宿泊させる必要など無い訳で。つまりめんどくさい又は長期戦を覚悟する必要があったということ。恵那が来た時期もおおよそ護堂の存在が公に明るみに出たころだ。時期も一致する。

「おかしくありませんー」

祐理をちらりとみやるが、顔を真っ赤に染めた彼女は恵那の方に注意を向けていてこちらに気付く様子はない。純真無垢とはやはりよいものだ、などと頭の隅でバレたら周囲の人間に侮蔑されそうな煩惱を全開にする黎斗。

「にしても、このお茶、おいしいねえ。こうやってまったりお茶を飲むのは久しぶりだわ。いつも冷やした麦茶だったからね」

「だーかーら、恵那がお茶入れるよっていつも言ってるのに。お湯を沸かすところからやるのと麦茶のパックを入れ物に投げ込むのじゃ味に違いだって出るに決まってるじゃない。もっともれーとさんの場合アテナ様がいらっしやった時以来飲んでなかったでしょ。久々に飲んだから尚更おいしいと感じているのかも」

「「「……!?!?」」」

あ、と思った時にはもう遅い。周囲からの視線が凄まじいことになってるのが嫌でもわかる。「アテナってすごい名前だよねー。まるで神様みたい」などと呑気に会話してるその女子。”まるで神様じゃない、”本当に”神様なんだよ。とツツコミたい。無遠慮な視線に晒されている今はそんな発言が出来そうにないけれど。

「あの、黎斗さんと恵那さんはどういう関係で？」

「うんとねー、家主と居候？」

驚いた。爆弾発言が投下され場が混乱するのがこんな時のお約束だとおもっていたのだが。冷静に考えれば恵那の「家主と居候」発言も十分爆弾発言なのだが、ラブコメやらラノベを読み漁ってきた黎斗にとってはまともな発言に聞こえてしまう。なんだかんだ言っているが一番驚いたのはアテナ云々が総スルーされたことだったりする。

「うん。恵那の親戚の方からちよいとワケありでね」

安全発言、というわけでもなく社会的に問題がありそうなので細かいところを補足する。周囲の雰囲気鑑みるにアテナ云々はどうかやら流されたらしい。こっちの方が重大な気はするのだけれど。古老云々はエリカ達なら勝手に察してくれるだろう。

「ふーん。ご家族の方もそれには納得なさっているのよね？」

「っーかじーさんから打診されたよ」

「……！？」

「エリカ、難しい顔してどうしたんだ？」

「なんでもないわ、護堂。……黎斗、あとで話があるのだけれど時間いい？」

「まずはお礼と謝罪を。ミラノではありがとう、助かったわ。あと貴方の正体を拡散してしまって悪かったわね。つついらしくなく感情的になってしまったわ。今まで隠し通されたことに対しての悔しさから我を忘れて、つい」

（その「つい」でスサノオ達はエラく苦勞したんだよなあ……）

この件に関して今更エリカに文句を言ってもしょうがない。アンネさんドレアと違って口止め忘れてたし。それに一応カテゴリ”人間”で洗脳してある。カンピオーネである、と万が一バレた時の混乱よりは格段に影響は少ない筈。須佐之男命に迷惑をかけるのは現世こっちに住む、と決めた時に覚悟していたことだ。あっちも覚悟してくれていただろう。多分。

（ま、バレるのがこんなに早いのは予想外だったんだけどねえ。百年とは言わないけど数十年は騙しきれると思ったんだが）

「ああ、うん。今度から氣を付けてー？」

事なかれ主義を最大限に發揮してなあなあで済ませようとする黎斗にエリカが安心してくれればすぐに終わっただろう。だが若干の緊張を含ませた顔から呆れ顔に変わったエリカは口を再び開く。

「貴方ねえ。張本人の私が言うのもおかしな話だけどちょっと投げやりすぎない？ どうでも良いようにしか聞こえないわよ？ バレたら困るでしょ。……私に言えるセリフでは決してないのだけれど。ま、それは置いておいて。本当にごめんなさい。さっきの場では言わなかったけれど祐理からお礼の手紙を預かっているわ。直接あの子に御礼参りさせると貴方の立場が大変なことになるかな、と思っ

てこうしたのだけれどよかったかしら？」

はい、と渡された手紙をカバンにしまう。年賀状以外で女子から手紙を貰ったのは初めてだ。

「ご慧眼御見それしました。マジで助かった、ありがと。護堂繋がりで昼ごはん一緒に食べてるとはいえあんま話さないからね。昼休みとかに話をすればいいらない注目浴びるし」

その点エリカは裕理と違って同じクラスだ。機会さえあればそれなりに話す。下手をすればクラスメイトで女子で一番話すのは彼女ではなからうか。それはつまりクラスの人間とはあまり話さないことを意味している。自分の交友関係の狭さに苦笑いしか出てこない。

「あと護堂には貴方の事何も言ってないわ。祐理とも話したのだけれど貴方のこと、護堂には話さないでおくから。仲の良い友達なんでしょ？ 自分の口から言いなさい」

傍から聞けばいいセリフだな、と思う。だが。

「魔術結社に僕の正体バラした人間の台詞とは思えねえなおい」

「だから、あれはついつい我を忘れてだったの！！ そう言ってるでしょ！！ 私だって、そんなつもり本当はなかったわよ！！」

我を忘れる、とは今のようなエリカではなからうか。らしくなく叫ぶ彼女を啞然と見守っていると、我に返った彼女はわざとらしく咳払いを一つ。ほんのり顔が赤い。

「ッ！！！」

流石元ツンデレ（だったと思われる）美少女、恨みがましくこちらを見てくる表情の破壊力が半端ない。なんかこっちが罪悪感を感じてしまう。これだから、美人は本当に得だ。

「護堂ってカンピオーネなんでしょ？　これからきちんと支えてやりな。スサノオと話してよく聞くのは、カンピオーネってのは戦いを避けられないことだし」

最初は様をつけていたのだが、気付けば須佐之男命を呼び捨てだ。直す気力も起きないしこの分ならカンピオーネに敬意を払わなくても構わない筈。護堂くらいなら普段通りに接して大丈夫だろう。開き直って告げるは忠告。エリカの表情に罪悪感を感じてしまったのだ。たまにはこのくらいの気まぐれだっていいだろう。須佐之男命に聞いたなんてのは嘘っぱち。実体験とシルクロードを旅する間に聞いた話だ。嘘をつくときのコツはひと握りの嘘を真実で固めることらしいから須佐之男命の名前を借りておこうか。

「そんなこと、言われるまでもなくわかってるわ。私を誰だと思っっているの？」

自信が溢れ出るいつもの顔だ。やっぱりエリカはこの顔が一番似合う気がする。夕日を背に微笑む彼女は、とても魅力的だった。

屋上にエリカと二人でいたことで、帰りに黎斗は三馬鹿の吊るし上げにあうことになる。

§18 新たなる刺客達、もとい転校生&居候（後書き）

エリカの行動に言い訳を追加してみました

……ええ、そうとう無茶言ってるのはわかってます（汗

アーマンの権能を拝借じゃなくて「他人と仲良くなる」とかにしておくべきだったか（爆

ま、上記にしたところでキャラ崩壊の免罪符になるワケじゃないんですが

ごどーさんに対する断罪会が絶賛難航中です（苦笑
本文をどうやって変えろと……

§19 嫉妬団再び（前書き）

夏です。

暑いです。

熱射病にならないように皆様お気を付けください。くれぐれも僕みたく腐ったもの食べて身体壊しませんように……

§19 嫉妬団再び

「清秋院家の当主が恵那もぜひ王様のお妾さんに、って申し上げちゃったんだよねえ」

「え、ええ!？」

「で、おじいちゃまがそれを小難しい顔で悩んでたんだよねえ。反対派がどーたらこーたら言ってるさー」

こんな会話を交じわしたのが、数日前の話。何を須佐之男命が悩んでいたのかはわからないが、今重要なのは恵那も護堂の妾候補に名を連ねた、ということだ。今でこそあまり乗り気ではない彼女だが、彼の天性の女殺しの才能の前にいつまで撃墜せずにいられるか。それが、裕理の悩みのタネだった。須佐之男命と交渉ができ（るのか本当の所は知らないが、甘粕の話を聞いていると須佐之男命とは一応対等関係らしい）、かつ協力してくれる可能性が高いであろう、切り札とも呼べる黎斗はクラスメイトと北海道へ旅立っているとのこと。二学期始まっているのに何をしているのか。

「こんな大事な時に……どうして悪いことが重なるんでしょう」

本来無断欠席に等しい黎斗に非がある。ここで怒っても問題はない。しかしこちらから頼みごとがあるという一点が、独り言であろうとも彼女が強く言えない原因となっていた。

万里谷裕理が悩みを抱えて更に数日後、黎斗と三馬鹿は学校に登校してくる。二学期が始まってから、既に数日経過していたある日のこと。

「これより草薙護堂を以下略う!!!」

「同志Lよ、いくらなんでも省略しすぎだ!!!」

第二回草薙護堂断罪しとだんのつづいの会は、のっけから混沌に包まれていた。北海道から戻ってきて数日は呑気に傍観を決め込んでいた黎斗だったが、連日イチャイチャし続ける（ように見える）護堂にとうとう限界を迎えたのだ。

「こっちは三人の暴走必死に抑えて外国飛んで北海道飛んでやっと帰ってきたんだぞ!!!? どんだけ警察行っと思ったんだ。なのにてめえ、事欠いてその間にどんだけフラグ建てとんじゃああああ!!!」

リリアナはフラグじゃないと断言した数日前の自分を力一杯張り倒したい。あれは完全にフラグではないか。エリカ・裕理だけでなくリリアナまで。しかもなんか恵那まで最近介入してきてるし。

「てめえは人が苦勞してる間に一人楽しんできるとかどんな身分だああ!?! ギャルゲ主人公とかふっざけんなあ!!! お前が連日イチャイチャしてる間、こっちは警察とOHANASHIだったんだぞ!?! 生徒指導と二人つきりとかあの拷問受けてみるか!?!」

「うおう、同志Lの怒りは凄まじいな……」

「ああ、だがなぜだろう。我々がすごい勢いで貶されている気がす

るのだが……」

三人が若干引いている。それほどまでに、黎斗のネジは外れていた。三馬鹿の暴走についてなんで担任から叱られなきゃなんののだ。三馬鹿の保護者でも監督者でもないのに。護堂と黎斗。かたや美女と連日イチャイチャ。かたや担任やら警察やらからお咎め。同じ生^{カンビ}物とは思えない。

「あ、あのー、れいとさーん……?」

護堂がビクビクしているのを見て、ようやく我に返った彼は本来の目的を思い出す。

「……あ。気を取り直して、これより草薙護堂は全男の敵だ地獄へ落ちろ断罪会を開幕するっ!!」

「「「おー!!」」」

「ではまず同志S!!」

「おう!! 被告は夏休み前半に根津三丁目商店街で姿を確認されていない。そして肝心のエリカ様と万里谷さんが――サルデーニヤ半島でバカンスを楽しんでいた。この二人が一緒に居る時点で被告が関わっていると推測される」

ああ、そういえば記憶操作して二人がバカンスしてる最中に遭遇しているという筋書きにしたんだっけ。などと思い出しつつ護堂の顔を見てみると、面白いぐらいに顔が変わっている。ここまで激変するのを見せつけられると機械で録画したい。そして某世界が丸見えな番組に送り付けるのだ。笑撃映像とか言って。

「ッ!?!、おまえら、なんでそのことを……」

まさか彼女たちの場所を把握されているとは思っていなかったの
だろう。これが普段の断罪会なら素知らぬ顔で通せたのだろうけど、
今回は運が悪すぎた。なにせこっちは現地で二人と遭遇しているの
だから。こんな芸当ができたのは直前で景品が豪華になっていたと
いう異常事態のおかげだ。もし今年だけ商店街の景品がぶっ飛んで
いたなどということを用意出来たらその人は素晴らしい霊視能力者
なのだろう。是非とも友達に欲しい。宝くじとかで無双できそうで
はないか。もっともそれは才能の無駄遣いというものだろうけど。

焦っている護堂が思わず漏らした言葉。それは黎斗達の発言を全
肯定するのと同様で、自分が二人と一緒に居たことを自らの口で証
明したようなもの。直後に気付き口を閉じたようだが、もう遅い。
二人だけで旅行に行ったんだ俺は知らん、などと言われれば証拠が
無い手前どうしようもなかったが、護堂の焦りに助けられた形とい
えばいいのだろうか。

「草薙、貴様あああああああ!!」

「今こそ、この色情魔に神の裁きを!!」

三馬鹿中二人が吼える中、黎斗は外に気配を感じ取る。さては担
任が鎮圧しに来たか――!!?」

「そこまでだ、下郎。随分好き勝手にやってくれたようだな」

ドアが開くと同時に、凜々しい声。最悪煙玉使用の覚悟をしてい
た黎斗だが、彼の予想を裏切って入ってきたのはリリアナだった。

「草薙護堂、ご安心ください。すぐにこの状態を打ち破って見せましょう」

「すまない、リリアナ。恩に着る!!」

「……ッ!？」

「……なんだこれ」

二言、三言交わす内に顔に朱が差し護堂から背けるリリアナ。断罪の場の空気がなんだか変わりつつある。口を挟む機会を逃した黎斗がやりとりを見ていると三馬鹿VSリリアナ論戦になってしまった。三馬鹿が押されているようだ。「一人で何が出来る!!」とか「ま、待ってくれ!!」とかどう考えても悪役のセリフですほんとうにありがとうございます。

「異議有り!! 草薙護堂は王道を歩くものに非ず! 彼は幾人も
の女子を弄ぶ外道。これまさに色魔の所行なり!!」

台詞が芝居がかってる。が、これは大ダメージが見込める発言だろう。どうかんがえても。リリアナもこれに反論できるとは思えない。勝負あったか?

「その程度の讒言で私を翻意させられると本気で思っているのか?
まったくもって、嘆かわしい輩だな……」

侮蔑の籠った彼女の瞳。これは正論、そう正論のはず。なのにそれでも間違っていると彼女は確信を持って言えるともいうのか。

「確かに彼は稀代の色好み。気紛れに婦女子と戯れるハレムの主人

であることは否定出来ない事実だ」

「うわお。認めた上でまだ言いますか……」

開き直りつぷりに黎斗はジト目でリリアナを見やる。それを認めてしまえばこの会の主旨も理解してくれそうなものだけれど。この状況で庇う彼女に尊敬の念を送ってしまう。逆境にもかかわらず頑張るね、的な意味で。「護堂Ⅱ色情魔」の図式は（本人以外にとっては）共通認識らしい。というか女の敵確定なのにこの人は庇うというのか。どんだけ情が深いんだ。いや、恋は盲目というやつだろうか？

「これがダメ亭主を健気に待つ女房に発展するんだな……」

延々と説教してくださるリリアナさんだが、どっからどう見てもダメ亭主を待つ女房のそれにしか見えない。堕ちると人間こうなるのか。恵那だけでなくエリカや裕理もこんなになってほしくはないものだ。媛さんは人生経験豊富だろうから（ほとんど引きこもりの可能性も高いけど）変な男に引かかる心配はないだろう。

「げに恐ろしきは護堂のオーラか……」

少々ピントのズレた思考をする黎斗の隣から「これが……調教……」だの「絶望したー！！」ハーレム公認に絶望したー！！」だの悲痛な声が響き渡る。だがここは公の場だ。黎斗としては変な単語は出さないで欲しい。誤解されそうですごく怖い。兎にも角にも彼我的実力差に愕然とする男たちだが、事態はここでは終わらない。というか、黎斗にとっての地獄はここからだった。

「あ、いたいたー。……つてれーとさん？ 変な格好して何やって

んの？」

「清秋院！？ 助けてくれ！！ 黎斗が突然襲ってき」

護堂がさっそく恵那に告げ口。焦った黎斗は口を封じようとするがもう遅い。

「ごっ、護堂てめっ！？」

「れーとさん……」

恵那の呆れの視線が痛い痛い痛い……！！ なんでここまで来て貧乏くじをひかにゃなんのだ！？ 神は死んだのか！？

「あの、恵那さん？」

そんな黎斗に救世主。突如恵那の後ろから疑問の声。この救世主は裕理か。

「ああ、ごめんごめん裕理。草薙さん、御取込み中失礼。イキナリで悪いんだけどさ、明日暇？ 裕理とデートに行かない？」

「デートだって！？」

「恵那さん！！ そんな私、まだ心の準備が……」

「んもう、しょうがないなあ。……れーとさん、どーせ明日暇でしょ？ 恵那と一緒に裕理のデート手伝ってよ。二人もコブ付きならいいでしょ？」

啞然とする男共を尻目に巫女様二人の話は進んでいく。そして、これが惨劇の幕を開ける。

「同志しいや黎斗、お前もか!!」

「ダブルデートとは良いご身分だなええ!?!」

「ちょっ、待てお前ら落ち着」

「お前だけは信じていたのに……!!」

ダブルデートは否定したい。がそうとられても仕方のない状況だ。恵那が頼んだのが自分でなく三馬鹿だったり他の男ならば黎斗自身も嫉妬側に参加していた自信がある。っーか潰す。そんな余談は置いておいて、脈絡もなくいきなりそんな話題を振られて困っているのに、この仕打ち。どんな対応が正解なのだろうか。こんなADVゲームがあったとしたらどのような選択肢が出てくるか。そこにきつとこの場を打開する活路がある――!!

「……男の争いって醜いな」

「ええ、全くです。草薙護堂。あなたもこんな輩にならないように」
冷静に眺める護堂とリアナ。彼らに言われるとすぐく腹が立つ、がこの状況では反論できない。男たちの友情は脆くも崩れ去り、残ったのは醜い同士討ち。

「え? 恵那さんはそれで良いのですか?」

「良いって良いって。裕理が頑張ってくれるなら、わざわざ私が参

加しなくてもきつとばあちゃんも許してくれるよ。おじいちゃまだってあんま乗り気じゃないし」

言い訳に終始する黎斗の耳は変な単語を拾い上げる。今聞き捨てならない単語が出てきた気がする。恵那の役目は裕理と護堂をくつつけるだけではないのか？　なんかとっても嫌な予感がある。

「恵那、それってどうい」

「てめえ既に呼び捨てで言うような仲なのかよ!!」

逆上した名波に揺さぶられる。頭が鞭打ちになりそうなほど激しく揺れる。頭が？げそうだ。ってかこのままだと？げる。抵抗しようにも頭がシェイクされていて動けない。これは正直、洒落になってない。

「うわああああああ!!」

突如奇声を上げた高木は、黎斗の奇声と同時に護堂を抱えて走り出す。その速度、さながら疾風のごとし。

「どわあああ!!」

意識が飛びそうな黎斗は、もちろん彼が走り出したことに気がつかなかった。彼が護堂を抱えていたことにも。常人の域を超えていたことにも。名波は黎斗を占めることに夢中で気がつかず。反町は絶望に打ちひしがれて膝をつき。高木の爆走を追跡するは恵那が一人。リリアナも裕理もこの展開を呑み込むことは難しかったらしい。

「……ふん、しょせんは低俗な輩だな」

「リリアナさん！ ……もう。水羽さん、失礼します。その……頑張ってくださいね？」

しばらくして硬直が解けた二人は教室を去る。護堂を探しに出かけたのだろうか。黎斗は結局、見捨てられたままだった。

「あゝあゝあああ！！！！！！」

男たちの涎と涙、汗と鼻水を浴びせられつつの揺らし攻撃は、一時間以上に渡って黎斗を苦しめた。結局彼が解放されたのは、騒ぎを聞きつけた担任が武力介入してから。黎斗の情けない悲鳴はそれまでひたすら校舎に響いて多くの生徒を怖がらせることになる。

§19 嫉妬団再び（後書き）

八月はあちこち電車でさまよいそうなので更新出来ないor遅くなる気がします……（汗）

お騒がせしますがよろしくお願いします、と冷や汗をかきながら

§20 急転直下（前書き）

書いてて違和感が出ること出る（汗

批判反論あつたらずひお願いします

一応だいぶマトモにしたつもりなんですが……

一ヶ月以上放置してましたが気長に待ってくださりありがとうございます
いましたっ

§20 急転直下

「いたた……」

「黎斗大丈夫か？」

惨劇から一夜明け、黎斗は重症の身体を引きずり登校した。未だ首が痛い。鞭打ちになってるのではないかと思わせる痛みだ。

「あいつら手加減しろよ……」

望み薄と知りつつ空を仰ぐ。ここで手加減してくれるようならば護堂の断罪会など起こるはずが無い。

「まあ、あれは自業自得ということだ」

「……くっ。更に護堂、お前デートの件断りやがって。僕殴られ損じゃん」

形勢不利とみた黎斗は話題を変える。何のためにあそこまでボコボコにされなければならなかったのだろうか。これが護堂と自分の格の違いとでもいうのか。ここまで来ると腹も立たない。というか、腹を立てたら昨日みたいにしっぺ返しがきそうで怖い。なにせ昨夜は家で恵那とエルにお小言を頂戴する羽目になったのだから。断罪会がバレてしまったせいで「人に迷惑かけちゃダメなんじゃなかったんですか？ マスター？」などと言われ針の筵。世の中絶対間違ってる。

（あれ……？）

だいたい、と言葉を続けようとした途端なんらかの呪力の気配を察知してしまった。学校に誰かが何か仕掛けたのか、と一瞬身構えたが攻性の物ではないようなので今は放置。こういう術式は中途半端に手を出すと痛い目を見る。担任に怒られた後で情報集めをして、それから方策を練ろう。説教中に発動しそうになったら邪眼でサクッと消去すればいい。流浪の守護起動中なら黎斗の関与した痕跡は残らない。最大の欠点は説教途中で逃げ出すことによる更なる説教だ。

「とりあえず、しばらく様子見だな」

犯人がわかるまで泳がせておこう。もし黎斗自身が巻き込まれないようだったら、最悪無視してしまう手もある。護堂にキツチリ働いてもらうのだ。別に、恨みからするわけではない。先輩からの試練である。私怨など一切合財全くない。

「どうした黎斗？」

「ん、なんでもない。いこ、護堂」

本来ならば今日は休日の筈なのに。三馬鹿の説明責任（主に二期開始後の海外旅行という名の無断欠席）とか本当に勘弁してほしい。責任が保護者にいかずにこちらへ来るとは。護堂は遅れた課題の提出に。黎斗は担任に怒られに。同じ休日出勤でも天と地ほどの差がそこにはあった。わざわざ月曜を待たず提出に来るとは護堂も物好きなやつだ。もっとも、その課題の提出期限は昨日なのだが。

「……終わった」

担任は予想外に優しかった。「水羽、お前も大変だろうが頑張ってくれ……」などと同情の視線と鰻重（大盛。味噌汁付き）を頂いた。御馳走様でした、とってもおいしかったです。どうやら担任も三馬鹿には手を相当焼いていたらしい。先生と妙な仲間意識が生まれるとは。

「しっかしなんで教頭先生があんなに厳しいんだ？」

担任よりも教頭の方が厳しいとかそんなことがありえるのだろうか。教頭にも三馬鹿監督として認識されていたのだとしたら泣けてくる。もし教頭が彼らを警戒しているのなら、三馬鹿は城南学院のブラックリスト
要注意生徒殿堂入りではないか。黎斗自身も巻き添えを喰らっている可能性が高い。

「勘弁してくれ。あいつら暴走した時は無駄にカリスマみたいなの実行力があるからなあ……」

嘆息しながら空を見上げる。黒い太陽が燦々と輝く。――輝く？

「……って、黒い太陽!？」

神経を研ぎ澄ませて周囲を辿る。感じるのは須佐之男命の、力。吹き荒れる暴風も全ては須佐之男命の力の一端か。

「どういふことだよ、コレ!？」

階段を一足飛ばしで駆け上がる。屋上に飛び出て外を見渡す。見晴らしの良いところまで移動せねば。屋上への扉に鍵がかかっているがピッキングで解決。良い子は真似したらいけません。術の中心は何処だ……？

「術式削除しときゃよかったなこりゃ」

こうなってしまうては後の祭りか。一番高いところから外を搜索していると、派手にやりあう少女が二人。

「恵那とエリカあ!？」

どうしてこうなった。そう叫びたいのを必死にこらえて黎斗は屋上から飛び降りる。本当は目立つから飛び降りには却下したかったが背に腹は代えられない。一刻も早くあの二人を問い詰めるしかない。学園で争われたら平和な日常を謳歌することが出来なくなる。学校が吹き飛んだらニート生活に逆戻りだ。

黎斗が着地した時、事態は更に取り返しつかないことになっていた。大地に出現していた謎の黒い何かに、あろうことか二人が飛び込んで行ったのだ。彼が駆けつける前に、黒い何かは消滅した。

「え、ちょ……」

何が無謀なことを。エリカだったらこんな危ない橋を渡ることはないと思うのだが、これはどういうことだろう。未知の領域に突撃するなんて。普段の彼女には似つかわしくない行為だ。

「……」

行かなければならない事情があったとしたら。たとえば――――駄

目だ思い浮かばない。

「困りましたねえ。黎斗さんどうします?」

幽世に行って須佐之男命を問い詰めようか、そんなことを考える黎斗に呑気な声が後ろからかかる。

「甘粕さん。これは何がどうなっているんですか?」

「わかりませんよ。失踪する瞬間は見ていませんでしたから。気配を辿ってきてみたらこんな有様でして。断片的にでも見ていらっしやった黎斗さんの方が詳しいのでは? 黎斗さんは見ていらしゃったんでしょう?」

「当てにならねえ……じゃあさ、甘粕さんはこれなんだと思います?」

”失踪する瞬間は”ということはそれ以外なら見ていたのだろう。そんなことを聞こうかとも思ったが、流石にそれはないか。

「まったく、スサノオは何考えてんだか」

「おそらく日本に初めて現れたカンピオ」

「まって、なんで護堂が出てくるんですか? だったらエリカさんと恵那を拉致する必要はないですか?」

護堂を連れて行けばいいじゃないか、と続ける黎斗に対し、甘粕は微妙な表情をする。

「草薙さんがまず行方不明になりまして、次いでお二人という流れなんです……もしかやご存じない？」

「なん……だと……」

あらあら、などと肩を竦める甘粕を無視して取り出すは携帯電話。須佐之男命に電話を掛けようと試みる。裕理を嫁入りさせて護堂に首輪をつける、というのが黎斗の予想だったのだが何かがおかしい。

「電話に出んわ……」

「確かに残暑は厳しいですがオヤジギャグは間に合ってますよ」

思わず零れた呟きを、冷ややかな目で見つめる甘粕。本来この状況は有り得ない。これは携帯電話を用いて念話もどきを行使しているに過ぎないのだから。ましてや相手は須佐之男命。”よほどの”状態でもない限り、音信不通といった事態になるはずがない。それに彼はここまで派手に動いておいて無視を決め込むような性格ではない。

「魔力妨害してるのは、誰？」
ジャミング

軽口を返してきた甘粕の顔が一瞬で変わる。

「妨害工作ですか？ ……我々にはわかりかねますが。お偉い様方に通じている黎斗さんの方が詳しいのでは？」

どうも事態が妙な方向へ動いている気がする。何故恵那とエリカが争っているのだろうか？

「つてかまずスサノオが果たしてここまでするか……?」

須佐之男命がこんなに大っぴらに動くとは、考えにくい。護堂の存在を彼から聞いたのは結構前だ。行動を起こすにしては遅すぎる。彼が本気なら夏休みの前に仕掛けるはず。

「ヤツは本気じゃない? でもそうだとしたらこの遊びには手が込みすぎてるよなあ。今スサノオと連絡がつかないことも説明できない。僕をからかってる?」

頭をガリガリかきながら悩む。本当、頭脳労働は苦手だ。脳筋万歳。敵が明確ならそいつを潰して終わりだが、今回はそう優しくはなさそうだ。

「……黎斗さん、少しよろしいですか?」

振り向いてみれば、今まで傍観一方だった甘粕が動く。何か名案があるのだろうか。

「今、祐理さんをお呼びしました。もうじき到着します。リリアナさんもいらっしゃるので、お力をお貸し願えないでしょうか?」

荒事になっても黎斗さんとリリアナさんが居ればなんとかなりそうですし、と語る表情は忍者の顔。サラリーマン

「んー……」

アッサリ承諾すると思っていたのだろう、甘粕の顔が不審気に歪む。といってもほんの少しだけだが。

「……何か不都合でも？」

既に非日常側であることがバレているのだから、協力要請されることは予想出来ていた。しかし一緒に活動すると手加減が非常に難しい。今になって思えばサルバトーレ・ドニの時は正直やりすぎた。雑魚を装い適当なところで敗北しておけばこんな厄介毎に巻き込まれずにすんだだろうに。反省はしていないが後悔はしている。

（甘粕さんや万里谷さん、リリアナさんを守りながら権能封印行動ってどんだけだよ。難易度ベリーハードもいいとこだ。精神汚染使^{ディオニユス}うには甘粕さんが邪魔だしなあ）

既に荒事が起こらない可能性など脳内から抹消した。勘が戦いを感じ取っているし。個人的には単独行動がベストなのだけれど。単騎突撃で痕跡を残さず敵を消滅させれば解決だし。いっそ、古老の意向云々とか言ってしまうのか。そうして傍観に回るのも（若干後ろめたいが）また一手。

「そしたら問題は恵那か。あんの娘さんは……」

しかし、恵那が関わっている以上傍観という手段は最初^{ハナ}っから消去せざるを得ない。

「エルは家？　まあ、居たところで非戦闘員だからあんま変わらんけど。……この場合非戦闘員じゃなくて非戦闘狐？」

「……失礼ですね、マスター」

「うわお!？」

降ってわいたように現れた狐様に、黎斗は驚きの声を上げる。いくら思考していたとはいえエルは素人同然である。素人相手にここまでの接近を許すとは。

「マスター、媛様から伝言です。恵那さんとエリカさんが現在交戦中。草薙様は須佐之男命様のお屋敷です。媛様がなんとか取り持って下さるでしょうが最悪、お二方の方でも戦闘が勃発するお覚悟を」

それは、悪夢のような内容で。

「うっそお……マジかよ」

「途中で念話が途切れた為今現在の状態は不明です」

「途中で切れた？」

エルは途中で切れた。黎斗は最初から繋がらなかった。この差は、何か。

「はい。ここに到着する直前に通信途絶しました。以降繋がる気配がありません。媛様の身に何かが起こった、とは考えにくいですが恵那さんが神懸かりを用いた際の呪力の乱れとかが原因だと思うのですが」

「それはない。僕はスサノオと最初連絡取れてないし。もしエルが正しいなら最初は連絡とれるはず」

「須佐之男命様に嫌われた、とか喧嘩中とかは？」

「それはないと信じたいなあ……　って、会話が脱線してきてるからっ」

この周囲で、恵那以外によって結界が張られた形跡も呪術が行われた痕跡も無い。

「鍵となるのはやっぱ幽世^{あっち}か」

明らかに黎斗と須佐之男命達の接触を封じようとする動き。こうなれば周りを気にせずに戦える単独行動一択。恵那もエリカも須佐之男命も護堂も全部放置。玻璃の媛に丸投げせざるを得ない。

「甘粕さん、エルを連れて行って下さい。コイツとは特殊回線があるので一応通信が途絶えることはないです。多分。きっと。めいびー」

「構いませんが……お一人で大丈夫ですか？　あと、エラく不安な言い方ですな」

謎の存在のターゲットが黎斗であることを理解したのだろう。甘粕は反論して来ない。こちらの身を案じてくれることに感謝し、術の準備。

「こっちは伊達にスサノオの盟友やってないってーの」

「マスター……御武運を」

「まだ戦うなんて確定してないんだけどなあ。可能性が濃厚なだけ」

転移する黎斗が最後に見たのは、心配そうな狐と会社員^{にんじや}。転移術になんらかの干渉が入ったのを認識し、彼は一人顔をしかめた。

§20 急転直下（後書き）

デートもどき案（という名の黎斗&恵那による護堂&エリカデートの覗き見）とこの案2択だったりしたんですが「（恵那が妨害とかなしない性格なので）覗きもねえだろ」的な考えの下こっちの案へ

……どっちにしろ後半部は変わらないんですが

さて、もう一回原作5巻以降を最終確認。矛盾が出なければ続行、出たら……やっぱり続行します、すいません（爆

§21 激突（前書き）

延々と続きそうで收拾が着きそうになくなってきたのでここで一旦。
超展開要注意です

……石ころを投げられない事を祈りつつ（何

§21 激突

「……ここ何処よ」

転移した黎斗がついた先は見知らぬ土地。転移の術式に割り込みを仕掛けてくる相手だ。油断はできない。しかしなぜこのような森の中なのだろう。

「てっきり罠張って待ち伏せしてるかと思ったんだけどなあ。ま、どっちでもいっか。とりあえずスサノオのトコまで歩きますかね」

のんびりと歩く。周囲一帯に妙な力を感じているので油断は出来ない。邪眼なり力押しで突破、というのは最終手段にして先ずは探索と洒落込もう。

「……誰？ さっきからこれみよがしに殺気ばかり放ってきてさ。って、あー。変な洒落飛ばすハメになったじゃん」

歩き続けて数分。やむことなく、増え続けていく殺気それに黎斗はとうとう痺れを切らした。呟く黎斗の周囲で、無数の影が蠢く。随分な数が居る。三柱の別格かみさま以外は雑魚と判断し、数えるのをやめてしまった。三十以上も数えていられるものか。

（これまた一介の高校生相手にたいそうな布陣で）

相手は殺る気満々のようだが、黎斗は狙われる覚えがない。何処の勢力なのだろう。第一これだけの神様と取り巻き軍団が行動を共にすることはありえるのか。野生の神様なんて大抵の場合他の同類カンレオーネが倒してしまうし。これは一種のレアケースということで納得したほうが良さそうだ。長年生きてきた彼にとっても複数の神が集団で行動していたことなどランスロット達くらい（これですら二人だった）しか見ていない。

「貴方様方はどちら様ですか？ まつろわぬ神の皆様とその近衛の方々とお見受けしますが」

出来るだけ穏便に済ませようと言葉を選んだ黎斗だったが、その努力は虚しく水泡に帰す。

「水羽黎斗。まさか御老公の盟友が貴様のような神殺しとはな。今まで貴様の存在が秘匿されていたのだ。公に現れたときより怪しいとは思っていたが。信じたくはなかったものだ。太古に襲来し御老公方と戦ったのは、貴様だな」

フードを被った男に賛同を表す声が、周囲より上る。

「「「……………」」」

怨嗟の声に背筋が冷える。ぼそぼそとした声を聞き取ることは難しいが、どうせ聞いて気持ちの良い内容ではないだろう。それに呪われるように言われるのはやっぱり気味が悪い。低音でのコーラスとなれば尚更だ。

「怨嗟の眩きかなにか知りませんがやめてくれませんか？ それと死ぬ気はございませんからあしからず。んで要件は、何？ 今ちよっ

と忙しいから出来れば後にしてほしいんだけど」

とりあえず口調が怪しくなってきたが、諦めずに交渉を申し出る。御老公なんて言葉を用いる以上古老のメンバーだろう。須佐之男命以外に神が居るとは思わなかった。だが、須佐之男命の下で意思は統率されている筈。この集団も突然暴力には訴えないだろう。過剰ともいえる武力は威嚇に過ぎない、筈。今一自信はないけれど。

「要件？ 汝が命、貰い受ける。腑抜けになってしまわれた御老公も、貴様を殺せば元に戻ろう」

「は？」

こいつは今、なんといった？

「……なんつー回答だよ。警戒していなかったツケが回ってきたのか？ 足元掬われた形になんのか？ コレ。どっちにしろまさかの事態だなヲイ。僕の命が欲しい？ だが断る。秘儀、水隠れの術！」

名前こそ格好良いがただ単に泳いで逃げるだけである。平泳ぎでじゃぶじゃぶと川を泳ぐ。流れが急なせいなのか泳ぐというより流されている気もするが、相手の姿がもう米粒大だ。こういう時に逃亡系の権能があるやつらを羨ましいと心底思う。遁術で逃げても神様達相手だと無効化されておしまいになりかねない。おそろく取り巻き軍団は無効化系の呪術を大規模展開するための人員だろう。三十六計逃げるにしかず。

「ははははは、戦略的撤退っ！ さらばだー！！」

黎斗の勝ち誇ったような奇声が、周囲に響き渡る。

「あいつらしつこい！」

大樹に寄り添うように小休止。黎斗包围網は止む気配がない。寧ろ酷くなっている気がする。

「スサノオ早く気づいてくれないかなあ。このままだとマジで僕死ぬぞおい」

このままでは逃亡中に殺しつくされる。もう三回くらい殺されているし。ここまでされたら正当防衛が成り立つんだから反撃しようか。だが反撃して良いものか。

「神祖だか精霊だか知らんけどあの集団ホントどうしよう。媛さんや坊さん、スサノオの友人居ないといいんだけどなあ。ウツカリ殺しちゃったら気まずいことねえしなあ。手加減するには神様が邪魔だし。……っつかさつきからなんで僕の居場所わかるわけ？」

背後から飛んできた矢を躲す。銃などといった近代兵器でなく弓なのが歴史を感じさせてくれる。もっとも、長距離弾道ミサイルやら対人地雷など使われないだけマシかもしれない。

しかしさつきから逃走しているのにそれを全て察知しつづける彼らの情報網はどのくらいの規模なのか。流浪の守護で気配を遮断し隠行の術も完璧にしている筈なのに。

「……これは異なことを。ここは幽世だぞ。この程度もわからぬとはこの羅刹の君は脳味噌も無いらしいな」

「……望めば行けるんだっけか。すっかり忘れてたわ。って、じゃあスサノ」

「無駄だ。大規模な結界を展開している。いかに神殺しとて、短期間で破ることは叶わない。御老公の呪力を借りることにより発現させる。貴様ら専用のとっておきだ、そう簡単に破られはせぬぞ。光栄に思え」

「ってまでや。とっておきの結界？ スサノオに気づかれる前に？ この状況作り出したのはお前らか」

「清秋院も存外に役に立つ。まさか小娘を動かすだけでこうも簡単に大物が連れるとはな。上手い具合に日本に生まれた神殺しとも接触できておるしの」

「清秋院の本家をお前らが唆したのか？ 媛さんや坊さんの話聞いた限りだと随分私の強そうな人だからなあ、って……ん？」

日本には（公式には）カンピオーネがいなかった。護堂が記録上初めて。その護堂の周囲はエリカ、祐理、リリアナと美少女が勢ぞろい。三人の内過半数は外国の魔術結社。のこる万理谷も格としては清秋院より下に位置する。そして孫娘（恵那）も十分美少女である。ゴーイングマイウェイ（仮）な最高権力者ばっちゃんがもし存在したとするならば、この状況でどうでるか。

「……スサノオ、押し切られたか？ 恵那も護堂の嫁に、って清秋院家党首並びに複数神様やら大魔術師やら精霊やらから一度に言わ

れたら、押し切られるか。スサノオはNOと言える日本人……もとい日本神^{にほんじん}っぽいけど数の暴力相手じゃなあ。オマケに庇うにしても強い理由が無い。僕が人間である以上僕のトコに今までどおり、なんて案は無いも同然だしな。そうなれば日本嫁二名vs外国嫁二名のドロドロ合戦も構図がわかりやすくなる。あの三人は拮抗しているから、恵那が神懸かりでもしないかぎり戦線は膠着。でも恵那が外国嫁どっちかとガチンコ始めたら護堂が絶対邪魔をする。神懸かり使うのも護堂が阻止出来る……かなあ？ ま、護堂の相手が出るのは神様^{アンタラ}くらいのものだろうから……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：と接触してるんだっけか。これでえーと……」

言ってて思った。思考がズレている。現状がどうして起こったかなのに何故護堂の嫁論評を繰り広げにやなんのだろう。もし、相手がこの現状を黎斗^{じふん}の殺害に用いるとしたら。媛が言っていた事を思い出す。公開用に書いた権能解説書没案が盗まれていたことを。これを相手が持っていたならば……？

「……さてはお前らこうなること予想済みだったな？ 護堂の気配が消失すれば僕が出てこざるをえない。スサノオ達は護堂にかかりつきりで僕はノーマーク。幽界^{ユウカイ}の性質を利用すれば事前に色々仕掛けた狩場に僕を誘導できる。僕の情報の一部は入手しているのだからソレを元に作戦を立てる。神様の名前しかわからんやつでも大体の推測はつくだろうしね。あとは——殺すのみ」

ほう、という呟きはボスカ、一般雑魚^{かみさま not かみさま}か。

「頭が回らないワケではなさそうだな」

「……おい、何を喋っている。御老公に気付かれる前に殺さねばならんだ。無駄口をたたく暇はない」

「……手加減出来る自信ないんだけどなあ。おーい、周りの人ー。こんなセコイ奴らに付き合っ
て命落とすことないぞー？」

「驕るなよ、神殺しが。貴様は我らの手の内だ。全ては今日、この時の為
に。先月入手できた貴様の情報も反映した我らに負けは無し。わざわざ貴
様に教えているのも、貴様の顔を絶望に染めるため」

「かつこいーセリフだーありがとー。しかもその口ぶりだと媛さんが
無くした資料はそっちに回ってたのね。人の部屋勝手に漁るコソ泥に天罰を。
……来たれ煌めく色無き柱。神をも下す灼熱を以て。その御光で大地を
飲み込み。全てを滅し虚無へと帰さん」

狙うは先手必勝。カタストロフィ破壊光線で消滅させる。取り巻き軍団が死ぬであ
ろうことを考えると正直この手段は採りたくはなかったのだが――

「悪いけどこっちもまだ死にたくないんでね。……消えろ」

「貴様がな」

天より放たれた光の柱が敵集団を呑み込むと思われた刹那、黎斗を
灼熱の光線が襲う。

爆風が吹き荒れ砂塵が舞い散る。簡単に神殺しを殺せたことで、
周囲からどよめきが巻き起こる。

「待て、落ち着け皆。奴は何度でも蘇る。引きずりだし、奴の力で本命の結界も完全起動を果たした。たここからが本番だ。手筈通りに行くぞ」

「了解です。では頼みますよ、迦具土、大国主。貴方達が要だ」

「スクナビコナの仇は、必ずとる」

「片鱗が見られた権能から順次破壊するが、やつとて神殺しの端くれ。全部破壊できると思うなよ。貴様らは始めろ」

「」「はっ」「」

迦具土は、持っていた鏡を八雷神に渡す。死の光線を反射させた鏡を。それと同時に、周囲の集団が呪術を始める。黎斗に対する、破魔の術。結界展開かつこれだけの質・量ならば、権能でもかなり減衰させられるだろう。まして相手は神殺しの絶対的な耐性を持たないのだ。

「……くっ、今のは何よ」

「答える義理なし」

「そりゃごもつともで。こっちも期待してなかった、けど、ねえ！」

大国主の剣筋を躲し、見切り、反撃を叩き込もうとして、失敗。いつの間にか背後によられた八雷神に、羽交い絞めにされ動きを封じられる。左の死角から接近されたか。絡みつき分かれる八匹の蛇は、黎斗の抵抗を容易く封じる。

「くっ、やっぱ無理か。ってかさ、八匹の蛇になって襲ってくるとか反則だと思うの。しかも僕蛇苦手なんだけどこんな仕打ちって嫌がらせですかそうですか」

軽口を叩いてはみせるものの正直辛い。こいつには魂直撃や対屍ドキラー特攻でもあるのだろうか。電気を纏う八匹の大蛇は黎斗の行動を許さない。触れた所から身体が腐食し剥がれていく。ロンギヌスの治癒だけではいずれ致命的になる。早く再生の力を使うべきなのだろう、が使わないのは本能が「使うな」と叫んでいるから。

「この期に及んで余裕だな」

そう言う迦具土の気配が変わる。——こいつは、ヤバイ。

「天空よ、我が名の下に裁きを与えよ。未来より迫る滅びを縛れ。左に剣を。右には鎖を。我が腕かいなを贅とし汝を封ぜん」

破滅の呪鎖具現化。対象は迦具土。起動方法・結界。結界は通常形式の捕縛と異なっており黎斗側から伸びた鎖が対象を捕獲する訳ではない。大地から鎖を召喚し相手を絡め取るのだ。こうすることで黎斗の攻撃範囲レンジに入れることが出来なくても、相手の位置を固定できる。孤立している敵などに用いること乱戦用の派生型バリエーション。外部からの攻撃に弱いのは変わらないが、相手が一人だけ離れていて、残りが全て黎斗と交戦しているならば、他の敵に鎖を破壊されるより黎斗が相手を殺す方が早い。

今がまさにその状況。迦具土以外の神二柱はこちらにつきつきりだし、雑魚軍団は何やら行動を開始しているがおそらく間に合わない。だから、破壊はされない。相手が行動を起こす前に月読の権能イモータル”時詠”で時間加速、ロンギヌスで撃破。

そんな黎斗の目論見は儼くも崩れ去ることになる。

「やれ、カグツチ!!」

「対象、神殺し。対象、破滅の呪鎖。グレイヴニール逝け!」

迦具土より放たれるのは不吉な言葉と三日月の劫火。邪眼の影響で弱体化しつつも斬撃のように飛んでくるそれを、八雷神に拘束された黎斗は回避する術を持つはずもない。

「仲間まで!?!」

「安心しろ。今のは貴様専用だ」

背後から耳に声がかかる、と同時に黎斗の身体を劫火が焼く。邪眼で消去しきれなかった分が身体の中に吸い込まれるように入っていく。

「……?」

痛みは、無い。違和感を探る黎斗を、大国主の剣が襲う。

「これでまた一回だ。死ね」

とっさに黎斗は右腕を上げる。壊死しているはずの、右腕で。血飛沫が舞い散り、視界が朱に染まる。この位なら治癒でロングキス十分回復させられる。

「はっ、そう甘くはないっての!」

緩んだ一瞬を逃さず拘束から離脱、神達から距離をとる。

「しかしマジでどうなってる？」

破滅の呪鎖が消滅している。右腕も、普通に存在している。破滅の呪鎖を発動した時点で右手は壊死する。だが今回は壊死してはいない。ほんの僅かに死んでいる部分があるが、それだけだ。もう一度、破滅の呪鎖を発動させようと試みるが――不発に終わった。

「権能封印系の何か、か？　だがそれなら壊死は残るはずだ。……まさか権能破壊？」

さつき超^{ヤマ}再生の力を使うな、と勘が言っていたのはこういうことか。脳内警告が鳴りっぱなしだが、気にしてられる余裕などない。権能破壊系能力の具体例が護堂しかいないので似たような能力と推測する。もっと危険な能力ならご愁傷様だ。

「最低でも一定期間権能無力化、ってトコ？　こりゃ下手したら死ぬな。本腰入れないと」

戦場において、黎斗は数百年ぶりに冷や汗を流す

§21 激突（後書き）

僕「いつから古老にスサノオ以外神が居ないと錯覚していた？」

……とか言ってみますが原作に記述あったらどーしよう、とビクビクしてます（苦笑）

おそらく無いと思うんですが、あったらごめんなさい。理解不足です。

ま、その時はオリ設定ということかどうか一つ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5043q/>

魔王と魔王の友達と

2011年10月1日21時09分発行